

ストパンのVRゲームでウィッチになる話

通天閣スパイズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りの話。リアルのあれこれと、ちよびちよび書き進めてた小説のデータとプロットが飛んだことへの現実逃避から生まれたもの。

目 次

【祭りの】ストパンVRについて語るスレ part 52 【始まりだ】

キャラクター・メイキング	1
チュートリアル 1	13
チュートリアル 2	20
インターミッショーン 1	28
インターミッショーン 2	37
ガリア撤退戦	44
?	55
?	63
?	63
?	74
?	84
?	94
?	105
?	115
?	124
?	132
?	139
?	149
?	158
?	166
ミッション 1	173
インターミッショーン 1	173

【祭りの】ストパンVRについて語るスレpart5

2 【始まりだ】

【祭りの】ストパンVRについて語るスレpart52 【始まりだ】

2 1 名前：名無しのゲーム好き

発売日キタ━━━━━ツ!!!!!!

2 2 名前：名無しのゲーム好き
キタ━━━━━＼(。丶。)／—————!

2 3 名前：名無しのゲーム好き

お前らもちつけ、まずはパンツを脱ぐんだ

2 4 名前：名無しのゲーム好き

>>23

パンツじやなくてズボンだろ！

2 5 名前：名無しのゲーム好き

ああ、パンツじやないから恥ずかしくないな

2 6 名前：名無しのゲーム好き

今日のために有給とつた。

今日は一日中VRゲーム三昧だな……

2 7 名前：名無しのゲーム好き

尼で発送確認。今日の正午には着く

といいな

28 名前：名無しのゲーム好き
ここまで発売日を喜んだゲームは久しぶりだ。メガテン5以来かな

29 名前：名無しのゲーム好き
あのストパンをVRで楽しめる。まったくいい時代になつたものだ

30 名前：名無しのゲーム好き
△△△△△

しかもフリー・シナリオだろ、ホントに技術革新様様だよな

31 名前：名無しのゲーム好き

- ・フリー・シナリオ
 - ・容姿性別を問わない多種多様のキャラクター・マイкиング
 - ・アニメ風のタッチを崩さないままにリアルを追求したグラフィック
 - ・迫力の戦闘
 - ・非戦闘員プレイ可能
- ・VR技術による疑似感覚により、ゲーム内でもリアルな五感をあなたに
- ・原作キャラを含むほぼ全てのNPCと恋愛可能
 - ・アカン、神ゲーやこれ

ク

32 名前：名無しのゲーム好き
キャラクター・マイкиングって、リアルの性別とか関係なかつたよな。
つまり中年のおっさんの俺が美少女ウイツチになつて、501とゆりゆりするのも可能というわけだ

33 名前：名無しのゲーム好き

>>>32

超高性能A.I.搭載でNPCもリアルな思考するから、ゲームだからってハメ外すとドン引きされるけどな

34 名前：名無しのゲーム好き
え？ サーニヤに冷たい目で見られるだつて？

35 名前：名無しのゲーム好き
>>>34

なるほど、ふむ。……続けて？

36 名前：名無しのゲーム好き
>>>34—5

エイラ乙

37 名前：名無しのゲーム好き
男キャラを作つてハーレムするもよし、女キャラで原作に絡みなが
らpr prするもよし。
まったく、ストパンVRは最高だぜ！

38 名前：名無しのゲーム好き

キャラメイクで自分好みの女キャラを作つて、男キャラといちゃつ
かせて寝取られ感を楽しむプレイに一票

39 名前：名無しのゲーム好き
>>>38

お前の楽しみ方はおかしい

40 名前：名無しのゲーム好き

俺、もうどんなキャラ作るか決めてるんだ

41 名前：名無しのゲーム好き
どんなん？

42 名前：名無しのゲーム好き
▷▷41
コマンドー

43 名前：名無しのゲーム好き
ストパン世界にシユワちゃんはあかん WWWWWWW

44 名前：名無しのゲーム好き
来いよネウロイ、怖いのか？

45 名前：名無しのゲーム好き
来いよネウロイ、武器なんか捨ててかかつてこい！

46 名前：名無しのゲーム好き
ネウロイ化大和「ヤロウテメエブツコロツシャー」

47 名前：名無しのゲーム好き
▷▷46

すいません帰つてください

48 名前：名無しのゲーム好き
まだ0時ちょっと過ぎなのに元気だな、お前ら。実際にゲーム届く
まではまだ大分あんただろ

49 名前：名無しのゲーム好き
▷▷48

栄養ドリンク飲みながらテレビでストパンを再生してるので問題
ない

50 名前：名無しのゲーム好き

>>48

朝までにプレゼンの資料纏めなきやいけないけど問題ない

51 名前：名無しのゲーム好き

>>50

(あれ？ こいつ洒落にならないんじゃね？)

キャラクターメイキング

「ちわーつす、宅配便でーす！」

三三三

「…………」
佐藤様ですか？」

「はいどうも、ありがとうございました！」

ガチャヤリ、と。配達員の青年が別れの言葉を言うが早いか、俺は即座に玄関の扉と鍵を閉め、今配達されたばかりの荷物を抱えて自室へと向かう。

距離ではあるが、一刻も早く目的を達したいという欲求が俺の脳内を占めていた。

勢いよく自室の扉を開け、それを閉める時間も惜しいとばかりにすでにセットティングされているゲーム機のそばに座ると、急いでいるが故の少々乱暴な手つきで荷物の包装を開いてゆく。段ボールを開け、隙間を埋め尽くすように入っている大量のチチチチを退かすと、中には見覚えのあるアニメ絵が印刷された箱が一つ、その存在感を漂わせて入つていた。

おそるおそる、出来るだけ傷つけることのないようにその箱を取り上げ、上部の蓋を外す。すると中に一冊の厚い冊子と、幾つかのグッズ、そして箱と同じような絵が印刷されたケースが一つ入っているのが見えて。俺はそのケースを取り出すと、本を開くようにケースを左に開け――

中のゲームディスクが見えた瞬間、思わずガツツポーズ。

製作企画が出た時から楽しみにし、期待をスポンジのように膨らませながら様々な情報を集め、発売日を今か今かと待ち望んでいたゲーム。今流行りのVRゲーム、その『ストライクウェイツチーズ』を原

作にしたゲームをようやく手に入れて、俺はここ数年で一番の喜びを感じていた。

VRゲームとは、文字通りVR技術を使ったゲームのことである。頭をすっぽりと覆うフルフェイス型の機器を使い、データ上で作成した感覚を脳に現実だと誤解させることで擬似的にリアルな感覚を楽しめる。それがVR技術であり、データの世界にもう一つの現実を作り出す技術であった。

概念自体は20世紀から存在していたが、技術レベルの問題により21世紀まで開発はなされなかつた。そしてそれが民間レベルにまで普及したのは、なんどここ最近——21世紀後半の頃。軍事機密だの、高額だつた機器の低価格化への試行錯誤だと色々あつたらしいが、今となつてはゲーム機にも使われる一般的な技術だ。小学生がクリスマスプレゼントにVR機能付きのゲーム機を買ってもらえるくらいに普及した、今年で二十歳を迎えるバイト暮らしお大学生の俺にも手が届くお手軽品である。

そしてこのゲームは、VRゲームで今年一番のサブカルチャー界隈からの注目を集めている話題作。『ストライクウイッチーズ』という21世紀初期の名作アニメを原作にした、自分が一人のキャラとなつてそのアニメの世界に入り込めるゲーム——ファンの間では『ストライクウイッチーズVR』と呼ばれている、ファンにとつては堪らない一作だ。

何を隠そう、俺もストパンファンの一人である。初恋はサーニャ、初めて買った工口本は同人のもつひじ本、バイトの初給料で買ったのはエイラの抱き枕という生え抜きのストペニストである。

このゲームをどれ程待ち望み、期待し、今日という日が来るまでの時を長く感じたことか。あの苦しみはなんとも、筆舌に尽くしがたいものであつた。

しかし。しかし、である。ゲームを手にしたこの今、最早何を苦しむことがあろう。何を待つことがあろう。発売日までの苦行が報われる、その時がやつて来たのだ。

今こそ立てよ、立てよ国民。苦しみを元気に変えて、ゲームをプレイ

し、思う存分に楽しもうではないか。ハイル、ジークハイル。クリーグクリーククリーク。

「……ぐふ。ぐひ、ウエヒヒヒ」

興奮でハイになつてゐるせいだろうか、思わず変な声が口から漏れ出した。

外では優しい真面目なお兄さんで通つてゐる俺が、自宅で一人になつたらこんな風になると知つたら大学の友人達はどう思うんだろうなあ、等と。そんな益体もないことを考えつつ、俺はケースからディスクを取り外し。それをゲーム機に入れると同時にゲーム機に接続してある機器を頭に被り、VRシステム——身体を一種のトランス状態にさせ、感覚を現実からデータの世界へと移す機能のスイッチをオンにすると、次の瞬間には俺の意識はゲームの世界へと飛んでいた。

まず初めに、どれだけの資金とアニメーターのライフをコストにしたのか想像もつかないクオリティのOPアニメが流れ、一分半ほどのその至福の時間の次に来たのは、青空の背景にタイトルロゴというシンプルなスタート画面。未だに止まぬ興奮にせつつかれながら画面を切り替えると、今度は幾つかの項目が並んだメニュー画面に切り替わった。

『ニューゲーム』、『コンティニュー』、『設定』、『アルバム』、『オンライン』、etc。ゲームを多少知つてゐる者にはお馴染みのそれらを見て、俺は迷わず『ニューゲーム』を選択した。一番最初のプレイだからというのもあるが、細かなもので時間を潰すよりは一秒でも早くプレイしたい、という気持ちによるものである。それで多少後悔することになつたとしても……まあ、それもまたゲームの醍醐味、というものであろう。

『キャラクターメイキングを開始します』

ゲームを開始すると、自動的にキャラクターメイキングが始まつた。

まず性別を選び、年齢を選び、出身地を選び、開始時の立場を幾つかから選ぶ。そしてメインでもある容姿の作成に移り、それを終える

とキャラクターの名前の入力画面になつて、最後に初期ステータスとスキルを決定する。前情報通り実に自由度の高いものであり、その気になればこれだけで一日潰せそうなほどのクオリティだつたが、俺は予め決めていた通りのキャラクターをさつさと作つていつた。

性別は女、年齢は14、カールスラント生まれのカールスラント空軍所属航空ウイツチ。緩くウェーブがかかつた金髪を肩まで垂らし、未だに子供臭さが抜けない童顔とは裏腹に発達したスタイル。

正しく美少女、と言つて差し支えない——あえて形容するならば、どこぞのエロゲのキャラが軍服のコスプレをしているような、そんなどこかアンバランスな魅力を持つたキャラがその作成したキャラクターである。

発売日までの悶々とした気持ちを抑えきれず、先走った妄想を詰め込んでキャラクターの概要を予め作つてしまつた結果ではあるが、いやなんとも、いざ作つてみると悪くない。むしろ非常に魅力的な、個人的にはなんとも心惹かれるキャラクターに仕上がつていた。

そしてゲームとはい、自分がこんな美少女になるのだと思うと、これまで何とも言えない興奮を覚えてくる。ストパンの主役は女の子だろう、ということで軽い気持ちで決めた性別だつたが、今思うとあれは英断だつたのかもしれない。

『キャラクターの名前を入力してください』

続いての名前入力も、予め決めていたものを入力する。

『フランツイスカ・ヴエラ』——ストパンらしく実在のエースパイロットの名前をもじつたものを入れて、決定。すると今度は六つの項目に分かれた表と、その項目それぞれに付いた十一の矢印が現れた。

- ・体力：10
- ・魔力：10
- ・器用さ：10
- ・素早さ：10
- ・運：10
- ・ボーナスポイント：100

見ても分かる通り、ステータスの決定画面である。おそらくこのボーナスポイントと書かれている100ポイントをそれぞれに割り振つて、最初のステータスを自由に決めろということなのだろう。この手のテンプレとしては、安全策として全体を満遍なく上げるか、あるいはどれか一つに極振りしてロマンにかけるという二つの方針がある。ファンの間でゲームの攻略が進み、プレイヤー達のデータと経験を集めて効率的な『最適解』が出されるとまた別の話ではあるが、やはり何も事前情報がない場合としてはその二択に絞られる。ロマンか、無難か。ゲーマーに対してのその問いは、正しく愚問というなのだ。

- ・筋力：10
- ・体力：10
- ・魔力：10
- ・器用さ：110
- ・素早さ：10
- ・運：10

『以上でよろしいですか？』

胸を張つて、『はい』を選ぶ。

器用さ。うむ、なんともいい響きだ。

・所持スキル

【ウイッチ】：人類の希望であり、ネウロイに対する矛である。ネウロイの一部スキルを弱体化

【銃器／E】：銃器を扱う技術。Eは軍人としては最低限のもの。銃器の使用時、微量のボーナス

【空中適正／E】：航空兵器のパイロットや航空ウイッチに必須の素質。Eは最低限飛べる、というだけ。ボーナス無し

【技術の天才】：『器用さ』に優れる人間の証。技術系のスキルの効果。器用さ・素早さに多大なボーナス

・ボーナスポイント：50

そして最後に、スキルの決定画面。これもステータスと同じくポイントがあり、それを使って新たなスキルを獲得するか、所持しているスキルを強化するかということらしい。

既に幾つかのスキルを所持している状態なのは、見る限り、軍人の航空ウイッチという選択とステータスの極振りのお蔭だろう。特に後者の恩恵の可能性が高い【技術の天才】は、一点特化を目指す人間には嬉しい効果がありそうだ。残念ながら、スキルをポイントで強化できるのはアルファベットが付いているものだけらしいが、それでもステータスやスキルをブーストするスキルがあるのは嬉しい。

【技術の天才】もあることだし、どうせならスキルも技術系に特化してしまえと新たなスキルを幾つか追加して、残りのポイントを全て強化に注ぎ込む。ポイントが持ち越せるかどうかも不明なので一応使い切るようにして、スキルの選択や強化の増減を上手く調節していく。そうして出来上がったのが、以下の通りのスキルであった。

・所持スキル

【ウイッチ】：人類の希望であり、ネウロイに対する矛である。ネウロイの一部スキルを弱体化

【銃器／D】：銃器を扱う技術。Dは一通りの扱いに慣れた程度。銃器の使用時、少々のボーナス

【空中適正／D】：航空兵器のパイロットや航空ウイッチに必須の素質。Dは簡単な機動を行える。空中での行動に微量のボーナス

【鷹目】：遠くまで見据える目と技術。近接武器を除いた武器の使用時、射程距離にボーナス

【早撃ち】：素早く弾を込め、素早く引き金を引く技術。銃器の使用時、リロード速度・攻撃速度にボーナス

【固有魔法／操作】：ウイッチが発現する固有の魔法。操作に優れる。技術系のスキルの効果・器用さに大量のボーナス

【技術の天才】：『器用さ』に優れる人間の証。技術系のスキルの効果・器用さ・素早さに多大なボーナス

技術系で役立ちそうなスキルを幾つか追加し、あのままでは効果が少し怪しげだつたスキルを強化した。

これが最適だとはさすがに言い切れないが、それでも自分なりにベストな選択をしたつもりである。……特化型を止める、という選択肢を除外しての話ではあるが。

『キャラクターメイキングを終了し、ゲームを開始します。よろしいですか？』

とりあえず、これでようやくキャラクターメイキングが終わつた。後はこのまま肯定の返事を選んで、ゲームの本編を開始するだけである。

ああ、これで。これで俺のウイツチ生活が今日からスタートするのだ、などと。これまで積み重なつた期待による興奮を胸に、俺は、『はい』を選んで――

――俺の意識は、暗転した。

チユートリアル 1

— June, 1940

S o m e w h e r e n e a r P a s — d e — C a l a
i s

S g t. F r a n z i s k a W e r r a
K a r l s l a n d A i r f o r c e J G 3
„O p e r s t i o n D y n a m o“

「——おい。起きろ、新入り」

ハツ、と。かけられた声と、ガタガタと身を揺する振動によつて、俺は意識を取り戻した。

慌てて周囲を見渡すと、そこは俺がいるはずの部屋とは似ても似つかない、質素な車のような何かの中で。自動車にしては大きすぎる振動と、時折聞こえてくる馬の嘶き声から察するに、どうやら俺は馬車に乗つてゐるようだつた。

馬車の中にいる、俺以外の面々——今声をかけてきた、隊長らしき気の強そうな少女と、カールスラント空軍の軍服を纏う十代半ば頃の数人の少女達を見て、これはゲームの中だつたと思い出して。視線を下に向けて自分の身体を見てみれば、確かにキャラクターメイキングで作成した通りの少女の身体になつていた。

これで今の状況が平穀そなうなら、美少女となつた自分の身体をゆつくり確かめたいところではあるが。この馬車に乗つてゐる、ウイッチらしき少女達——自分も含めた人間が臨戦態勢とばかりに既に武装しているのを見て、どうやら原作のようになほほんとした状況から始まるわけではないようだと直感する。

「気がついたか……。そろそろ目標地点だ、出撃するぞ。各自、上がる前に一度飛行脚と武器のチエックをしておけ」

実際、俺が意識を取り戻したことを見た隊長ウイッチは、そんなことを言つて手に持つた機関銃の細かい動作を確かめ始めた。

隊長と同じように、他のウイットチ達も武器や自身が履いている飛行脚をチェックし始めたこともあって、俺も自分の装備をチェックしようと再び視線を下ろす。

すると視界に突如、二つのウインドウがポップして。その内容が武器と飛行脚の詳細を表したものであるのを見て、これがゲーム的に『チェックする』ことなんだなあと、内心に少々の感動と納得を覚えた。

『K ar98k』

カテゴリ：武器／銃器

装弾数：5／5

残弾数：50

整備状態：万全

『メッサーシャルフ Bf109』

カテゴリ：装備／航空用ストライカーユニット

稼働：可

改造：無し

整備状態：万全

これを親切とどるか、リアリティを壊すとどるかは人によるだろうが。生憎と銃器やストライカーユニットの細かな機構なんぞ把握していない俺にとって、この仕様は素直にありがたかった。

二つともに整備が整っていることを確認してからウインドウを閉じ、顔を上げる。いつの間にか俺以外の人達はチェックを終えていたようで、皆の視線が俺に集まっていることに気づくと、つい反射的にビクリと身体を震わせて。それを見た隊長はおかしそうにクツクと笑つて、周りのウイットチ達もまた、俺を見てクスクスと笑いを漏らしていた。

……これは、ひよつとしてからかわれた、のか。N P C に人間と変わらない思考をさせる超高性能A I が搭載されているらしいこのゲームの、その人間と変わらない思考とやらを予想外のところで実感して感動するやら、どうにも決まりの悪いやら。

隊長は一頻り笑うと、拗ねた表情を浮かべた俺に「悪いな」と軽く

謝罪して。すぐさま表情を切り替え、今度は眞面目な表情を浮かべた。

「さて、全員装備に問題はないな？……よし。なら出撃する前に、もう一度今回の作戦を確認する」

コクリと、俺を含めた隊長以外の面々が頷く。それを隊長はサッと見渡して、誰も口を挟まないことを確認すると、自らの話を続けた。「現在カールスラント陸軍一個大隊が、逃げ遅れた民衆の護衛を行ながらパ・ド・カレーへと撤退している。その支援を行うために、退却ルート近辺に近づきつつあるネウロイを攻撃、殲滅させることが今作戦の目的だ。

事前に行われた偵察により、目標は小規模であることが分かつている。飛行型の小型が数体、陸上型の小型が数体、中型が一体……。我々なら簡単に蹴散らせる寡兵ではあるが、民衆達には十分な脅威となる。油断せずに確実に仕留めてゆけ、いいな？」

「「J a w h o l！」」

隊長の言葉に、俺と他の隊員達が声を重ねて返す。別に狙つたわけではないが、こういう場合のお約束として返答してみたら、それが上手いこと他の人と重なつた。まるで自分が本当の軍人の仲間入りをしたように思えて、何とも言えない感慨深さを感じる。

うん、細かいことだけど、こういうのって何とも嬉しいんだよなあ。思わず笑みを浮かべてしまいそうになるのをなんとか我慢して、隊長の話の続きを耳を傾けた。

「ハンナはマリート、アーティレはクリスタとロツテを組め。新入りは私のバディに着ける。

フォローはそれなりにしてやるが……甘えすぎるなよ、新入り。初の実戦だろうがなんだろうが、自分がネウロイ共を全て叩き潰すくらいの心構えでいけ」

「は、はい。分かりました」

「……おい、なんだ、元気のない返事だな。もつと声を出せ、そんなテンションでネウロイを狩れると思つていいのか!?」

「——分かりましたっ！ 私がネウロイをやつつけます、隊長殿っ！」

「よーし、良い返事だッ！ 全員外に出ろ、空に上がれ！ 我らが祖国を奪つたあのクソツタレ共に八つ当たりと行くぞ!!」

「「J a w o h 1 ッ!!」」

再び声を重ねた返答をして、俺達は馬車の外へと躍り出た。隊長が俺のテンションを無理矢理上げたのは、やはり俺が初陣だから緊張している、と考えたからだろうか。テンションを上げて勢いに乗せ、そのまま戦闘に行かせることで、出来る限り戦闘への恐怖と緊張を和らげる。それがさつきのやり取りの狙いだとしたら、隊長の目論見は見事に成功していた。

初の実戦——と言うよりはこのゲームでの初めての戦闘ということで、少し緊張していたが故の嫌な胸の動悸はいつの間にやら消え去り、代わりに不思議な興奮が俺の身体を包んでいるのが分かる。

俺はここまで単純な人間だつたろうかと一瞬疑問に思つたが、ふとある可能性に思い当たつて、ステータス画面のようなものを開けないかと暫し念じる。すると先程と同じように、ウインドウが空中に浮かび上がって——そこに示されたとある情報を見て、俺はその予想が当たつていることを知つた。

『簡易ステータスを表示します』

フランツィスカ・ヴェラ

L v : 1

H P : 5 0 0 / 5 0 0

M P : 1 0 0 / 1 0 0

装備:『カールスラント空軍下士官制服』『K a r 9 8 k』『メッサー シヤルフ B f 1 0 9』

状態 : [高揚]

【高揚】:スキル【鼓舞】により、勇気付けられている状態。彼らの胸には不安も緊張も無くなり、敵に立ち向かう勇ましさだけが残る。一定時間、ステータスに若干のボーナス

おそらくこの【高揚】というのが、いきなり緊張がなくなつた理由だろう。先程の隊長の言葉がそうだつたのか、それとも言葉と平行して使用していたのかは分からぬが、とにかく俺の知らない間に隊長

がスキルを使っていたらしい。

高性能AIによりNPCが人間と変わらぬ思考をするこのゲームでは、NPCも自己判断でスキルを使用するという事前情報は、確かにあった。情報サイトでそれを知った時は正直そこまで驚かなかつたが、実際にこうして体験してみるとやはり、何とも言えない驚きを覚えるものである。

「エンジン、回せーーーッ！」

隊長の掛け声の直後、皆のストライカーユニットが一斉に唸り声をあげる。魔導エンジンに火を入れ、エンジンを回しながら空に上がる瞬間を今か今かと待ちわびている彼女達の姿は、まるで獲物を前にした荒鷺だった。

『——チュートリアルを開始します』
『足に力を入れるようにして魔力を込め、ストライカーユニットを起動してください』

俺も視界にポップしたメツセージに従いストライカーユニットを起動させ、彼女達と同じようにエンジンを回す。俺のエンジンが回りだし、全員が空を飛ぶ準備を終えたことを確かめると、隊長はニヤリとした笑みを浮かべて後ろに振り返る。そして背後の隊員達の表情を一人一人見つめ、満足そうに一つ頷くと、軽く息を吸い込み。

「——上がれーッ！」

大声で離陸の合図を送ると同時に、彼女は道を滑走路にして機体を走らせた。

それを皮切りにして、全員がストライカーユニットを走らせて行く。俺も遅れじとウインドウの表示に従つて前に進み、段々とその走る速度を上げていた。

速く、速く……速く。段々と視界の横を流れる景色が速くなり、生じ始めた浮力によつて時折身体が押し上げられる。それは飛行機に乗つた時のものよりも、殆ど生身である分、こちらの方が大分スリリングで。高度な物理演算とVR技術により色々な感触がリアルに再現されて、初めて感じる空気を割つて進む感覚に、俺の心は早々と病み付きになつてしまつていた。

そして、滑走を開始してから数秒が経過した後。俺の身体を一際大きな浮遊感が襲い、その勢いを利用して機体を上昇させると、機体は重力に逆らいながら地面から遠ざかつてゆく。そのまま墜落するところなく、数秒後には俺の身体は、木を軽く越える高さまで上昇していく――

「…………え」

思わず、息を呑む。

初めて味わう、足が何の上にも立つていらない感触。前後、上下、左右。周囲に何の障害もない、自分の意思で自由に移動出来る空間。

そこにあつた何もかもが、俺にとつては未知のもので。全てが新しい、俺を惹き付けて止まない麻薬であつた。空を飛ぶという行為のファーストインプレッションは、俺から言葉を奪うほどの――何の言葉でも言い表せないほど、感動だつた。

これはゲームだと、今から戦闘だと、そんな些細なことなんて今はどうでもいい。俺は今、空を飛んでいる。……たつたそれだけの事実が、俺の心を埋め尽くしていた。

『……新入り。お前、そんなに空が好きか？』

おそらく周りにも明らかなど、俺の表情は喜色を隠しきれていなかつたのだろう。隊長が少し呆れた声をして、無線を使い俺に話しかけてきた。

「えっ!? ……そ、そんなに喜んでました?」

『ああ。何と言うか、一目惚れした乙女みたいな顔してたぞ、お前』

「お、乙女……ッ!」

『いやー、あれは可愛かったなー。アーデーレなんか完全に見惚れてたからなー』

ハハハ、と笑いながら可笑しそうに言つた隊長のその言葉を聞いて、慌てて他の隊員達に視線を向ける。

……皆が、サッと顔を背けた。

「……」

カア、と。羞恥で頬が赤く染まるのが、自分でもよく分かる。いや、乙女ってなんだ、乙女って。確かにこの身体は可愛らしい美

少女だし、そんな少女が嬉しそうな表情をしていればそれはそれは魅力的なことだろうが、その中身は成人を迎えた男性なのだ。なのに、乙女つて。……乙女つて。

しかも、なんか見られてたみたいだし。あの反応からすると、おそらく全員が俺の乙女な表情とやらを見て——何の感情を抱いて見ていたのかは、想像もしたくない——いたのだろう、何人かは未だにチラチラと視線を向けてきていた。気持ち悪いような、気恥ずかしいような、少しだけ嬉しいような。色々で複雑な感情が俺の頭をぐるぐると回り、思考回路がショートしそうになる。

もう何が何だか分からなくなつて、口を開いても言葉なんて出さに、ただ金魚のようにパクパクさせるだけで。いつたいこの感情を誰に、どうやって向ければいいのだろうかと、散々考えた挙げ句に――

『隊長、12時方向に敵影！ ネウロイです！』

——とりあえず目の前の敵にぶつけようと、そう決めた。

チユートリアル 2

このゲームの戦闘は、ある意味では実にシンプルなものとなつている。

武器が銃ならば、銃口を敵に向けて引き金を引く。武器が剣ならば、敵を突いたり廻ぎ払つたり振り下ろす。昔懐かしのコマンド選択式のようなシステム的なものではなく、自分が実際に行動して、現実と同じようにしなければならない——言うなれば、FPSゲームを限りなくリアルにした戦闘システムを採用している。

言つてしまえば、それは現実のシミュレーションだ。ゲームであるがゆえに、世界観が違つたり独自法則があつたり細かい部分はわざとシステムチックにしてあつたりと様々な差異はあるが、優れたVRゲームは最早もう一つの現実と言つて差し支えない。

このゲーム、『ストライクウイッヂーズ』という作品を元にしたVRゲームもまた、その一つであり。俺の手に握られた銃は、それが仮想の物だとは思えないほどに、ずつしりとした重さを持つていた。

『よーし、目標視認……。新入りと私で飛行型を相手する、他の奴等はその間に陸上型を叩け！

全機、発砲を許可するツ！』

隊長の号令が、無線で皆へと届く。それを聞いた隊員達は意氣揚々と前に進んで行き、目の前の黒い無機質な異形——侵略者であり、人類の敵であるネウロイへと、その砲火を浴びせ始めた。

ネウロイ。ストライクウイッヂーズを語る上では外せない、シリーズを通しての敵である。堅い装甲と驚異的な再生能力を持ち、瘴気を撒き散らして侵略した大地を毒す、人類にとつての天敵。金属を吸収する性質があり、車や船、飛行機を乗つ取つて自身の身体とすることもある恐るべき存在だ。

細かい設定を話せばまた色々と複雑な、絶対悪的な存在とも言い切れないこともないかも知れない設定とかが他にも色々とあるのだが、それだけでアニメ一話くらいの量になりそうなのでここで一先ず置いておくとして。俺は空を飛ぶネウロイへと突撃してゆく隊長に続

き、ネウロイに向けて前進。両手に抱えた銃を構え、片目を瞑つて眼
前の標的の一体に狙いを定める。

「……」

スウ、と。軽く息を吸い込み、止めた状態で銃に付けられたスコープを覗き込む。

今俺が持つている、この銃——『Kar98k』は現実世界では1935年にドイツが制式採用し、第二次世界大戦において連合国側の兵士を散々苦しめ、21世紀でも一部の国が使用していた、正に傑作と称すべき軍用小銃だ。当時他国で実用化されていた自動小銃ではない、ボルトアクション方式の旧式ではあつたものの、その命中精度や安全性は特筆すべきものである。

かの名高いドイツ旗下猟兵達も、この銃を使用していた。スコープを装着すれば狙撃銃としても使えることもあり、この銃の存在は確かにドイツの戦線を支える助けの一つとなっていたのだ。そしてこの世界でもまた、ネウロイを倒す武器としてこの銃は存在している。

「——てツ！」

パン、と。俺が引き金を引き、火薬の乾いた破裂音が聞こえると同時に放たれた弾丸は、一つ数える間もなく、数百メートル先のネウロイ——空を飛んでいた、小さなエイのような形をしたネウロイに着弾。その胴体の真ん中を綺麗に貫くと、装甲と中身を吹き飛ばした。

『……着弾確認！　ハハツ、やるなあ新入り。お前狙撃の才能があるぞ？』

俺の先を行く隊長から、無線で通信に入る。その声の調子には敵が傷付いた喜びと共に、予想外の驚きが含まれていた。

無理はない。これが初陣の新兵が、数百メートルでの狙撃をいきなりやらかすなどと、誰が予想出来ようか。実際俺も、初めての攻撃が成功した興奮より、この距離で命中したことへの驚きの方が強い。

狙撃というものは、難しい。“狙いを付けて撃つ”という行為は一見単純そだが、風、コリオリ、空気抵抗といった微細で様々な要因を考慮しなければ正確な射撃の出来ない、立派な高等技術なのである。俺は軍事訓練なぞ受けたこともないし、銃を実際に撃つたことも

ない、FPSゲームをそれなりにやつたことがあるくらいの普通の大学生だ。勿論、狙撃の訓練もやっていない。

なのに、俺は今。数百メートル先の目標を、確かに“狙つて”撃ち抜いた。ラッキーな偶然ではない。スコープを覗き、ネウロイを照準に捉え——そして身体が勝手に少々の調整を行つた、その感触を確かに覚えている。その調整は無意識の、俺が意図しない動作だつた。例えるなら何かに手助けされたような、何かの補正を受けたような、そんな感覚である。

この奇妙な感覚の心当たりなぞ、一つしかない。ううむ。成程、これが。

「……これが。これが『器用さ』極振り、か……」

極振りつて、凄い。

やつぱりそう思った。

『——呆けるな、新入りッ！ 敵から注意を逸らすんじゃないッ！』

驚きで染まつていた頭に、隊長からの喝が入る。慌てて俺も撃つたばかりのネウロイをスコープで注視すると、徐々にではあるが、確かに穴がもう塞がり始めていた。

そう、先に言つたこの再生能力こそ、ネウロイが人類に對して優位性を保つていてる大きな要因の一つである。ネウロイを倒すには、その身を幾ら削ろうとも効果はなく、体内に存在するコアを破壊する必要がある。

そのコアを破壊するには、まず装甲や周辺を剥がして露出させるか、火力に任せて堅い装甲の上から破壊しなければならず。しかもコアを破壊しない限りダメージを与えてもすぐに再生してしまうため、ネウロイは人類の通常兵器に對して圧倒的なアドバンテージを有していた。

幸い魔力を纏わせた攻撃は比較的通るし、戦車砲クラスの火力の攻撃なら魔力を纏わせなくても何とか通じないこともないため、人類の対ネウロイ戦線は何とか——辛うじて首の皮一枚繋がつていて、とう状態ではあるが——崩壊はしていない。しかしくら魔力を保持する、人類にとつての希望であるウイッチであつても、その再生能力

は無効に出来ない。

つまり、ウイツチはあくまでネウロイに“マトモに対抗できる”と
いうだけであつて、決して絶対的な上位者というわけではないのだ。
少し気を抜けば、簡単にやられてしまう。そんな鋭利ではあるが、脆
い矛なのである。

幸い、俺はその事実を『原作知識』という形で知つていて。慢心は
せず、ネウロイの様子を見た直後にリロードし、素早く次弾を装填す
ることが出来た。

初弾を撃ち、隊長の喝を聞き、次弾を装填するまでの間が僅か十と
少しを数えるほどという早業である。おそらくこれも極振りしたス
テータスと、習得していた【早撃ち】というスキルのお蔭なのだろう。
ゲームとはいえ、自分の高スペックっぷりには感嘆せざるをえない。
再び息を止め、スコープを覗き、ネウロイに狙いをつける。幸い、ス
コープによつて拡大されたネウロイの先程の穴から赤く透明な何か、
即ちコアが半分ほど露出しているのが見えた。

あちらもこちらの存在には気づいているようで、俺を攻撃せんとこ
ちらに向かつてきているが、もう遅い。俺があちらの攻撃範囲に入る
よりも、俺が引き金を引く方が遙かに早いのだ。

パン、と。再びの破裂音を残して、弾丸が飛んで行く。ライフリン
グによつて回転し、ネウロイに向けて一直線に飛ぶその弾は、目標ま
での距離を俺が瞬きをするよりも早く、一瞬で詰めた。

弾は再度ネウロイを貫き、その異形の身体を穿つ。そして今度は装
甲や中身だけでなく、一見すると宝石のようにも見えるほど小綺麗
な、禍々しい身体とは雰囲気の異質さすら感じさせるコアを、正確に
撃ち抜いていて。

『隊長よりヴエラ軍曹へ、コアの破壊を確認。——早速の初戦果、おめ
でとう』

隊長から無線が入ると同時に、撃つたネウロイの身体がキラキラと
した粒子になつて消え去つてゆく。コアを破壊されたネウロイは消
滅し、何故か死体も残さず消え去るのだ。つまりこの光景は、ネウロ
イが撃墜された、ということである。

俺の初戦果を示す、明確な証拠だつた。

『ヴエラ軍曹？　おい、新入り、聞こえます！』

「え？　——あ、はいっ、聞こえます！　無線感度良好、問題ありますんつ！」

『……戦果を喜ぶのは分かるが、一体倒しただけで気を抜くなよ。ネウロイは複数いるんだから、な』

初めての撃墜に多少なりとも感動を浮かべ、思わず少し呆けてしまふと、即座に隊長から注意が飛んできた。

……そういえば、他にもネウロイはいたのだつたなあ、と。狙撃したネウロイに意識を傾けていたために、無意識の内に頭から抜け出てしまつっていた他のネウロイの存在を思い出して、突然冷や水を浴びせかけられたように冷静になる。

慌ててスコープを覗き込めば、いつの間にかネウロイに接近していった隊長が、接近戦で他の飛行型ネウロイを引き付けている姿が目に映つた。

……成程。俺が狙撃に集中している最中、他のネウロイにちょつかいをかけられなかつたのは、彼女がああして注意を引いてくれていたかららしい。さすが隊長を任されるだけのことはあると言おうか、気がつかない間にフォローを受けていたことを知つて。俺は素直に、彼女への感嘆を抱いていた。

『ま、今回は少数相手だし、これでおしまいなんだが。

……せつかくだ、よく見ていろ新入り。エースの戦いというものを、お前に見せてやろう！』

そう言うと、隊長は今までの引き付けさせるための引き撃ちから、一転。

背を海老のように反らして上昇し、半円を描いた辺りで急降下。追つてきた二体のネウロイを相手に、機動戦を仕掛けた。

『まず、ひとお一つッ！』

すれ違ひ様、隊長は一体に向けて手に持つた機関銃を発射。パパパ、と連續した音を出して飛び出た複数の弾丸は吸い込まれるようにネウロイへと突き刺さり、その身をミンチのように引き裂いてコアご

と破壊した。

その様子を横目で確認した彼女は、続いて急角度で旋回。後ろから浴びせかけられたネウロイの攻撃——細いビームのような攻撃を回避し、螺旋を描くように上昇する。

『いいか、空中の接近戦で一番重要なものは、機動力だ！ 敵を攪乱し、攻撃を回避し、敵の背後を突く。それが何よりも大事な基本となる！』

隊長の動きは素早く、流暢だ。速さだけではない、機動を流れるようなものにしている上手さがある。メタ的な話をすれば、おそらく相応の高いステータスやスキルがあるのだろう。俺には絶対真似出来ないということも、システム上はありえないはずだ。

だが、今視界で空中舞っている隊長の姿は、とても遠い壁を感じさせるものだった。彼女の動きは洗練されていて、芸術のような美しさすら感じさせる。俺では確実に手の届かない、数段上の技術のように思えた。

『空中戦はチエスと同じだ、常に相手の動きを予測しろ！ 自分が望む状況に、上手く相手を引きずり込むために動け！』

光線を避けながら、隊長は時折銃撃をネウロイに浴びせている。特定の点を狙つたものではなく、弾幕を作ろうとばらまかれたそれは、ネウロイの動きを牽制するものだ。おそらくネウロイを誘導しているのだろうと、俺が見ても分かった。

隊長によつて導かれたネウロイは、彼女の背中を離れずに追従してきている。放たれる光線を曲芸染みた機動で避けながら、彼女は左斜め上に旋回。ネウロイもしつかり追つてきてることを確認すると、弧の頂点で意図的に失速。旋回半径を小さく取り、ついてこれなかつたネウロイに追い越されたのを見ると即座にその場で一回転。

『そして、最後に。——判断は素早く、だッ!!』

ネウロイが無防備に背中を晒した、その一瞬の隙を突いて。放たれた機関銃の弾丸が、ネウロイのミンチを新たに作り出していた。

「……」

果然、と。一連の隊長の戦闘の光景を、俺はここが戦場だというこ

とも忘れて見つめていた。

正直、何と言葉にしたらいいのか分からぬ。俺がやつたのは、正直に言つてただの狙撃だつた。だが今の隊長のそれは間違いなく空戦であり、それも一級の実力を持つた人間の、スタイリッシュさすら感じられる心震える戦闘シーンである。

二体のネウロイをあつとという間に片付けてしまつたことも、今の俺では及びもつかない戦闘技術を見せてくれたことも。何もかもがただ、凄いの一言だった。

『——隊長へ。陸上型ネウロイ、殲滅完了しました。繰り返す、陸上型ネウロイを殲滅しました』

無線で、隊員の一人から連絡が入る。視線を下に向けると、確かに陸にいたネウロイの姿は一つ残らず消え去り、地表付近を飛んでいる隊員達がこちらに手を振つていた。

『ああ、こちらでも確認した。こっちもちょうど、殲滅ついでの新入りへの教育が終わつたところだ』

『教育つて……ああ、いつもですか？ 隊長、いつも言つてますけどね、あんなの見せられても正直凄すぎて参考になりませんって』

『……む』

『私達みたいな凡人にや、エースの動きは凄いってことしか分かりませんよ。それより早く帰りましよう、クリスタがお腹空いたつて煩いんです』

『ああ、ああ、分かつたよ。……新入り、帰るぞ。そろそろ戻つてこい』隊員とのやり取りに、隊長は苦笑を浮かべて了承の返事をすると、未だ呆けていた俺に無線で呼び掛ける。その声で俺が我を取り戻したのを見て、彼女は今度は全員に帰還の号令を掛けた。

簡単な任務ではあつたが、損害なしかつ敵殲滅という最上の結果を出すことが出来て嬉しいのだろう。薄く笑みを浮かべて『帰るぞ』と短く言つた彼女に、俺達は行きと同じように声を揃えた。

『——J a w h o l ツ!!』

「Jawhゅッ!?」

『……えつ?
えつ?』

いや、噛んでねーし。

インターンシヨン 1

キュイイ、という甲高い摩擦音を響かせながら、ストライカーユニットの車輪が動きを止める。

初めての飛行と戦闘を終え、チュートリアルの最後として初めての着陸を終えた俺は、一つ安堵の溜め息を吐いた。

その後、俺の着陸を見守っていた数人の整備兵達が、滑走路上で動きを止めた俺にパタパタと駆け寄り。

俺の脇を抱えて軽く身体を浮かせると同時に、装着しているストライカーユニットへと手をやると、幾つかの作業を経て俺の身体からユニットを取り外した。

整備兵達の手を借りながら、俺はゆっくりと地に足を降ろすと、地面の感触を確かめるように何度も足踏みをして。

持つていた武器を整備兵に渡した後に、伸びを一つ。未だ綺麗に輝く太陽を見ながら、何もこんなところまで再現しなくてもいいのないと、初めての飛行で色々と慣れていなかつたからか、少しじわじわとした痛みを感じる背筋を解していた。

「あ、あのっ……！ 任務ご苦労様であります、軍曹殿ツ！」

彼らが俺の履いていたユニットを手押しの台車に乗せている最中に、その中の一人がぎこちない敬礼と共に、伸びを終えた俺へと声を掛けってきた。

おそらく志願兵だろう、見た目の年は随分と若く、少年と言つてもまだ通用するほどだ。

1941年現在、失陥が続いている歐州では民間人の避難が進んでおり、大多数の人間は未だ戦果の及んでいない場所へと疎開している。

しかし中には愛国心や義侠心に溢れる人間もいて、例え身を危険に置いても誰かの一助になりたいと、自分から軍に志願する人間もいたそうだ。

この若い彼もまた、そういう人間——メタ的に言えば、そういう設定のNPCなのかもしれない。

実際そんな細かなところまで作り込まれているのかは分からないうが、ここまで完成度の高いゲームならありえそうだなど、ふとそんなことを考えて。

「……はい。ありがとうございます、ねつ」

フロム脳の俺としては何だか少し樂しくなってきて、思わず湧き出た感情をそのまま表情に伝えた、喜色を浮かべた笑みで彼に敬礼を返す。

すると、彼はカア、と頬を林檎のように赤らめて。少々呆けた後に我に戻り、慌てて「失礼します」と言い残すが早いか、逃げるようにな俺から離れていった。

……ああ、うん、成程。今は可愛い美少女だもんな、俺。

美少女に嬉しそうに微笑まれたら、いくら変な気はないって分かってても、嬉しいよな。恥ずかしいよな。……分かる、分かるよ、うん。

「——つたく。何やつてんだ、新入り」

思わず生暖かい視線を遠ざかつてゆく彼の背中に向けていた俺に、今度はそんな声がかかる。

ふと振り返ると、俺と同じく着陸作業を終えたらしい隊長が、呆れた表情をこちらに向けていた。

なんでも、ああいう『ボーイ』でもネウロイとの戦いに従事する立派な戦士なんだから、変に弄ぶのは止めてやれとの注意を受ける。

いや、別に、弄ぶつもりとかじやあないんだけどね。

「あちらが話しかけてきたから、笑つて答えてあげただけですって。そんな悪女じやありませんよ、私」

「素直な子供を見るような目を向けてた奴が言つても、説得力なんてないんだがなあ。ああ、せつかく素直な可愛い奴がうちの隊に来たと喜んでたのに……」

ジャンプだと思つたら実は赤丸が付いていた時のような表情を浮かべ、顔に手を当てて首を横に振る隊長。

が、その口元は笑いを堪えるように少し歪んでおり、どうも本気で言つて いるわけではなさそうだ。

実際、俺が多少怒つた演技をすると、隊長はすぐに「悪い悪い」と

軽く謝つて。

俺の肩に手を回し、ニヤリと人懐っこい笑みを浮かべると、肌が触れ合う距離まで顔を近づけてきた。

「ま、とにかく、初任務初戦果おめでとさん。初めて戦場に出て戦果をあげたのは立派だ、胸を張つていいぞー」

わしゃわしゃと、かいぐり回すように隊長は俺の頭を撫でる。

その手つきは褒めている、と言うよりはペットを可愛がるものに似ていて、しかも妙に上手いことツボの部分を刺激してくるものだから、撫でられているだけなのに何だか変な気持ち良さがあった。

十を数えるほどだろうか、隊長は撫でる手を止め、それと同時に手と身体を俺から離す。

するとつい、視線を離れゆく彼女の手に向けながら、つい名残惜しそうな声をあげようとして——ハツと我に帰ると慌てて口をつぐみ、その言葉を飲み込んだ。

「ん？ なんだ、どうした？」

「……いえ。別に、何でもないです」

何度も軽く手櫛で鋤いて、隊長が乱した髪の毛を整える。

精神的には男だとはいえ、髪がグシャグシャの状態で人前に出るのを恥じるくらいの美的感覚はあった。

今の姿が普段の男のものではなく、一昔前のラノベに出てきそうな可愛らしい女の子だということもあって、普段よりも身嗜みには気を使わざるを得ない。

別に俺がオカマだとかそういう話ではなく、断じてなく、もつと純粹な話として。

やはり美少女を自分の手で可愛くするのは、楽しい。美少女は美女らしく、可愛い状態でいて欲しい。そんな単純な、ピュアな欲望に基づく気持ちからの行動である。

ちなみに、俺が口調を少女らしいものにしているのは演技ではなく、システムの補助だ。

制作者側も異性のキャラクターでのプレイは予想していた、と言うよりもむしろそれを見越してゲームを作っていたようで、なんと『言

葉を自動的にキャラクターの性別にあつた口調に翻訳する』という変態機能がこのゲームには実装されていた。

しかも性格や口癖といった細かなところまで調整可能で、それに応じて翻訳結果も変わり、しかも機能自体のオンオフも可能という、正に日本人とも言うべき気の入り様である。

TSプレイ推奨ともとれるこのシステムは、もしかしたらプレイヤーの間でも賛否両論あるかもしだれないが、俺としてはこれは大変ありがたい。

何せふとした拍子に男言葉を喋つて、美少女っぽい雰囲気を壊してしまうというようなことをせずに済むのである。可愛い自キャラを、美少女として色々な意味で愛でたい俺は、メニュー画面を開いてこのシステムに気がつくと同時にオンにしていた。

で、それはともかく。

「……おつと。こんなところで長話してたら、いい加減怒られるな。んじゃま、私は司令のここに任務の報告に行つてくるから、お前は自分の部屋にでも行つて休んでろ。他の隊員達もそうしてるしな」会話の途中で、隊長はふと思い出したようにそう言うと、じやあと手を振りながら俺との会話を切り上げた。

俺もそれに手を振り返し、滑走路から少し離れた場所にある建物——物々しい警備が配置されているところを見るに、あれが司令部なのだろうか——へと小走りで駆けてゆく隊長の背中を見送ると、グルリとその場で周囲を見渡す。

任務を終えると、ちゃんと基地に帰投しなければならない。

現実では当たり前のことではあるが、ゲームでは様々な問題でわざと省略されることが多いそのことを、このゲームは良くも悪くもちやんと再現していた。

その後、俺にとつてのチュートリアル戦闘を終えた俺達は、そろから基地まで飛んで帰らなければならなかつた。

つまり、戦闘が終わつてリザルト画面が出ることも、唐突に画面が切り替わつていつの間にか基地に移動しているということもなく。

戦闘終えた後にそのままの流れで、自分でちゃんと“飛んで”、基地まで戻らないといけなかつたのだ。

行きも帰りも自分の足で、というのは昔からゲームでは珍しくはなかつたし、それはいい。問題だつたのは、戦闘した場所から基地まで、俺が初めてで慣れない飛行をぶつ通して続けなければならなかつたことである。

さすがにゲーム性を持たせるためにリアルのそれよりは大分短縮されているが、遠い距離を移動するのはこのゲームでも相応の時間をかける必要があるらしい。

戦闘場所から、パ・ド・カレー近郊にあるカールスラント軍基地——隊長から聞いた話によると、ガリア軍が設営しかけで放置していたものを間借りして、急仕立てで整えたらしいこの基地まで、軽いランチなら平らげられるくらいの時間が必要とした。

最初の興奮が薄れてきて、今更ながら自分が殆ど生身で空を飛んでいるという事実への恐怖が若干生まれてきた頃、ようやく俺達は基地に辿り着いて。

着陸作業を終え一息吐いた俺は、ゲームで言う『拠点』となるであろう基地の様子を眺めて。よくぞここまで作り上げたものだと、ゲームの制作者達の努力と執念に内心で惜しみ無い称賛を送つた。

『——班長一つ、ボルトとナット持つてきましたー！』

『点呼を取る！ 青中隊、一番から点呼ッ！』

『おーい、誰かエルンストの奴見なかつたかー？ あいつから頼まれたカスタマイズ、一応出来たからあいつに見て欲しいんだけど……』
基地のあちこちで、たくさんの人間が動いている。

忙しなく駆け回る整備兵や、格納庫の前に集まっているウイーツチ達、何やらキヨロキヨロと辺りを見渡している技師。

彼らは皆アニメ絵を可能な限りリアルにしたようなビジュアルで、そんなキャラクター達が人間と同じように動いている光景は、自分がアニメの世界にいるのだということを実感できる。

基地の建造物や空、時折通り過ぎてゆく風なども非常にリアルに再現されていて、下手をすればこれが現実の世界なのだと誤認してしま

いそうだつた。

まあ、いくら現実のようだとはいえ、本当に誤認されないようにもこういうゲームでは部分部分がわざとゲームっぽくシステム化されたりするのだが。

このゲームでのその一つ、特に現実から剥離した要素を頼ろうと、俺は『メニュー』という言葉を強く念じて——始めてから数を三つ数えないうちに、俺の視界に半透明のウインドウが表れる。

『メニューを表示します』

- 『ステータス』
- 『スキル』
- 『装備』
- 『アイテム』
- 『任務目標』
- 『地図』
- 『設定』

七つの項目が記されたウインドウが、俺の視界の左端に並ぶ。

およそ視界の八分の一ほどが塞がれた形になるが、それ以外の部分は何もないままだし、塞いでいるウインドウの方も半透明で後ろの視界が透けて見えるので、幸いメニューを表示したままでは動けないということもない。

このメニューについては帰りの飛行の最中にチューントリアルで説明を受け、それから色々と確かめた結果、他のゲームとそう変わらないものだということが分かつた。

基本的に文字通りの機能がある、オーソドックスなものである。難しく考えなくとも何となく分かるような、そんな難しい説明は必要のない仕様だ。

俺はメニューの項目から『地図』を選び、数回操作してミニマップを表示させる。

すると今度は視界の右下に小さなウインドウがポップアップして、そこには今いる場所の周辺の簡易的な地図が表示されていた。

「……よしつ。とりあえず、これを見ながら私の部屋とやらに行つて

みましょ、かね」

そんなことを一人呟き、俺はもう一度念じてメニューを消すと、ミニマップを表示させたまま歩き始め。地図を見ながら、『自分の部屋』と地図上に表示されている地点へと足を運ぶ。

ゲーム的に考えると、そこが俺の活動の中心となる場所の筈である。

某大型動物狩猟ゲームの自宅のように色々と機能が付いていたりするのか、それともグランドでセフトがオートな某ゲームのように最低限より少しましな程度の機能があるだけなのか。

何にせよ、自分の家のような場所はあるだけで精神的にも安心出来る。ゲームとはいえ、無条件で安らげる場所があるのはありがたかった。

てくてくと、基地内の様子を見渡しながら歩を進めてゆく。

時折すれ違う兵士に敬礼されたり、士官服を着た人間とすれ違う時には俺が相手に敬礼したり。訓練場や食堂、水浴び場など、基地内にある施設の前をついでに通つてみたり。

色々と楽しみながら歩いていたうちに、目的地である建物——長い時間をかけて作られたものではない、プレハブのような簡易的に建てられた箱形を視界に捉えて、俺は早速その中へと入つていった。

「……ね、知ってる？ この前さ、パリが陥落したんだって」

「あー、私も知ってる。なんかガリアの政府が混乱してて、マトモにネウロイと戦えてなかつたんじよ？」

「じゃつじやーん！ 見てこれ、ヴィルケ少佐のプロマイドっ！」

「え、嘘、『スピードのエース』のっ？ ……いいなー。どうやつて手に入れたのよ、これ」

その建物は俺と同じウイツチ達が集まっているのか、中には十代の少女が数多く集まっていた。

廊下で話し込む者や、部屋の中で楽しそうにお喋りしている者など多くの人間がいて、建物の中を歩くだけで色々な話が聞こえてくる。つまりここは、ウイツチ専用の宿舎か何かなのだろう。ウイツチが成人前の少女であることと、貞操を無くせば戦力でなくなってしまう

ウイツチの性質を考えると、こういう措置がとられるのは当たり前とも言えた。

彼女達に時折耳を澄ませ、ふと目が合つた少女と軽く挨拶を交わしながら、俺は自室の方へと進む。

俺の部屋は建物の中程にあるようで、十人近くが一部屋で暮らす、所謂大部屋のようだ。マップの表示と見た限りの構造を比べれば、間違いない。

修学旅行の学生のような扱いに、最初はつい眉をしかめたものの。軍曹という低い階級——それでも一般兵から見れば雲の上の階級だが、ウイツチにとつては最低階級である——を考えれば、個室なぞは寝言の域であろうと思い直す。

軍隊は共同生活であり、集団生活であり。今も昔も兵士は同じ部屋で眠り、同じ釜の飯を食べ、同じ水で背を流すのである。

ウイツチであつてもそれは同様で、日常生活でも仲間と絆を深め合うべし……ということなのだろう。

「……つと。ここね」

その部屋の前へと辿り着いた俺は、その扉の前で足を止め。んん、と喉を鳴らして通りを良くし、スーザーと数回深呼吸する。

中からは話し声が聞こえ、部屋に人がいるということを示している。内容はぐもついていて聞き取れないが、何やらワイワイと賑やかそうな雰囲気を持っていた。

その中にいるであろう人間とは、キャラクターの設定的には初対面じやないかも知れないが、精神的には初対面である。

日本人としても、知らない人間とのファーストコンタクトを出来る限り良くしようとする気持ちがあった。

心構えを終えると、俺は目の前の扉をコンコンと数回ノックする。

一瞬の間の後、中からはどうぞという返事が返ってきて。それを聞いた俺は、「失礼します」と口にしながら、扉を静かに開けて――

「やめて、そんなとこ触らないでください！」

無言で、扉を閉じた。

???

小さな部屋の中に、執務机と申し訳程度の装飾があるシンプルな個室。

その中で一人無言で書類仕事を片付ける、少女の姿があった。
カリカリと、ペンを走らせる音が部屋の中に響き渡る。

時折その音が途切れ、悩むようにペンをくるくると手で回している
彼女の姿は、あまりそのような仕事に慣れていないことの表れだろうか。

事実、少女——ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケが事務仕事に関わるようになつてから、まだ一年も経っていない。未だに慣れない上の人間としての責務に、ミーナはどうしても余計な疲れを覚えてしまっていた。

はあ、と溜め息を一つ。未処理の書類の山から新しいものを一枚取りつつ、彼女はその顔に疲れを滲ませる。

慣れない仕事もそうだが、現在の戦況の悪さが気持ちの下降具合をさらに加速させていた。

カールスラントからの撤退作戦は今のところは上手くいっている
とはいえ、先日入ってきた情報では既にパリが陥落したらしい。

ネウロイの進撃でガリアが混乱していることは知っているが、首都が簡単に落とされるほど組織的な混乱をきたしているとは、彼女も思つていなかつた。

ガリア軍は決して弱くはない。嘗て『ラ・グランド・アルメ』と名乗った彼らは歐州の地を踏み荒らし、人類史に残る大英雄であるナポレオンと共に世界に霸を唱えていた。

その時ほどの勢いは無いものの、今でもガリアは歐州屈指の強国の一つだつた。軍も精強で、ネウロイに対抗するための有用な戦力となる——戦争が始まるまでは、誰もがそう思つていたことだろう。

しかし蓋を開けてみれば、政府の混乱がそのまま軍にも影響を及ぼしてしまい、彼らの防衛戦が絹を裂くように易々と破られるという大失態を犯しているのだ。

しかも軍を統制するべき政治家、及び軍の上層部は防衛戦が破られると国外に逃亡、守るべき祖国と国民よりも自分の身を第一にした人間が多いという。亡命政府が現時点で三つに分かれているという時点で、ガリアの組織力の低さは見るにも明らかなものだつた。

噂ではド・ゴールという将軍がなんとか残存兵力を纏めようとしているらしいが、最早ガリアの失陥は時間の問題だろう。

遂行中の撤退作戦の作戦領域にガリアの一部が入つてゐるカールスラントにとつて、そのニュースは他人事には出来ない。最悪、いや間違いなく、これから作戦に支障が出てくるはずだ——ミーナの思考は、つい鬱々としたものになつてくる。

そんな彼女の耳に、コンコン、と扉をノックする音が届いた。

彼女は軽く頭を振つて気持ちを切り替え、どうぞと扉の向こうの相手に入室を許可する。すると直後、扉がガチャリと開いて。

「——失礼します！ ヴアルブルガ・ダール中尉、任務の御報告に参りましたっ！」

ハキハキした声で話しながら、一人の少女が部屋に入ってきた。

中尉の階級証を着けたその少女を見て、ミーナは強張つていた表情を少し緩める。

ヴァルブルガ・ダールという名の彼女はミーナが率いるJG3の一員であり、中隊の長を務める優秀なウィツチである。カールスラント軍の再編成でJG3に来てからの関係ではあるが、友人と言つていいい関係を築いている彼女の姿をして、ミーナの心は小さな安らぎを感じた。

とはいゝ、今は軍務中である。

ミーナは真面目な表情を保つたまま、グレーテに對して報告の詳細を求めた。

「はっ、報告致します！ 第3戦闘航空団第2飛行大隊第4中隊、ヴァルブルガ・ダール中尉以下六名、任務より無事帰還致しました！」

「ご無事で何よりです、中尉。損害と戦果の報告を」

「は。損害は軽微、怪我を負つたものも居りません。作戦目標である小規模ネウロイ群は殲滅、私が撃墜数二、マリーが一、クリスタとア

デーレが共に二を、初陣のフランツイスカ・ヴエラ軍曹が一を数えています」

「分かりました、後程軍功を記しておきます。

では、第4中隊は別命あるまで待機。当基地内にて心身の休養に努めていてください」

「はっ！ 了解しました、司令官殿！」

ビシリ、とヴァルブルガが敬礼をして、一連の形式ばつたやり取りが終わる。

するとそれを合図とするかのように、ミーナは表情を崩して溜め息を吐いて。それを見たヴァルブルガも、真面目な雰囲気を軽いものに変えた。

「……ミーナ、どうした？ いきなり溜め息なんか吐いて」

「ああ、えつと……ごめんなさい。最近どうにも疲れが抜けなくて、ね」

二人の様子は実にフレンドリーで、氣のおけない仲と形容すべきものである。

階級の開きはあるとはいえ、年が近いこともあるのだろう、二人は正しく友人であつた。

疲れた様子を見せるミーナを見るヴァルブルガの目からは、本心から心配する気持ちが感じられる。

ミーナは大丈夫だ、と口を開きかけて。……彼女になら愚痴を言つても大丈夫かと、口に出す言葉を変えた。

「まだ司令官職に慣れてない、ということもあるのだけれど。最近の戦況を考えるとね、どうしても、その……」

「気が滅入る、か？」

「……パ・ド・カレーはガリアの北部なのよ？ パリが失陥して、亡命政府の一つがヴィシーに移った以上、北部ではガリア軍の抵抗はそう強くないでしよう。

となるといずれ、北部へのネウロイの侵攻が本格化した時、我々が主として応戦しなければならない……。この地からカールスラントの民と兵が一人残らず逃げおおせるまで、何としても食い止めな

きやいけないんだもの」

「……撤退が間に合わないのか？」

「正直ギリギリね。作戦の予定が遅れてるわけじゃないけど、パリの失陥が早すぎるわ。

ネウロイの攻勢を一時的にでも止めるため、大規模戦闘の一回くらいはあるかもしない……そんなところよ」

ミーナの言葉に、ヴァルブルガは苦々しい表情を浮かべる。

ダイナモ作戦——カールスラントが総力を挙げて実施している、欧洲からの撤退作戦。

本国機能を移している南リベリオンのノイエ・カールスラント、立地故に未だ戦禍が及ばないブリタニア。国民をそういった安全な後背地に避難させ、軍も一度一息吐かせる。

カールスラントの未来がかかったその作戦が、現在進行中である。万が一にも、失敗するわけにはいかない。失敗すれば国として致命的なダメージを負うだけではなく、カールスラント皇帝の言葉にも反することになる。

故に、何としてでも作戦は成功させなければならない。それはカールスラント軍人にとっての共通意識であり、人一倍國への忠誠心が強いヴァルブルガはその意識も強かつた。

「まったく、どうにも暗くなる話だな……。軍人の責務とはいえ、それでどれだけの奴がヴァルハラに行くのやら」

そのため、彼女がその戦闘自体を忌避する様子はない。ただ当たり前のこととして、悲観的な現状を受け入れている。

それでも人死には出来れば少なくあつてほしいのだろう、彼女の声は重い。目を一文字のように細めて、憂いの感情を表に出していた。「そうね、本当に。何か気の紛れるニュースでも入つてこないかしらねえ……」

机の引き出しの中からチヨコレートを一つ取り出し、それを口に含みながらミーナは言う。

軍からの支給品、ベルギアで作られるようなものと比べれば遥かに劣るものではあるが、気持ちを安らげる嗜好品としては十分な味だ。

時折少量が支給されるチョコレートを、ミーナはここ最近愛用するようになつた。ストレスを和らげる方法の一つとして、チョコレートの甘味を頼つてゐる。……後で体重計に乗るのが恐怖になりつつあるのを、そつと見ないふりをして。

「……あー。いいニュース、ね。新入りが意外と掘り出し物かもしない、というのはどうだ？」

少々考えを巡らせた後、ヴァルブルガは絞り出すようにそう口にした。

無理矢理言つた、という感が強い言葉ではあつたが、ミーナの興味を引くには十分だつたらしい。視線を向けてきた彼女に、ヴァルブルガは言葉を続ける。

「ヴェラ軍曹なんだが、狙撃の才能がありそうだ。今回の任務、あいつは初陣だつたんだが、あまり緊張を見せなくてな。落ち着いて銃を構えて……200メートルくらいかな、綺麗に敵を撃ち抜きやがつたんだ」

「200メートル？ それはまあ、凄いとは思うけど……偶然じやないの？」

「いや、一発撃つて二発とも小型のネウロイに叩き込んだ。ありや間違ひなく狙つて撃つてるよ」

ふむ、と。ミーナはその話を聞いて、暫し考え込む。

200メートルという距離は、狙撃を専門にする者ならさして難しい距離ではない。しかし素人が簡単に狙えるほど優しい距離でもまた、ないのだ。

ミーナの元に上がつてきている資料を見た限りでは、フランツィスカ・ヴェラ軍曹は最低限の訓練を施されただけの徴用組である。

ネウロイの侵攻による時間的な制約で訓練過程を削らざるを得なかつただけではあるが、それでも訓練学校でキッチンとした教育を受けた者達と比べてしまえば、徴用組は戦力としてはどうしても劣つてしまふのが一般的だった。

卒業後はいきなり少尉任官で軍務に就くエリートと比べるのは可哀想だとも思うが、残念なことに軍は現実主義者達の集まりである。

戦力を補充するなら少しでも使える方がいいと思うのは、至極当然のことだつた。

事実、ミーナもフランツィスカ・ヴエラにはあまり期待していなかつた。

別に切り捨てていたわけではないが、エース級に育つとしても後々のことだろうと、現状の戦力としてはチエスで言えば兵士程度の期待しか持つていなかつたのだ。

しかし、グレー^テの話が真実ならば。狙撃手としての使い道があるのならば、彼女の有用性は跳ね上がる。

年頃の少女に対する扱いとしては酷だとミーナも思うし、そのような観点で考えてしまう自身の冷静な部分について自己嫌悪してしまうが。それでも軍人として、ミーナはある種冷酷にならざるを得ない。「……ヴァル。ヴエラ軍曹の今の腕前、確かめたいのだけれど」

自分でも驚くほど平静な声で、ミーナはそう告げる。

ヴァルブルガはそれに快く承諾を示して——ふと窓から見える外の風景を見て、驚いたように目を見開いた。

「どうかした？」

「いや、外でヴエラ軍曹が走つてきてるのが見えてな。丁度いいタイミングだ、今呼ぼう」

そう言うが早いかヴァルブルガは窓へと近づいて、ガラリと開けて身を外に乗り出す。

ミーナもつられて視線を向けると、司令部脇の広場になつてている空き地で、一人の少女が息を整えているのが見えた。

直接の面識がないミーナには分からなかつたが、おそらく彼女が件のヴエラ軍曹なのであろう。事実、ヴァルブルガが彼女に向けて「ヴエラ軍曹」と言つた呼び掛けに、彼女は少し慌てた敬礼で答えた。

『は、はいっ！ 何でしよう、隊長っ！』

「丁度よかつたー！ お前、暇だよなー！」

『え？ あ、はい、用事はありませんがー！』

『よーし、そこで待つてろー！ ついてきてほしい所があるー！』

『了解しましたー！』

少し離れていたために大声でのやり取りとなつた会話を終えて、ヴァルブルガは窓を閉めつつ背後のミーナに振り返った。

唚然、という言葉が一番近いだろうか。事態の進展の早さに驚いている彼女に、ヴァルブルガは笑つて声をかける。

「と、いうことだ。私はちょっと訓練場に行つてくるが、お前はどうする？」

「え？　ええ、そうね……。緊急の書類もないし、私も一緒に行くわ」「よーし、そうかそうか。……なあ、ヴエラ軍曹がどれくらいの距離まで出来るか賭けようぜ」

「……軍務中よ、ダール中尉」

堅いねえ、とクスクス笑うヴァルブルガを横目に、ミーナは再び溜め息を吐く。

しかし、先程までのものとは違い、その口元は薄く笑つているようにも見えた――。

インターミッショング

——どうしてこうなつた。

K a r 9 8 k を抱え、基地内の訓練場で佇む俺の脳内で、そんな気持ちが延々と渦巻いている。

「……」「……」

二つの真剣な眼差しが、射撃場のレーンへと歩いて行く俺の背中に注がれている。

片方の人間は俺の隊の隊長で、俺がこんな状況になつていることの原因でもある。

ゆりんゆりんな光景が繰り広げられていた部屋を思わず離れ、後ろから聞こえる助けを求める声を無視してその場から逃げ出した俺は、無我夢中で走っているうちに司令部の近くに移動していた。

とにかく離れるだけを考えていたから、出しつぱなしにしていたミニマップもろくに見ず。気がついたらそこにいただけで、何か目的があつて近づいたわけではない。

だから、息を落ち着かせてすぐにその場を立ち退こうとしたのだ、が。

『——ちょうどよかつたー！　お前、暇だよなー！』

建物の窓がガラリと開き、中にいた隊長が身を乗り出してそう尋ねてきたのだ。

俺としては暇であるのも事実ではあつたし、そもそも階級が上の人間の頼みごととはほぼ命令に等しい。そのままあれよあれよという間に流されて、俺は隊長に連れられるままに訓練場に向かわざるを得なかつた。

そして、訓練場に向かつたのはなんと俺達二人だけではなく。ニコニコとした笑みを浮かべ、しかし視線は真剣味を纏わせた、少佐の階級証を付けた赤毛の少女——

「ヴェラさん、あまり緊張しないでね？　普段通りに、気負わずにやつてくれればいいから」

ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケが、隊長と共に観客となつてい

た。

ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ。ストライクウイツチーズを知っているなら知らない人間はない、原作の主要人物の一人である。

心優しいお姉さん気質の少女であり、個性の強い面々が集まる第501統合戦闘航空団を纏められるほどの器量を持つ優秀な軍人だ。

指揮能力や事務能力は言わずもがな、原作キャラのウイツチでは珍しく政治能力もある程度有しているよう、部隊とブリタニアの上層部との折衝を引き受けている。501の組織運営が何だかんだと上手くいっていたのは、正しく彼女のお蔭であろう。

原作前である1941年現在は、彼女はカールスラント空軍に所属している。当たり前ではあるが階級や所属も違い、第3戦闘航空団、通称『JG3』の司令官を務めていた。

即ち俺が所属する隊の司令官なのだが、まさかこうも簡単に原作キャラと邂逅するとは思わなかつた。実際に会えた喜びよりも、心の準備も何もなかつたが故の戸惑いと緊張が大きい。

「……えつと。で、その、何をすればいいんですか？」

チラリと二人に視線を向けて、おずおずと尋ねる。

そう、ミーナがいるとよりもまず、現状として詳細を知らされていないのが問題だ。

隊長に半ば無理矢理訓練場に連行され、詳しい話もされずに銃を手渡され、射撃レーンに入るよう指示された。それが現状の全てであり、それ以上のことは何も聞かされていない。

いや、状況的に大体何をやらされるのかは想像がつくが、それでも実際に言われないことには何も始まらない。カレーの材料で肉じやがを作れと言われるような、そんなひねくれた可能性もないことはないのだ。

「ん？……ああ、そういうば言ってなかつたか。これから戦闘プランの組み立てのためにも、お前の狙撃の腕を確かめてみたいと少佐が言つてな」

「狙撃を？」

「素質があるのは知つてゐるが、今どれだけ出来るのか知つておきたいんだ。とりあえず的当てやつてくれ」

……なるほど。ゲーム的に言えばそういうイベントが発生した、ということか。

フラグはステータスなのか任務での行動なのか今一判断がつかないが、イベントと考えればこの事態にも一応納得は出来る。

的当てというのは、射撃訓練でよくあるあれだろう。向こうに見える鴉避けのような模様の円盤を狙つて銃で撃つ、FPSシューティングのチュートリアルでもお馴染みのあれだ。

念のために隊長に聞いて確認してみると、それで合つてゐるらしい。50メートル毎に設置してある的を順に撃ち抜いてゆけ、と言われた。

「……分かりました。じゃあ、100から狙つていきますね」

はあ、と溜め息を一つ吐いて。銃に弾が入つてることを確認して、構えてスコープを覗き込む。

どうせこの場では彼女達の言うことに従うしかないのだから、これ以上うだうだ言わずに素直にやることにした。

前から二つ目的をスコープで捉え、照準を中心の赤い小さな円へと合わせる。これほどの近さなら、あまり細かい調整をする必要もない。引き金を引くと同時に放たれた弾丸は、簡単に真ん中を貫いた。これくらいは出来て当たり前ということなのだろう、二人がこれに反応を示すことはない。それは俺も同感だったので、何も言わずにさっさと新たな弾の装填とリロードを行う。

「……っ」

スキルと高ステータスの恩恵による、数秒という短いリロード時間。それは二人にとつて予想外だつたのか、背後から息を呑む音が聞こえる。

レーンに備え付けられている弾薬箱から新しい弾を取り出して、それを装填すると同時に次弾を発射口に送り込み、発射準備を終える。その一連の行為を僅かな時間で終えたのだから、普通の人間なら驚くのは当然だろう。

俺だって、これを現実の人間がやつたら驚く自信がある。自分が軽く普通の域を越えている自覚はあるが、それは俺がゲームのキャラクターだから簡単に納得出来るのだ。……そこまでの領域に比較的容易に行けるのはゲームであればこそだ、というのもあるが。

「シツ——」

何はともあれ、続いて的を撃ち抜いてゆく。あまり胸を動かさずに呼吸をし、口から息を押し出すようにして吐きながら、何度も引き金を引き続けた。

150メートル、200メートル、250メートル、300メートル……。正直な話、この距離で静止した目標ならまず外す気がしない。

500メートルまでは楽々と成功させて、一息吐くついでにふと、視線を後ろの二人に向けてみる。すると視線が合ったミーナは、その顔にある種呆然とした感情を見せながらも、笑顔を保ったまま俺に声をかけた。

「ず、随分と簡単そうにやるのね、ヴエラさん。……ひよつとして、経験とかあつたりするのかしら？」

「……？ 経験、ですか？」

「ええ、親が猟師で手伝いをしてたとか、狩りが趣味だつたとか……。随分と銃の扱いに手慣れているみたいだし、そういうのがあるのかと思つたのだけれど」

「え、ありませんけど」

「そうね、やつぱり——」「ごめんなさい、なんですか？」

「いや、ですから、そんな経験なんてありません。ごく普通の一般家庭の生まれです」

唚然。ミーナは俺の言葉に、そんな表情を浮かべた。

彼女は何やら考え込むように眉根をひそめて、やがて数回頭を振り。いつたい何を考えていたのだろう、顔を上げた彼女の表情からは、何故か少し悟りのようなものが感じられる。

「……あの、続けても？」

「ええ、邪魔してごめんなさい。どうぞ続けて」

先程と変わらない、しかし何故か今度は少しの痛ましさを感じる笑顔を浮かべて、彼女は射撃の続きを促した。

少し気になるところはあるが、あまり細かく気にしすぎてもいけないかと、とりあえず考えないでおくことにして。俺は言葉に従い、再び銃を構えて的に狙いを定める。

今度の距離は、550メートル。実戦で相手がしつちやかめつちやかに動いている状況なら難しいだろうが、この状況なら普通に狙えれば当たるだろう。

息を止め、手ぶれを抑えながら引き金を引けば、その弾丸は的の中心を貫いていた。……が、よくスコープでその痕を確かめてみれば、先までの的に空いていた穴より若干小さくなっている。

当たり前ではあるが、空気抵抗等の諸々が存在する以上、銃には有効距離——つまり確実に弾が当たって、目標にある程度の殺傷力を働かせられる距離、言わば安定して使える限界の距離があつた。

Kar98kは良い銃なのだが、有効距離が決して長くはない。無論最大射程と有効射程は別物で、有効距離以上でも撃ち手の技量次第では十分な威力を発揮出来る。出来るのは言え、技量でカバーするにも限界があることもまた、確かなのだ。

「……隊長。このKar98kの有効射程距離つて、どれくらいでしたつけ？」

顔を後ろに振り返らせて、壁に背を預けながらこちらを見ている隊長にそう尋ねる。

話を振られたのが予想外だつたのか、隊長は一瞬驚いたような顔をしていたが、すぐに「ええと」と考える仕草をして。確かに500メートルくらいだつたと、不明瞭な記憶だと前置きした上で、俺の問い合わせてくれた。

「にしても、いきなりなんでそんなこと。銃に不調でもあつたか？」
「不調と言いますか、その、どこまでやればいいのかと思いまして……。有効距離が500なら、それ以上はあまり実戦的ではないと自分は思います」

「……ああ、成程。そういうことか」

チラリと、隊長はミーナに視線を送る。

それを受けた彼女は「そうね」と短く呟いて。数秒程度の思考時間の後、隊長に代わって俺に返答をした。

「貴女の現在どこまで出来るのかを見るのが目的だから、このまま続けてちょうどだい。確実に当てられると思えない距離になつたら止めていいわ」

了解しました、と彼女に返して、視線を的に戻す。

まあ、有効距離が500メートルなら既に越えてしまつてているわけだし、今更なことではある。この体が与えてくる感覚、スキルとステータスによる恩恵の無意識的な何かから感じる限りではどうもまだ余裕を感じることだし、やはり行けるところまで行くことにしよう。

どこまで出来るのかと考えると、自分でも楽しくなつていたのか、俺が口の端を思わず弛めているのが分かつた。その内心のドキドキを胸に抱いたまま、俺は銃を構えて——眼前の的を、次々に撃ち抜いていった。

600メートル。

これもまだ、余裕だ。鼻唄混じりで十分やれる。

650メートル。

大丈夫だ、問題ない。もつと遠くの的を頼む。

700メートル。

スコープの精度が悪いのか、覗いた先に映る的がボヤけてくる。それでも中央には当てた。

750メートル。

ボヤけが酷い。他のスコープはないのかと二人に聞いてみたが、どうやらこれが一番精度が良いらしい。とりあえず我慢して使ってみる。

なんとか当たった。

800メートル。

もうスコープではほぼ判別出来ない。ボヤけすぎて、的の模様が分

からずに只の少し赤い丸にしか見えなかつた。

スコープを覗いてみてもあまり当たる気がしなかつたので、いつそのことスコープを外して撃つてみる。そこまでするくらいならもう止めたらどうだと隊長に言われたけれど、とりあえずやるだけやってみると答えた。

何故か当たつた。

850メートル。

そういえば、【鷹目】というスキルを習得していたことを思い出した。遠くの敵に当てる技術とか書いてあつた気がするから、おそらくそのスキルの効果なのだろう。意識して遠くを見ようとすれば、どこぞの現住民族並の視力を得ることが出来た。

……ここまでハイスペックだと、特化している以外の部分がどれ程酷いのか、少し心配になつてくる。さつき部屋から逃げた時、基地内を数百メートル全力疾走しただけで肩で息をしてしまつたけど、そういえば走る速度もかなり遅かつたような気もした。やはり特化部分以外は、あまり期待してはいけないらしい。

ちなみに的には当たつた。

900メートル。

ミーナが、本当に当たつているのかと尋ねてくる。彼女も双眼鏡で結果を目にしているだろうに、そんなに結果が信じられないのか。撃つてる奴がスコープ覗いてなかつたら多分俺も信じられない。

一応視力が良いからだと説明はしたが、ミーナも隊長も信じてはいないうようだ。まあ1キロ近く先を視認出来る視力、と言わされて簡単に信じる方がおかしいとは思う。

とは言つても実際に当たつているのだから、彼女達にも納得してもらわねば困る。ぐだぐだいい続ける背後の声を無視して、見せつけるように引き金を引いた。綺麗に真ん中に当たつた。

950メートル。

振り返ると、ミーナは頭を抱えて蹲つていた。思わず心配して声をかけると、誰のせいだと言わんばかりのジト目を向けられる。

いや、俺が悪いのか。そりや原因は確かに俺なんだろうけど。でも

スコープ無しでの狙撃なら、どつかのムーミン谷の白い死神だつて実際にやつている。あちらは実戦で何度もやらかした以上、あくまで訓練で静止目標を狙う俺は彼の足元にも及ばないはずだ。

だからミーナさん、そんなモブがシユワルツネッガーを見るような表情は止めてください。そういう顔はどつかのソ連人民最大の敵とかアフリカの星とかイモ大好き寝坊助少女とか、そういう公式チートに向けてやつてください。

あれらに比べれば俺は普通ですんで、多分。この距離も普通に成功しちゃつたけど。

1000メートル。

とうとう大台突入である。そろそろ最大射程が近いのか、弾のブレが修正出来る範囲を越えそうになつてくるが、後少し位は行けるはずだ。

遠くから敵を狙う、ということは狙撃手の本来の役割ではないが、それでも敵が反撃出来ない距離から一方的に叩けるというのは正に理想的な戦闘である。

敵に気づかれない距離で、尚且つ確実に敵を仕留められる技量を持つ狙撃手が居れば、それは戦場において決して小さくない制圧力となる。……ただし、それに要求されるスペックはそれこそエースクラスを下限とする、というオチがつくのだが。

俺がそのエースになれるのか、もしくはもう能力では手が届いているのかは知らないが、とりあえず今はあの的に当てるだけを考えよう——。無駄な思考を一旦排除して、心を静かに落ち着かせた。

「は――ふうツ」

息を吐いて、吸つて、止める。心臓の鼓動の感覚が、よりダイレクトに伝わってくるのが分かる。

瞬きもせずに的を視界に捉えながら、感覚が許可を下すまで、引き金を引きそうになる指を必死に抑えた。これしかないというタイミングで、必ず当たる瞬間に、俺はそれを引かねばならないのだ。

ステンバイ。ステンバイ。ステンバイ。ステンバイ——

「ツ！」

シユート。

パン、という炸裂音を残して、銃弾が的に向かつて飛んでゆく。当初は少し右にずれた、しかし風の影響によつて徐々に左に変えつあるコースは、まさにドンピシャの直撃コースそのものだ。

行け、行け、逸れるな逸れるな逸れるな……。そんな俺の願いを込めた弾丸は、そのまま何事もなく着弾。1キロ先のために、確かに痕跡を残していた。

「……つた！」

思わず、その場で小さくガツッポーズ。

1000メートルの狙撃を成功させたという事実に、ゲームだということは分かつていて、素で嬉しくなつてしまつたのだ。つい喜びの感情を表にして、顔に喜色の強い笑顔も浮かべてしまう。

その子供のような笑みのまま、どう思つたか彼女達にも聞いてみよう、俺は背後に体を向けて。

「——お疲れ様、ヴエラ軍曹。もう十分よ」

いつの間に近づいてきていたのか、金曜日の会社帰りのサラリーマンのような表情を浮かべたミーナに肩を軽く叩かれて、驚きで体を震わせた。

「え？ あの、十分とは、いつたい」

「貴女も疲れているでしょう、今日のところはこれくらいにしておきなさい。大丈夫よ、1000メートル、ええ、そう、1000メートルもろくな訓練も受けずに当たられるんですもの。これくらいの腕があれば投入場所には困らないわ」

「……え？」

ふふふ、と声だけは笑うようにして、しかし表情は徹夜明けの学生の「ご」とき表情のままでいる彼女。それがどうにも不気味で、正直怖い。

「あれ、おこなの？ ミーナさん、おこなの？」

「あ、あの。……怒つて、いらっしゃいます？」

「怒る？ ふふ、おかしな子ね、いつたい何を怒るというのかしら。

腕を見せてくれと言つたのは私で、訓練場を使うのに正式な手続き

をしたのも私で、訓練の報告義務があるのも私で、この結果を書類に書いて上官に提出しなくちやいけないのも私で、後で間違いなく上官に呼び出されて書類の内容について聞かれて嫌みつたらしくネチネチ突つ込まれながら何とか納得させる必要があるのも私だもの。

……貴女に責任はないのよ、本当に」

「……」

「ないのよ」

「あつはい」

押し切るようにして彼女は話を切り、同時に俺の肩から手を離す。

彼女ははあ、と一つ溜め息を吐いて、少し冷静になつたのか、すまなさそうな表情に顔を変えた。

「……ごめんなさい。最近色々とあつて、少しストレスが溜まつているの。

貴女に怒つてないのは本当だし、これから先は私の仕事だもの。貴女が気に病むことはないわ、安心しなさい」

そう言つて、彼女は俺に微笑みを見せた。

先程のはストレスが故の暴走なのか、今ではすっかり元の優しげな雰囲気を取り戻している。その目からは確かに、俺への好意的な感情を感じとることが出来た。

チラリ、と隊長に視線を向ける。すると彼女も笑みを浮かべて、心配するなど軽く手を振つて言つた。

「少なくともお前さんが変に処罰されることなんぞあり得ないし、ヴィルケ少佐もこんなことでお前を嫌うほど器量の狭い人間じやがない。お前は少佐に従つて素直に部屋に戻つてろ、な？」

くしゃくしゃと俺の頭を撫でながら、あやすように隊長は言う。人によつては失礼な行為でもあるけれど、隊長のそれはどうにも気持ちよくて、不快な気持ちなど微塵も感じさせない見事なものだった。

だから、というだけでもないが、俺もそれに素直に頷いて。

銃を訓練場に預け、二人に挨拶をしてから、何やら相談事を始めた二人を残して訓練場を後にした。

……いや、しかし、ゲーム初日から随分と忙しいものである。

ネウロイと戦つて、飛行に苦労して、隊長とミーナに狙撃の腕を試されて。まさかこんな初めから原作キャラに会えるとは思わなかつたが、原作時期と同じように、ミーナは現在も苦労しているようで何より——うん、まあ、何よりであろう。

「さ、て。一旦ログアウトでもしようかなあ……」

軽く伸びをしながら、そう呟く。

プレイ自体はまだまだ出来るのだが、やはり休憩は必要だし、ネットに出回りつつあるであろうゲームの情報も渉っておきたい。

一度ゲームを終了して、喉を潤してトイレに行つてから某掲示板を覗いてみよう。そんな大まかな予定を立てながら、俺は早速ログアウトしようとメニュー画面を開いた。

ガリア撤退戦

???

航空ウイツチにとつての戦場は、陸上海上山上を問わない——すな

わち空がある場所なら戦えるが故に、地表のほぼ全てに他ならない。

空を飛ぶことに魔力を消費するため、陸上ウイツチや通常兵器に比べればどうしても戦闘可能時間は短いものの、その汎用性と利点はその欠点を補つてあまりある。

例えば、航空戦力があるとないとでは、地上戦における難易が劇的に変わる。制空権をどちらが確保するかという点は、近代戦においての天王山なのだ。

対ネウロイ戦でもそれは同じで、敵の航空型ネウロイをいかに素早く排除できるかが、戦闘による戦力の消耗を押さえるためのポイントだ。陸を一方的に攻撃出来るポジションを押さえるアドバンテージは、それほどまでに大きい。

極端な話をすれば、もし航空型ネウロイが存在しなかつた場合、人類はネウロイに勝利出来た——もしくはここまで戦況が悪化することはなかつたかもしだれない。

いくら通常兵器の効き目が薄くても、全く効かないわけではない。数を揃えた爆撃機で絨毯爆撃をすれば、間違いなく効果をあげられる。重装甲の超大型ネウロイは難しいにしても、十把一絡げの小型達は殲滅出来るだろう。

その場合、人類側の戦力は相対的に上昇する。総人類數十億という数の暴力を使って、通常兵器による対応はもつと効果的なものになつていたはずだ。

それを不可能にしているのは、一重に航空型ネウロイの存在であり。それに対する矛たる航空ウイツチの存在が、さらに重要なものとなつてている所以でもあった。

『——た、隊長つ！ ルイスがやられましたあ！』

そして、今ここ。ガリア北部のパ・ド・カレー近郊にて起きている

戦闘で、制空権を賭けた激しい攻防が行われていた。

空ではネウロイとウイツチが幾度も交差し、砲火を交え、視線を向かたどの方にも敵と味方が見えるという、まるでダンスを踊つてゐるかのような混戦状態が続いている。下では戦車を中心とした通常兵力が、小型と中型の混成の陸上型ネウロイ達を必死に食い止めていた。

ウイツチは二桁以上の数がおり、順調に敵の撃墜数を増やしつつあるものの、対するネウロイも陸空合わせて数十近くの数を要していた。数の暴力と、混戦状態による理不尽な流れ弾によつて、ウイツチと他の兵隊達も段々とその数を減らしていたのだ。

無線から響く再びの撃墜報告に、ウイツチ達を率いる隊長のロロット・ヴエルヌ大尉は、歯に思いつきり力を入れることで感情の動搖を抑えた。

視線を一瞬だけ下に向けてみると、確かに一人の少女が落下していく姿が見える。その少女は間違いなく彼女が率いる隊の隊員で、天真爛漫な性格で隊の皆に人気があつた、彼女もよく知る存在だつた。

その少女が気を失つて、シールドが間に合わなかつたのか、その腹部を真つ赤に染めながら落下して行く。リベリオンに恋人がいるのだ、と先日嬉しそうに話していた彼女の姿が、ロロットの脳内を過つた。

「……狼狽えないでください。命令は変わりません、全員目の前の敵を食い止めることに集中を！ 落伍者の救助は禁止、繰り返す！ 落伍者の救助は禁止ッ！」

ルイスの姿から視線を逸らして、ロロットは感情を理性で押さえつけながら、先程下した命令を繰り返す。

彼女達の背後には、ガリアの避難民達がいる。彼女達がネウロイを食い止められなければ、その数万単位の民衆と護衛の僅かばかりのガリア軍は、あつという間に全滅の憂き目に遭うだろう。

彼女達がこうして大空戦を挑んでいるのは、避難する民衆の護衛に就いていたガリア軍——正確には、北部で未だに抵抗を続けていたガリア軍の残党の一部が集結した寄せ集め——が、近くに大規模なネウ

ロイの編隊を補足したからだつた。

このまま進めば襲撃は避けられないと判断した彼らは、一部を残して避難民と別れ、ネウロイに向けて転進。半ば無理矢理にでもネウロイの進撃を食い止めることで、民衆が避難出来る時間を稼ごうとしているのだ。

彼らが目指していたパ・ド・カレーには、カールスラント軍が十分な戦力を残して駐留している。そこまで逃げられれば助かつたも同然だろうし、近くまで行けば迎えに来てくれる可能性だつてあつた。出発時点でカールスラント側に連絡は入れて いるし、受け入れとブリタニアへの渡航の了承の返事も聞いていた。ネウロイに突撃することも一応連絡は入れたが、戦闘地点と基地の間はそれなりの距離がある。

もし彼らが援軍に来るとしても、その時までに半数は生き残つていまい——。この絶望的な状況に、ロロットはそう判断を下していた。

『…………隊長ッ!?』

ハツ、と。焦りを多分に含ん無線からの声が、彼女の頭を突き抜けた。

反射的に背後を振り返ると、小型の航空型ネウロイが一体、彼女の背中を狙つて いるのが分かつた。

普通ならそこでパニックにでもなるのだろうが、ロロット・ヴエルヌは紛れもないエースである。彼女はすぐさま腰に差した軽機関銃に持ち替えて——抱えたアサルトライフルでは間に合わない——引き金を引き、相手を即座にミンチに変えていた。

その反応速度は神速で、正にエースと呼ぶに相応しい技量だつた、が。

『隊長ッ、もう一体イイイ—————ッ!!』

彼女にとつて不幸だつたのは、迫つていたネウロイがその一体だけではなかつた、ということだつた。

彼女の死角、下方から襲いかかってくる別のネウロイに、銃を打ち終えたばかりの彼女は即座に反応出来ない。彼女が銃を向け直すよりも、そのネウロイが攻撃を加える方がどうしても早かつた。

ネウロイから発射された赤い光弾が、ロロットの体を穿つ。至近距離で、銃弾よりも素早く放たれたその攻撃は、彼女の腹部を射抜いていた。

カハ、と。彼女の口から、少量の血が吹き零れる。

幸いギリギリで——本当に紙一重でシールドが間に合い、致命的なダメージだけはなんとか避けられたものの。それでも完全には防げず、内蔵が傷ついてしまったのか、反射的な吐血は避けられなかつた。あくまで命は助かつた、という状態である。戦闘の継続などはほぼ不可能だろうし、事実、握力が弱まつた手から機関銃が離れていくのを見て、ロロットは自身の限界を感じ取つていた。

そして、また。命が助かつたというのは、あくまでもこの瞬間ににおいてのみのことである。

彼女を襲うネウロイは、今も変わらずそこに存在しているのだ。傷ついた獲物を前にしての、それの次の行動は——彼女には容易に想像出来た。

「……くり、かえ——す……」

ネウロイが、再び光弾を発射するまでの、間。

泣き叫ぶようにロロットの名を呼ぶ声が響く無線に、彼女はかされる声で語りかけた。

「らく、ガ——しゃ……の、きゅう、じよ、は……きんし。そういうわれを、かえりみず——われを、われを、われを……」

……あれ。そういえば、次はどう言うんだつたかな、と。

赤い光を強めるネウロイを目の前に、彼女は、そんなことを考えて。

『——ヴエラ軍曹、撃て』

『……J a w h o l.』

薄れゆく意識の中、遠くで乾いた音が一つ、鳴つたような気がした。

「……」

……生きている。意識が覚醒して、まずロロットが思つたことはそれだった。

彼女の視界に映るのは明らかに人工的な天井で、体勢と感触を考えるに自分はベッドのようなものに寝かせられているのだ、と分かる。痛みは感じるものの、腹部に食らつたはずの傷も上体を起こせる程度には治つていて。治癒魔法と通常の治療の併用か、体のあちこちに包帯も巻かれていた。

部屋の中を見渡しても、彼女の他に人影はない。

遠くから生活音らしきものは聞こえているから人は居るのだろうが、色々と尋ねるべき人間が見当たらなくて。仕方ない、と彼女は病身を押して立ち上がり、壁に手をついて体重を支えながら、なんとか歩みを進めた。

ペタリ、ペタリと弱々しい足つきながらも、彼女は部屋の扉に向けて歩いてゆく。

ようやく辿り着いた彼女は、ドアノブに手を掛ける前に、一つ息を吸つて。傷の影響だろう、どうにも力が入りにくい自身に力を入れ直すと、意を決して扉を開いた。

「——ヴエルヌ大尉っ！」

彼女が廊下に姿を見せた瞬間、ちょうど居合わせた一人の少女が、驚いたように声をあげる。

少佐の階級証と、カールスラントの軍服を身に着けたその赤毛の少女は、慌ててロロットに駆け寄つていく。

今にも崩れ落ちそうなロロットに肩を貸し、大丈夫ですかと心配する声をかけてくる彼女に対し、ロロットは笑顔を半ば無理矢理浮かべ

た。

「治癒魔法で傷は塞がつたとはいえ、内臓が傷ついているんです！ 無理をせず、大人しくベッドの上で——」

「……ありがとうございます、少佐殿。でも……。他の、皆が……」「貴女の部下のウイッチ達なら、全員命の危険はありません！ 付近を偵察していた部隊が強行して援軍に行つたんです、救助が全員間に合つたんですよ！」

え、と。すがるような目を向けたロロットに、少女は諭すように話を続ける。

「襲撃の連絡を受けた際、我々の部隊——JG3が近郊で作戦行動中でした。連絡を受けた上層部は、そこから二個中隊を引き抜いて救援に当たらせたんです」

「……二個、中、隊？」

「ランガード中尉の第7中隊、ダール中尉の第4中隊、どちらもエースに率いられた精銳です。相応の損害は出ましたが……。ネウロイも擊退に成功、怪我人も救助が間に合いました。避難民の被害も皆無ですよ。

作戦は成功したんです、ヴエルヌ大尉」

だから、貴女もゆっくり休んでいてください、と。彼女のその言葉を聞くと同時に、ロロットは崩れ落ちた。

……生きていた。生きてくれて、いた。

彼女の内心は、思わずそんな感情で溢れて。しどしど、静かに涙を流しながら、自らに肩を貸す少女に「ありがとうございます」との礼を繰り返し呟いた。

「……礼なら、貴女方を救援に行つた彼女達自身に言つてあげてください。私は本隊にいて、そちらには向かいませんでしたから」

そう言つて、ロロットから申し訳なさそうに顔を逸らす、少女。

少女——ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケと名乗った彼女は、自らをJG3の司令官を勤めている人間だと言つた。確かにロロットを助けたのは彼女の部下ではあるが、彼女自身は助けに行つたわけではない。

礼を言われて嫌というわけではないが、部下の苦労と名誉を奪つてしまつているような気がして、彼女はあまり嬉しくはなかつた。……實際に対価として血を支払つたのは、あくまでも彼女の部下なのだ。彼女のそんな内心をやんわりと察したのか、ロロツトもそれ以上繰り返すことはなく。今度は色々と迷惑をかけたことに対する、短い謝礼をした。

「……分かりました。後程、直接礼を、述べに行かせてもらいます、ね……。

「ご迷惑をお掛けします、少佐……」

「いえ、お構い無く。お疲れでしょう、部屋に戻つていてください。詳しい説明は夜にいたしましょう、今はごゆっくりと」

その言葉に、ロロツトは弱々しく頷いて。ミーナの肩を借りたまま、自分が寝ていた部屋へと戻つていった。

数十秒ほど経つた後、ロロツトをベッドの上に戻したミーナが部屋から出てきて。後ろ手にドアを閉めながら、一つ、溜め息を吐き——手で顔を覆うと同時に、天を仰ぐ。

その表情は手によつて隠されてはいるが、口元は横にこれでもかと引き締められていて、彼女の感情の指向性は誰の目にも明らかであつた。

「……早すぎる」

ポツリ、と。人影のない廊下で、彼女は呟いた。

内心のそれを隠しきれなかつたのか、声の端々を震わせて。動搖、焦り、悲しみ、怒り……。そういつた負の感情を、彼女は今持て余してしまつていて。

ネウロイが、この地に近づいている。それはもう、誰にでも分かつていたものだ。

参謀本部は、当初一月と言つた。現場からの報告を受け、次の会議ではその半分に減らした。前段階の作戦を実行した時は、それがまた縮まつた。実際に作戦が始まると、さらに縮まつて——現実はさらには、その上を行つたのだ。約一週間。

何もしなければ、そんな短期間の後にネウロイが基地へ、ひいてはカレー港に押し寄せる。参謀本部の最新の報告では、そんな予測だつたらしい。

作戦は完璧だつた。あの時点で考えられうる最良の作戦プランを、カールスラントは用意していた。それはまず間違いない。

なら何故、このような事態に陥つたのか……。正直に言つてしまえば、現実であるが故のイレギュラー——ガリアの不甲斐なさのせいだろうと、彼女は思つていた。

パリの陥落、それによる戦線の後退と分散。全てがそこの読み間違えからの話であり、それがなければ今頃は余裕を持つて作戦を行えているはずだつたのだ。

北部で抵抗していたガリア軍の残存兵力の撤退も、あまりにも早すぎる。ロロットがいた部隊はその一部とはいえ、残りの部隊も次々に抵抗を諦めつつあつた。

それによつて、ネウロイの余剰戦力が発生。それの多くは北部で未だ残る抵抗勢力に振り分けられ——ロロット達が遭遇した一団もその類いであろう、という話である。

それはつまり、作戦を何とか行うためには、その増強しつつある敵戦力を避けねばならない、ということであり。そのための犠牲と行われるであろう任務の危険性を考えて、ミーナは思わず泣きたくなる衝動を覚えた。

「……クルト……」

今はこの基地で整備兵として働いている、自らの親しい男性の名を呟いて。

彼女はそつと、天に祈りを捧げた。

イントロダクション 1

『総員、起床オーネンツ!!』

パチリ、と。起床のラッパを目覚ましに、俺の意識は覚醒する。

寝惚けた頭を何とか動かして、ベッドから飛び起きると同時にシーツとマットを畳みだして。綺麗に形を整えた次は、そのまま流れように着替えへと移った。

パジャマに使っていたシャツを脱ぎ、露になつた自身の双丘にさつきと下着を着ける。ぶるん、と脱いだ拍子に揺れるそれを見ても、この数日は何も思わなくなってきた。

いや、正確に言えばそういう興味を抱いたりはするのだが、正直そんなことに時間を割いている余裕がない。この着替えもさつさと終わらせなければ上官にどやされるため、お楽しみの時間なぞは少なくとも現状では諦める他にないのだ。

トイレや水浴びも最初はどうにも変な感じがしたもの、数回こなせば何とか普通に行えるようにはなつてはいる。何がとは言わないが、終わつたら拭かねばならないということも身を以て知つた。

そもそも、いくらゲームとはいえそこまで再現してあるこれが悪いというかありがとうというか、何というか。

倫理コード諸々が非常に緩い十八禁版を買った俺のせいと言えばそうなんだろうが、まさかゲームで異性の色々を自己学習させられるとは思わなかつた。

……ひよつとして、生理とか妊娠とかまで再現されてはいないだろうな、と。変態的に作り込まれているこのゲームに対して、思わずそんな恐ろしい想像が頭を過る。

「……よつ……。んしょ、つと……」

シャツを纏い、ズボンを履き替え、上着に袖を通してゆく。普段俺が着ている服とは色々と違ひがあるものの、戸惑つたり手を止めたりすることはない。

これもステータスとスキルのお蔭——ということは流石にないだろうが、戦闘と同じように身体の方が覚えていくようで。半ば自動的

に着替えたのベッドの整えたのを身体がやつてくれるものだから、そういうといった点で俺が苦労することはなかつた。

下着のポジション調整とか、ブラのホックの部分を先に留めてから半回転させて肩紐を通す方法とか、そういう女性としての生活感溢れる知識が増えてゆくことに何とも言えないむず痒さを感じて。

二分もかからずに着替えを終えた俺は、未だに着替えを続けている同室の少女達に一言告げた後、さつさと部屋を抜け出した。

「うあつ」

宿舎の建物から外に出ると、朝日の光が俺の目を焼いた。思わずちよつと驚いた声を漏らして、目蓋を細めながら段々と、寝起きの目を外の明るさに慣らしてゆく。

ぱたぱた、と小走りで目的地に向かいながら——他の人の小走りより随分遅いようで、途中で何人かに抜かれた——俺はふと、今日でゲームを初めてから一週間目だな、等と思い出していた。

あくまでゲーム内の時間経過だし、現実世界でどの程度経っているのかは分からぬが、俺の体感的な時間はやはりゲーム内での七日間である。ゲームの世界やシステムにも色々と慣れてきて、仕様のあれこれも解り出していた。

攻略スレでも見れれば、もつと詳しく分かるんだろうけど——。そこまで考えて、無い物ねだりをしてもしょがないと首を振る。

俺がゲームを始めてから——『ログアウトが不可能』という事態に

気がついてから、今日まで七日間。

このゲームの世界で、俺は一人のウイッチとして過ごし続けていた。

ログアウトボタンも反応しないし、ヘルプで確かめたログアウト方の、原因については全くと言つていいくほど見当がつかないが、とにかくその異常は確かな事実として存在していた。

ログアウトボタンも反応しないし、ヘルプで確かめたログアウト方

法を幾つか試してみても不可能で。何度も繰り返しても、俺の意識が現実世界に戻ることはなかつた。

散々驚いて慌てた後、どうせ最悪の場合はゲーム機器の仕様で無理矢理止められる——使用者のバイタル等に問題が発生した場合、自動的にゲームが中断されるセーフティーがある——と思い、とりあえずゲームを続けてみることにしたのが七日前。

現状はどうしようもないのだからと割り切つて、ログアウト云々を一旦思考の外に追いやり、ゲームを楽しむことにした俺は、何だかんだとウイットとしての生活を楽しんでいた。

「……あむ」

ぱくり、と。皆が集まる食堂の中、隅の方の席に座つて一人黙々と、朝食のジャガイモ料理を口に運んでいる。最早驚きはしないが、味覚や空腹感まで再現され、ジャガイモのハフハフとした味が口の中に広がつた。

この状況では食料事情も芳しいわけではないのだろう、食事に出る料理はジャガイモを材料にしているものが多い。それでも毎食それなりの量が出る辺り、大分恵まれてはいるのだろうが。

原作を見るとどうも誤解しがちになるが、ストライクウイッチャーズの世界観は人類がチエックメイトに向かつて突き進んでいるかのような状況である。アニメの穏やかな風景から少し視線を逸らせば、そこで行われているのは正に戦争だ。

崖つぶちと形容するにはまだ余裕がありすぎるとは言え、それでもマトモな対抗戦力が十代の女子のみ、という時点で色々とお察しだつた。……少女が戦争に出る状態を眞面目に考えてしまうところなる、ということもあるが。

実際、この基地の雰囲気はまだ明るさがあるものの、昨日の任務で救出したガリアの難民達などは、総じて皆疲れた表情をしていて。任務の帰り、ふと視線が合つた子供に笑顔で手を振つてみても、その子は軽い会釈を返しただけだつた。

一週間前の初陣以来、何度か任務を経験している俺だつたが、昨日のそれは色々と毛色が違つた。今までのものは哨戒任務だの、数体の

ネウロイの殲滅だの、そういうつた簡単なものばかりだったが……。昨日のそれは正しく、『戦争』だつたのだ。

『……ヴエラ軍曹。お前はここで、援護射撃に徹していく』

当初の作戦を中断し、命じられて行つた先で行われていた、殴り合いのような総力戦。ゲームらしからぬ迫力と雰囲気を漂わせるそれは、俺の心を一瞬呑んでもしまうに十分だつた。

それが顔に出ていたのか、戦場を把握した隊長に早々そんなことを言われ、俺は離れた辺りで素直に狙撃のポジションを探して。Kar98kを構えながら前方の派手な空中戦を見据え、見知らぬウイッチ達がネウロイとのダンスを繰り広げる様を眺めていた。

腕がシステムによるものだからなのか、幸い狙撃に影響はなかつたし、援護射撃も問題なく行えて。戦場に突入していくた味方の働きも凄まじく、数十分も経つ頃には、多少の損害と引き換えに任務は終わらせることが出来た。

終わりよければ、と言つてしまえばそれまでなのだけれど。それでもやはり、これからは、気楽なようにはいかない氣がする——。あれから一晩が経つても、そんな不安が俺の心の中にこびりついて離れなかつた。

「——あ。トゥルーデ、あそこ空いてるっぽいよー」

そんなことを考えながら食事を進めていた俺の耳に、ふと、そんな声が聞こえて。チラリと視線を向けてみれば、トレーを持った二人組が俺が座つている辺りに近づいてきていた。

食堂はかなり大きめの広さがあるものの、食事時は皆が集まるために非常に混雑している。俺が座るテーブルは運良く空いていたが、その他の席は尽くが埋まっているように見えた。

だから、食事を貰つてきた人間がこちらにやつて来ようとするのは別におかしくはない、のだけれど。問題だつたのは、その二人の姿に見覚えがあることで。

少尉の階級証と、中尉の階級証を着けたその少女達が、歩み寄つてくるのを見て。俺は思わず手を止めて、二人を見つめてしまつていだ。

「……すまない。ここ、座つてもいいか?」

中尉の階級証を着けた方の、真面目そうな雰囲気をした茶髪の少女が、そう問いかけてきた。

反射的に了承の返事を返すと、少尉の階級証を着けたお氣楽そうな金髪の少女が「やたつ」と呟いて。早速俺の向かいの席に座り、もう片方の少女をちよいちよい、と手招きする。

その様子に呆れたような溜め息を吐きながら、茶髪の少女は彼女の隣に腰掛けて。こちらに視線を戻すと、俺の肩——軍曹を表す階級証に目をやり、口を開いた。

「軍曹か……。あ、いや、視線が少々不躊躇だつたな。

私はゲルトルート・バルクホルン、階級は中尉だ。初めまして軍曹」茶髪の少女こと、ゲルトルート・バルクホルンはそう名乗つて、ニコリと微笑みを向ける。

金髪の少女もそれに便乗する形で名乗りをあげ、軽く手を振りながら自身の紹介をした。

「エーリカ・ハルトマンでつす。階級は少尉、よろしくね!」

「……ふ、フランツィスカ・ヴエラ軍曹、です……」

呆然、と。いきなりの原作キャラクター達との邂逅に、俺は開いた口が塞がらなかつた。

ミーナの時にも思つたけれど、何というか、どうしてこうも予想外の出会いばかりなのであろう。こんなサプライズばかりでは、期待も心構えもあつたものじやない。

道端で偶然覇廻の球団のプロ野球選手を見かけるような、そんな瓢箪から駒が出てきたような事態だ。確かに嬉しくはあるが、どちらかと言えば驚きの方が大きかつた。

ゲルトルート・バルクホルンに、エーリカ・ハルトマン。どちらも根強い人気を持つ、ストライクウェイツチーズの登場人物である。

二人はエースの中でもさらに飛び抜けた腕前を持つ、所謂『トップエース』と呼ばれる類いの人間であり、特にエーリカは人類でも四指に入る撃墜数を誇る、まごうことなき超人であつた。

原作前の今頃でも既に頭角は表していたはずで、彼女はバルクホル

ンの旗下でその腕前を存分に發揮していたはずである。トップエース二人を目の前にしたという点では、『フランツイスカ・ヴェラ』が呆然とした態度をとつても不自然ではなかつた。

故に、そうした態度を怪訝に思われることはなかつたものの、俺の名前を聞いたバルクホルンは、少し驚いたように目を見開く。

その反応が予想外で、思わずどうしたのかと尋ねれば、彼女は「いや」と一言呟いて。俺の顔をじつと見つめながら、その理由を口にした。

「ミーナ——ああ、ヴィルケ少佐から、JG3に面白い新人が一人入つたと聞いてな。そうか、お前が……ふむ」

そう言うと、バルクホルンは俺を観察するかのようにしげしげと視線を動かし、どこか興味深そうな表情を浮かべた。

数秒ほどそうした後、彼女はふと我に帰り。再び不羨な視線を向けてしまつたと謝意を述べ、その話を続ける。

「いや、なに、少佐の話では随分と……個性的な人間であるように思えてな。予想外に眞面目そうなものだから、その、私も驚いたと言うか

「……マルセイユみたいなのを予想してた、つて素直に言えばいいのに」

ボソリ、と。バルクホルンの言葉を遮るようにして、エーリカはそう呟いた。

その瞬間、んな、とバルクホルンは団星を突かれたかのように驚いて。隣で悪戯が成功したかのとき笑みを浮かべているエーリカに、余計なことを言うなと軽く叱りつけた。

……マルセイユ、とは。もしやあの、アフリカの星であるマルセイユのことだろうか。

確か設定上はエーリカの同期で、バルクホルンの部下だつた頃があるはずだから面識があるのは当然としても、何故ここで彼女の名が出てくるのだろう。

そんな風に悩んでいると、表情に出ていたのか、こちらに視線を向けたエーリカが気がついたように笑みを浮かべて。バルクホルンの

説教を受け流しつつ、俺への説明として口を開いた。

「マルセイユってのは、前にJG52にいたウイツチでねー。我が強いつて言うか、プライドが高いって言うか……。腕は良かつたんだけど、上官だったトゥルーデと何度も対立しちゃつてさあ。

ぶつちやけ貴女のことはミーナからは『腕がいい』ってぐらいしか聞かされてなかつたし、その時のミーナも何でか頭が痛そうにしてたからねー。まあほら、つまり……」

「自分の経験と結びつけて、私が、その、傍若無人な人間だと思つてた……と？」

「そゆこと。あ、ちなみにマルセイユはもう別の部隊に行つちやつてるけどね。確かアフリカに行つた部隊だつたかなあ」

「へえ、と。エーリカの話に相づちを打ちながら、俺は苦笑で頬をひきつらせるのを我慢していた。

マルセイユがどういう人間なのかは、見も蓋もない言い方をすれば、所謂『原作知識』というやつで知つていて。某同人誌シリーズも読んだことがあるし、あのマイペースっぷりは重々承知していた。

嫌いなキャラではない。むしろ俺としては大好きで、キャラクターとして見るなら非常に魅力的な存在である。人間としての成長も遂げたアフリカ戦線時代の彼女は、本当に大好きなのだ。

だが、自分があれ——しかも生意気真っ盛りの時期と同じような性格をしていると思われていた、と知つて。いくらそれが勘違いによるものとはい、決して嬉しい気分にはならなかつた。

どこぞの剛田さん家の息子よりは比べるのも失礼なほどマシな人間だし、後には随分と丸くなつているとはいえ、JG52時代のマルセイユと比べられても嬉しくはない。腕前なら話は違うが、性格は絶対に俺の方がマシだつたはずだ。

命令違反上等、軍規無視上等、個人戦果優先、上官反抗の数え役満問題児といつしょくたにされても、正直苦笑しか出てこない。

実際、そんな早とちりをしていた犯人——バルクホルンも彼女への評価は俺と似たようなものらしい、ばつの悪そうな表情を俺に向けていた。

「いや、本気でそう思っていたわけでは……。その、腕はいい部下に悩んでいると聞くと、つい……。

……いや、なんだ。すまんな」

「あ、いえ。別に気にしてませんので」

マルセイユさんのこともよく知りませんし、と嘘を付け足して。この話は終わりにしよう、と言外に含ませて彼女に言つた。

まあ、大した話ではないし、生産性があるものでもない。このまま続けても何ら意味はなかつた。

二人の方も続ける意思はなかつたのだろう、すぐに意識を切り替えて。会話の新しい話題を振ろうと、エーリカが話を始めた。

「そう言えばさー。最近の情勢、ちょっとヤバイっぽいよねえ」

「ん？…………ああ、そうだな。パリの失陥に北部ガリアの戦線の崩壊、それによるガリア軍の撤退……。ネウロイの攻勢が確実に強くなつてくる」

「昨日つて、確かJG3がガリア軍の応援に行つたんだっけ？　ね、ネウロイの規模つてどのくらいだつた？」

へ、と。いきなり始まつた真面目な話に驚いていたところに話を振られ、一瞬固まつてしまふ。

が、自分に注がれている二人の視線に気がつくと慌てて我を取り戻し、思い出そうと必死に頭を働かせて。しどろもどろながらも、話を途切れさせることなく続けることが出来た。

「確か、三十……。私達が戦場に着いた時は、確か、それくらいの数だつたかと……」

「三十か。となると、はぐれじやない……。本格的な攻勢の兆し、か？」

「相手はガリア軍に回してた戦力が丸々余つちやうわけだから、そのうちの何割かがこっちに来るとして……。うわー、考えたくなーい」「……作戦に支障が出てくるな。全く、本国の失陥といい、あの問題児といい、どうしてこうも頭が痛くなることばかり立て続けに……」
ぱくぱく、と。二人はそんな話をしながら、手の方も動かして朝食を食べ進めていった。

口の中に食べ物を入れて喋らない、ということマナーを守つた上でこうも見事に会話をする彼女達は、随分とまた器用なものである。

器用さのステータスが高い故か、俺も出来ると言えば出来るが、時折話を振られた時に口に何かを含んでいると、どうしてもすぐには返事を出来ない。

ステータスは万能ではない、ということだろうか。……当たり前と言えば当たり前ではあるけれど。

「あ。そういうやさー、ヴエラ」

ふと、話の途中で、エーリカは思い付いたようにそう言つた。

どうしたのかと尋ねれば、彼女はニヒヒと再び悪戯つ子のような笑みを浮かべていて。俺のことを少しからかうような、そんな雰囲気を纏わせながら言葉を続けた。

「今思い出したんだけどさあ、撃墜数四なんだって？ 淫いじやん、あと一体でエースだよエース」

「何？ そりだつたのか、軍曹」

バルクホルンの問いかけに、俺はコクリと頷く。

初陣に一体、その次の次にやつた任務で一体、昨日の任務で二体。合計四体のネウロイを、俺は今までに撃墜していた。

相手にしたネウロイの数が少なかつたこともあるし、装甲が堅くてあちこち動き回る奴等を倒すのはそれなりに難しいことだつたからそんな劇的な数字ではないが、それでも四体撃墜というのは中々に素晴らしい数字である。

新人にしては望外だ、と隊長も俺を褒めていた。狙撃の腕を考えると、とミーナは少し納得がいかないようだつたが、一撃で敵を倒せない——K a r 9 8 k では火力が少々弱いことを伝えると、彼女も納得の様子を見せた。

現状として、一撃目で敵の装甲を剥ぎ、即座に二撃目をコアに叩き込むという戦法をとらざるえない。装甲の上から吹き飛ばす火力がない——しかも狙撃は遠距離であるため、威力も多少減衰する——以上、面倒でもそうした方法をとらなければならなかつた。

正直、実戦では中々に辛いものがある。何せ敵を攻撃する、という最大の隙をより長く晒すことになるのだ。昨日の任務のように敵が多数いる状況では、二撃目を撃てる余裕があまりない。

窮地の味方を支援するような援護射撃自体は問題ないのだが、それは装甲を剥ぐか相手の動きを一時的にでも止めることに止まつて、自身の戦果には結び付かない。むしろ手負いをプレゼントする、味方の戦果をアシストすることになるのが殆どだつた。

……火力の高い狙撃銃の用意を掛け合つてみる、とミーナは言つていたが、どうなることやら。とりあえず、期待しないで待つておこう。「一週間で四体だから、このペースだと月十六体? 半年経つたら大エースじやん、やつるうー」

ひゅーひゅー、と明らかに冗談だと分かる口調で話すエーリカ。確かに数字上はそうなるが、現実は——これはゲームとは言え——そう甘くはない。そんな単純な計算がまかり通れば、今頃大エースがそこら中に転がつてゐるほどに増加してゐことだろう。

その冗談に、俺とバルクホルンはアハハと笑つて。でも、と一つ前置きして、彼女は口を開いた。

「それくらいの気迫は必要だぞ、軍曹。数字に拘るのも良くないし、気負いすぎも良くないが、本当に良くないが……。自分もエースになつてやる、くらいの意欲は持つておくべきだ。

……そうだつたら、どこぞの少尉みたいにやる氣のないようにはならないだろうし、な?

「あー美味いわー、このジャガイモ料理超美味しいわー。話とかちょっと全然聞こえてこないわー」

チラリ、と視線を横に向けながらの彼女の言葉に、エーリカは食事に没頭する振りで答えた。

それを見た彼女は、怒りよりも先に呆れが来たのか、一つ溜め息を吐いて。ふと視線が合わさつた俺と、数秒ほど見つめ合い——やがて二人揃つて苦笑染みた笑いを漏らした。

俺とこの二人のファーストコンタクトは、大体そんな感じで行われ

た
。

???

窓一つない、閉塞感漂う薄暗い一室。大きな四角いテーブルが中央に置かれ、その回りを幾人もの男女が取り囲んでいた。

テーブルの上には大きな地図が広げられており、ガリア北部——とりわけパ・ド・カレー地方を細かく記したその地図は、カールスラントが対戦時に作成し、第一次大戦後に密かに更新したものである。

更新の際にガリア側が協力を拒否したため——当たり前ではあるが、他国に自国の正確な地理を知らせるなど本来は自殺行為である——カールスラントが独自で調べて作り上げたものではあるが、それでも出来としてはかなり良いものだつた。

勿論正確無比とはいかないし、細かな計算をしてしまえば実際とズレは出てしまうだろうが、この状況下では及第点を優に越える代物である。カールスラント軍はこの地図を用いて戦略を立て、このガリア北部における作戦行動を決定していた。

地図の上、カレー港や近郊の基地等に複数の白い石が置かれていて、その他の地域に多数の黒い石が置かれている。白は味方である人類の戦力を表し、黒は敵のネウロイを表していた。

黒に比べて数が心もとない白は、その数の差ゆえに黒による半包囲を許してしまっている。ベルギカ、そしてピカルディー地方——海を背にして白を閉じ込めるように、幾つかの黒が配置されていた。

「——昨日。^{きくじつ}ベルギカとの国境付近に駐留していた陸軍第1装甲集団が、これ以上の戦線の維持は不可能と判断し撤退。遅滞戦術を行いつつダンケルクへと後退しています」

コツリ、と。指し棒でベルギカの黒石を指しながら、テーブルを囲む内の人一人がそう話を始めた。

眼鏡を掛け、鋭い眼差しを浮かべて知的な雰囲気を漂わせているその男は、中将の階級章を着けている。

ガリア戦線における作戦行動のために組織されたA軍集団、それを率いるルントシュテット上級大将の参謀長を務める彼は、カールスラ

ント軍内部でも一目置かれているほどの知恵者として名高い。

彼が作成した作戦プランが、当初に用意されていた作戦に代わって採用された、というのは有名な話だ。彼の名前をとつて呼ばれているそのプランは、カールスラントが現在進めていたる撤退作戦、その戦略の基礎になっている。

「また、撤退を開始していた。ピカルディー地方の残存ガリア軍ですが、昨日に当基地への収容が完了致しました。途中ネウロイの中規模集団との戦闘が発生したため、JG3の二個中隊が救出任務に赴き、ヴエルヌ大尉以下十一名のウイツチを無事保護しています」

「損害は？」

「軽傷を負つた者が数人、骨折で右腕を使えなくなつた者が一人。JG3の戦力の一割がすぐには動かせません」

むう、と。上級大将の階級章を襟に着けた、しかし大佐の制服に身を包んでいる老人が、彼の話を聞いて苦々しげに顔を歪めた。

ゲルト・フォン・ルントシュテット——カールスラントの作戦の中枢を担うこの男は、貴重な航空ウイツチが一時的にとはい減つたことに忌々しさを隠せない。

対ネウロイ戦術においての主力と言える航空ウイツチは、全世界合わせて一万にも届かない、数千程の数しかいない。陸上ウイツチを含めれば軽く万単位を数えるものの、決して戦力が潤沢なわけではなかつた。

何せ、ウイツチというのは十代の少女がなるものだ。さらに一部の例外を除いて、処女を散らしたり、あるいは二十代に届いてアガリを迎えるたりしてしまふと、彼女達は魔力を失つたりシールドが張れなくなつたりで、戦力化が難しくなる。

処女で、十代で、魔力のある少女。そんな人間を選んで徴兵しているのだから、数が集まるはずもない。特に戦力の補充もろくに行えない現状では、数人のウイツチの損失さえ痛手と言つてよかつた。

戦力の遣り繰りに思考を飛ばしていたルントシュテットは、「また」と男が続けた言葉に我に帰つて。まだ悪い報告があるのかと、思わず眉をしかめていた。

「ガリア軍に同行していた難民ですが、現在カレーの周囲の町に分散して待機させております。規模は一万二千弱を数え、皆ブリタニアへの渡航を望んでいる模様です」

「……ガリア難民か……」

頭を抱えながら、ルントシユテットは一つ溜め息を吐く。

カールスラントの民を脱出させ、それから出来る限り被害を出さずには軍の撤退を完遂する、という当初の目的だけでも半ば無茶に近いと。いうのに。どうしてガリアの面倒まで見なくてはならないのか——。そう呟きたくなるのを、ルントシユテットは上に立つ人間としての矜持によつてなんとか堪えた。

ガリア。カールスラントにとつて、この国は様々な意味で忌々しい存在である。

そもそもこの二国の関係は、決して良いものではない。元々が潜在的、あるいは実際に剣を交えた敵国同士であり、歴史上において何度も戦争を起こしていた。

かつてナポレオンによる侵攻が起きた際、カールスラントはティルジット条約という屈辱的な講和条約を結ばされた。この条約によって領土を大幅に削られたカールスラントは、シュタイン、ハルゼンベルグ等の改革者達によって、ガリアに対抗するための近代化政策が推し進められたのである。

そしてその半世紀程の後、今度は狩我戦争によつてガリアが甚大な打撃を受けた。ビスマルクが富国強兵を推進したカールスラントは、ナポレオン三世が率いるガリア軍をセダンにおいて撃破。鉱業地帯と莫大な賠償金を獲得するという、ガリアにとつては屈辱的な条件で講和を行つたのだ。

そんな歴史があるわけだから、二国の関係が良い筈もない。ネウロイという人類共通の敵が現れるまで、次の戦争はこの二国が再び起ころるものであろう、とさえ言われていたほどである。

第一次ネウロイ大戦後は多少友好的になつた——と言うより、人類同士でいがみ合つてゐる場合じやないと、感情論をある程度棚上げせざるを得なかつた——ものの、全ての人間がそう簡単に割り切れるわ

けもなく。表面的には友好関係を築いてはいるが、潜在的な、そして部分的な対立は未だに続いていた。

「ガリアめ……。いつたいどこまで、我々の足を引っ張れば気が済むのだ……！」

同席していた将軍の一人が、苛立つた感情を隠そともせずに毒を吐く。

他の人間も不機嫌な表情を見せる者は決して少なくなく、口にすることはないが、ルントシユテットも似たような感情をガリアに対しても抱いていた。

自分が任された作戦が、ガリアの予想外の失態で雲行きが怪しくなりつつある、という個人的な感情もあるものの、ガリアのせいにカルスラントが余計な出血を強いられていることも事実だつた。

個人的な関係はともかく、ガリアという国家に対して悪感情を持つカールスラント軍人は少なくない。それでもガリアを見捨ててしまえ、という結論にならない辺り、流石は騎士道と貴族の国といつたところだろうか。……政治的な問題も大きいのだろうが。

「ガリア難民を全て渡航させる場合、作戦日程の延長を行わなければなりません。多目に見積もつて二週間、短くて五日といったところでしよう」

参謀長の言葉に、部屋に集まっていた人々は一瞬ざわついた。

二週間、短くて五日、より長く戦線を維持してこの地に留まれ——。現状を認識している人間にとつて、その言葉はとても受け入れられるものではない。

陸軍少将の制服を着た男などは、その言葉を聞いた直後、慌てたようには参謀長の方を向いて。右腕を肘を曲げて軽く前に出す、「待て」のようなポーズを取りながら、彼に食つて掛かつた。

「お待ちを、参謀長！ ピカルディー方面のネウロイがこの地に迫つてゐる話、まさかお忘れでは……！」

「私は事實を申し上げたままでです、少将殿。我々の撤退は遅らせねばなりません」

「しかしつ」

「——止めよ。言い争いに使う時間などなかろう」

ズン、と。意図的に重みを増したルントシュテットの声が、二人の間に割つて入る。

上級大将まで上り詰めた男は、熱くなりかけた雰囲気を冷やすのに十分な威厳を持っていた。参謀長等の数人を除いた、部屋に集まつていた人々も、ルントシュテットの迫力に押されて、開きかけていたその口を閉じる。

彼らが沈黙したことを見認めたルントシュテットは、傍らで冷静な表情を浮かべたままの参謀長にチラリと視線を向けて。「話を続けよ」、と一言だけ口にした。

「はつ。では、今話した日数ですが、これは事実です。船の本数や護衛に割く海上戦力を考慮すると、どうしても期間の方を伸ばさざるを得ません。

……当初の予定通り、カールスラントの民だけを脱出させるなら話は別ですが……」

「……不可能だ。政治的に問題が大きいし、何より皇帝陛下は人情家の氣がある。溺れる者の手を払うことを良しとはするまい」

ルントシュテットの返答に、参謀長は無言で頷いた。

そもそもが意味のない仮定であり、彼が口にしたのも、一応という部分が大きい。いくら関係は良くないとはいえ、現状は人類対ネウロイという構図が出来上がっている。助けられる人間を見捨ててしまえば、カールスラントの国際的地位は確実に悪化してしまってだろう。つまり、彼らを見捨てる、という選択肢は元より存在しないのだ。だからこそカールスラントが貧乏くじを引かされた形になり、ガリアに対するヘイトが溜まつていくわけではあるが。

「故に、我々が取るべき手段は一つしかありません。撤退が完了するまでの戦線の維持であり、この地における徹底抗戦です。——何としてもネウロイの侵攻を阻む必要があります」

地図に視線を下ろしながら、彼は言葉を続ける。

指し棒でピカルディー地方の黒石を指し、続いてピカルディー地方とパ・ド・カレーに挟まれる、一本の川を指した。

「ネウロイの侵攻を遅らせるため、一度大打撃を与える必要がある、と参謀の間で結論が出ました。この地にネウロイを誘導し、川を挟んでの半包囲戦を仕掛けることを具申致します」

ネウロイは、何故か水に触れることを嫌がる。そのため海や川など、自然が古代と同じように防波堤となり——航空型ネウロイは、水の上でも気にせず飛んでくるが——ネウロイの侵攻を戦略的に妨げる、そして戦術的に利用出来る壁として機能していた。

今回参謀長が出した作戦案は、その川を利用してネウロイを包囲する、言わば包囲戦を提案するものである。

羊の群れを追う犬のように各地に分散するネウロイを追い立て、作戦地点へと誘導する。作戦地点には予め川の向こうに大規模な戦力を用意しておき、地雷原等のトラップ、そして戦車やアハトアハトの砲撃を中心とした遠距離戦を主に挑ませ、可能な限りの損害を与える。追い立て役の部隊も結集させてネウロイの背後に回らせ、その場で同時に攻撃を加えて挟み撃ちする。

被害を可能な限り避けるために無理な殲滅は狙わず、包囲にわざと穴を開けておくことでネウロイの逆撃を防ぐ。ネウロイの全滅は難しいにしても、三割、上手く行つて五割の敵戦力を削ることが出来るだろう——。簡単に纏めると、作戦案はおおよそこのような感じだった。

ルントシュテットが考える限り、然程無理はないようと思えた。奇策というわけではない、むしろオーソドックスな戦術であり、通常戦力を効率的に用いるこの作戦は、ウイッチの損耗を抑えたい彼の望みにも叶つたものである。

部屋に集まつた他の人間達も、殆どはこの作戦案に対して好意的な雰囲気を見せており。ならば、とこの作戦案を用いることを決めたルントシュテットは、案を煮詰めていこうと口を開きかけて――「――お言葉ですが。我々としましては、その作戦案に反対致しますわ」

その場に似つかわしくない、鈴を転がしたような女性の声によつて、それは遮られた。

部屋中の視線が、その言葉を発した女性——少将の階級章を着けた女性と、その脇に立つ数人の女性達に向けられる。

作戦会議が始まつてから今まで、何も喋らうとしなかつた彼女達は、正直に行つてあまりルントシュテット達上層部に好まれている存在ではない。第一次ネウロイ大戦で活躍したエースの一人であり、空軍元帥を父を持つ彼女は少将の地位まで出世しているものの、決して将校としての器量があるとは言えなかつた。

ヘンリエッタ・ゲーリング。ウイツチとして活躍していた頃のコネクションや父の権力を使い、空軍の上層部に潜り込んだ女性である。

ウイツチ至上主義を掲げている彼女は、常日頃からウイツチの立場向上と重用、軍内部における発言力の増加を求め、上層部の一部と対立を繰り返していた。特に地上攻撃ウイツチ——戦闘機で言えば爆撃機のような兵科を彼女は好み、偏愛とも呼べるほどの重用を見せている。

彼女が地上攻撃ウイツチであつたがためか、それともまた別の理由があるのかは他人には分からないが、彼女は地上攻撃ウイツチによる急降下攻撃戦術に妄信的な信頼を寄せている氣があつた。通常戦力を軽視する傾向も強く、この点において彼女は多くの軍人と、軍の上層に登りかけている元ウイツチの将校達とさえも対立していた。

彼女が空軍の上層部としてA軍集団に加えられ、この作戦会議に一応とはいえ招かれていたのは、正直に言って彼女の父親の後押しの結果という側面が大きい。軍全体で見れば彼女に賛同する人間は決して少なくないが、マトモな将校が多く集まるこの場は、彼女にとつてのアウエーである。

ルントシュテットは彼女とその取り巻きに、半ば睨むような鋭い目を向けて。どういうことだ、と言外に発言を命じた。

「ネウロイに打撃を与え、侵攻に歯止めをかける、その点に異論はありません。しかし我々と致しましては、その重大な一戦に通常戦力を主軸として置くのは、些か……」

「御託はいい。何が言いたいのかね、少将」

ふん、と苛立たしげに鼻を鳴らしながら、同席している一人の陸軍

中将が彼女に話を急かす。

それに彼女は気を悪くした様子も見せず、女性的な魅力を漂わせた薄い笑みを浮かべながら、その話を続けて。自身に否定的な視線が集まる中、彼女は作戦案に対する代案を口にした。

「まず敵航空戦力を航空ウイツチによつて殲滅し、露になつた敵の頭上から地上攻撃ウイツチによる攻撃を加えて殲滅。通常戦力は全てウイツチの支援に回し、ウイツチを主軸とした作戦を行うことを意見致しますわ」

……はあ、と。その代案を聞いて、大半の人間は呆れた表情を隠さなかつた。

内容が予想の範囲内だつたということもあるし、何より、彼女のウイツチ優位論が色濃く現れた作戦案である。怒りを覚える以前に、このような状況下でもその持論に拘るのかと、大半の将官は彼女の指揮官としての見識の欠如に蔑みに近い感情を抱いた。

ルントシュテットもその一人であり、教師が出来の悪い生徒を見るような視線を彼女に向けると、諭すような口調で語りかける。

「……いいかね、少将。ウイツチは重要な戦力であり、その損失は人類にとつての損失もある。そのようなウイツチに多大な負担と危険を負わせる作戦は、決して認められるものではないのだ」

「お言葉ですが閣下、剣とは振るわれてこそ意味があるものです！我々カールスラントのウイツチはかのドイツ騎士団の流れを汲む精銳であり、ネウロイが相手であろうと鎧袖一触、一騎当千の活躍を見せ致しましよう！」

ルントシュテットの言葉に、彼女を取り巻く一人の大佐の階級章を着けた女性が、きびきびとした敬礼を行いながら反論をした。

彼女の顔を、ルントシュテットは見たことがある。かつてゲーリングの部下として第一次ネウロイ大戦に従軍し、今では彼女直属のウイツチ部隊の司令を務めている女性だ。

本人は実直なカールスラント軍人であり、個人的な人格はマトモと言つていいものの、ゲーリングに心酔しウイツチ至上主義に染まつてしまつてゐる。良く言つて威勢のいい、悪く言つて大言壯語が目立つ

ようになつてきた彼女もまた、上層部に目を付けられ始めていた。「ボーデンシャツ大佐、最早精神論が入り込める状況ではない。何より我々は皇帝陛下より兵をお預かりした立場であり、陛下が『一兵も見捨ててはならぬ』と仰せられた以上、損害を抑えることを第一とせねばならぬ。

貴官らの腕を疑つておるわけではないが、もしウイツチに多大な損害が出たら如何する。戦いの後はどうのように守るというのだね」「これはこれは、ルントシユテット上級大将閣下ともあろうお方が、まさか悲観論に囚われるとは……！」ご心配なさうとも結構、我らが精銳は必ずやネウロイ共を駆逐致しましようや。敵を葬り去つた後に、悠々とこの地を去ればよろしいでしょう

「——口を慎め大佐！ 貵様の妄想にどれだけの兵を道連れにする気だ、ドン・キホーテが！」

ドン、と。出席者の一人である空軍少将が、拳をテーブルに叩きつけながら怒りを露にした。

彼はゲーリング達一派とは異なる派閥であり、彼女の父親たるヘルマン・ゲーリング空軍元帥に然程影響を受けていない人間である。故にゲーリングに遠慮することもなく、良識派の一人として、彼女達とは敵対関係すら築いていた。

彼はブリタニアのマロニー将軍のような、所謂ウイツチ不要論者ではない。ウイツチの有用性と個人としての人権をある程度認めた上で、ウイツチにばかり依存することに反対しているのである。

ゲーリング達の主張など、彼にとつては愚劣もいいところだつた。美味しいからといって特定の動物ばかり乱獲していくは、すぐにその動物は絶滅してしまうのは自明の理と言つていい。彼はその事を良く理解していた。

「そう声を荒げるものではありませんわ、少将。女相手に熱くなるなど、騎士道にもどる行為ですわよ」

「貴様らは軍人だろう、将官だろうが……ッ！ 女であることが免罪符になるものか、将官ならばそれ相応の振る舞いを心がけろゲーリング少将！」

「……私の父はゲーリング元帥ですわ、少将」

「それがどうした小娘。私はカールスラント空軍少将ハインリヒ・フォン・フェルナーだ、何か言いたいことでもあるのかね」

ギリ、と。ゲーリングは浮かべていた笑顔を崩して、歯軋りの音を部屋に響かせた。

明らかに不機嫌な様子に変わった彼女は、しかし何かを思い出したように、一瞬でその感情を引っ込める。再び笑顔を浮かべ出した彼女は、少将を見下すような目で見つめていた。

何を、と少将が問い合わせようとした瞬間、ノックの音が聞こえて。作戦会議中だ、との参謀長の声に、青年の声がその用件を伝える。「緊急で届いた、参謀本部からの通達です。ルントシュテット閣下にお渡しするよう命ぜられました」

入れ、とルントシュテットが入室を許可した直後、一通の電報を携えた青年が部屋に姿を表す。電報をルントシュテットに渡した青年は、恭しく札をとるとすぐに部屋を後にした。

部屋中の視線が、その電報と受け取ったルントシュテットに集まる。

ふむ、と一言呟いた彼は、電報が書かれた紙を開け、その内容に視線を走らせる。……読み終えた彼は、一瞬驚愕したように目を見開くと、ゲーリングに『やつてくれたな』と言わんばかりの視線を向けた。「……参謀本部からの伝達だ。ゲーリング少将の案を元に防衛を行うよう、とのことである」

ルントシュテットがそう言つた瞬間、部屋中に一際大きなざわめきが生まれた。

まさか、どういうことだ、あり得ない——。一通りの言葉が溢されると、自然と皆の視線がゲーリングへと向かう。

誰の目にも、犯人は明らかだった。

先程よりも格段に敵意が増した視線を受けながら、彼女はニコニコと——我儘が叶つた子供のように、笑つていた。

イントロダクション2

『——当基地の全てのウイツチに告ぐ。本日より三日後までの全ての出撃を中止とし、各員は心身の休養に努め、銳気を養うことを中心とせよ。繰り返す、本日より——』

朝食が終わり、少し経つた後に始まつた身体を怠けさせないための訓練が終わつた頃。

飛行場での走り込みを終え、タオルで汗を拭きながら乱れた息を整えていた俺達の耳に、そんな放送が聞こえてきた。

訓練を共にしていたJG3のメンバー達は、皆その内容に戸惑いを隠せないようだつた。

細かい状況までは下には知らされていないものの、現状があまり好ましくないことはこの基地の誰もが理解している。ネウロイに追い詰められつつあるこの状況で、数日とはいえ重要な戦力であるウイツチを出さないというのはどうということかと、皆で顔を見合わせた。

「……何かある、と言わんばかりだな。ウイツチを全員温存するとは、どうにもマトモじやない」

タオルを首に掛けた隊長が、独り言のようにそう呟いた。

上層部も馬鹿ではない。この命令も何か理由があつてのものだろう、というのはすぐに推測出来ることだが、それが何なのかはどうにも予想出来る気がしなかつた。

隊長も、俺も、他の面々も、訓練を行つていた面子は皆訝しげな表情を浮かべている。この命令の裏にある真意を、皆が計りかねているのだ。

チラリ、と隊長がミーナに視線を向けると、ミーナは黙つて首を横に振つた。話を聞かされていなかつたということだろう、彼女も同じように怪訝な表情をしている。

部隊の司令官クラスには知らされていない、つまり、上層部のみで何かが進められている——そういうことだろうか。アニメやゲームのお約束なら無茶ぶりに等しい任務を与えられたりするんだろうが、さて。……どうも嫌な予感はするものの、その予感が外れてくれるこ

とを祈るしかなかった。

「……皆、聞いたわね。本日予定していた出撃任務は中止、各自別命あるまで待機すること。復唱！」

パンパン、と。素早く気を取り直したミーナが手を叩いて、訝しんでいるままの皆の気を引く。

視線が集まつたのを確認すると、彼女は背筋を伸ばしながら口を開いて。司令官としての役目を務めるべく、訓練終了の号令を掛ける。皆の J a w h o l、という返事の後に続いた命令復唱の合唱を聞いて、ミーナは「よろしい」と満足気に一つ頷いた。

「では、これにて訓練を終了とします！」

一際声を張り上げたミーナの声に、負けじと大きな声で皆が終了の挨拶を返して。お疲れさまでした、と皆と同じ言葉をどうにか口にしながら、俺は――

「……えっと。ヴエラさん、大丈夫？」

「……」

——走り込みで息も絶え絶えになり、呼吸が整うどころか未だにぜえぜえと肩で息をしていた俺は、心配して声をかけてきたミーナにサムズアップを返した。

はあ、と。一つ溜め息を吐きながら、俺はぶらぶらと基地の中を歩いていた。

特に目的地はない、暇潰しのための散歩である。任務が中止になつたはいいものの、その空いた時間に何か予定が入ることもなかつた俺は、その暇を少々持て余していた。

部屋でのんびりしていようか、と最初は思つたものの、部屋の扉の隙間から甘つたるい声が聞こえた時点で回れ右をした。ルームメイト達は無理矢理襲つてくるようなことはしない、と一週間ほどの付き合いで分かつたものの、流石に百合百合な光景を見ながら休めるほど俺も剛の者ではない。

いつそエーリカ達に会いに行こうかとも思ったが、偶々食事の席が

同じになつただけの関係で押し掛けるのも図々しい気がして、それも結局止めにして。結果として当てもない散歩に出てみた、というわけである。

飛行場だの、格納庫だの、普段あまり細かく見る余裕もなかつた場所を見ていくのは、まるでゲームのマップを埋めていくようで少し楽しかつた。乐しかつたのだが、一時間もすればどこも見終わつてしまつて、やはり飽きてきてしまう。

途中で拾つた空きクリップ——銃弾を縦に並べたものの抜け殻を五つほどジャグリングしながら歩く、という凄いのだから間抜けなんか分からぬような行為に挑戦してしまふくらいには、暇を感じてしまつていた。

ひよい、ひよい。そんな擬音が付くに相応しい流れるような動きで、五つのクリップを宙に舞わせていた。

器用さのステータスは、こんなことにも使えるらしい。無駄のない無駄に洗練された無駄な動きによつて、クリップ達は綺麗な軌跡を描きながら舞つている。

退屈によつて始めてしまつたこの曲芸も、最初の方は中々に難しく感じたものの、コツを一度掴んでからは容易く出来るようになつてしまつた。これも飽きたら、次は何をすればいいだろう——。まさかゲームの中でもこうも暇になるとは思わなかつたと、俺は再び溜め息を吐いた。

「……あ」

ふと。新しく暇を潰せそうな、今まで記憶の隅に追いやつっていたものと思い出して、つい声が出た。

このゲームの仕様というか、おそらく出来るであろう機能について、何だかんだと後回しにしていたものがあつたのだ。その存在を今しがた思い出して、早速それを使つてみることにする。

まずは、じい、と。ジャグリング中のクリップの一つに視線を集中して、しつかりと意識を向ける。すると視界にウインドウがポップして、これがゲームだということを感じさせてくれる画面が浮かび上がってきた。

『K a r 9 8 k用クリップ』

カテゴリ：アイテム／補助・投擲

残弾数：0／5

説明：装填時に用いることで、より素早い給弾が可能となる。K a r 9 8 kのみに仕様可能。

半透明なウインドウに、そんな感じの簡潔な情報が記されている。とりあえずその情報はここでは無視して、そのウインドウを下にスクロールしてゆくと、『ボックスに入れる』という選択肢があつた。それを選んでみると、あら不思議。宙を舞っていたクリップのうちの一つが、急に姿を消してしまつたのだ。

続いてメニュー画面を出してみて、項目の中から『アイテム』と書かれたものを選ぶと、画面がゲームではお馴染みの、幾つもの升目に分かれた空白が並ぶ——多くのゲームでは『アイテムボックス』と呼ばれるものが視界の一部に広がつた。

使つていなかつたのだから当然ではあるが、開いたそのボックスの中には何もない。——ボックスの一番左上の片隅にこつそりと入れられている、先程消え去つてしまつたあのクリップを除いては。

「わあっ」

VRゲームではお馴染みの仕様はこのゲームにも搭載されているようだ、と。実際にアイテムボックスという謎空間に収納されているクリップを見て、つい声を漏らした。

このようなアイテムとアイテムボックスの関係は、二十世紀の頃から基本的なものは変わつていいない。アイテムを選択して収納する、それが今のゲームでも大抵の場合に採用される、伝統的な仕様である。故に、このゲームでそれが出来たこと自体に対しては、そこまで驚いてはいなかつた。むしろ重要なのはこの仕様を何か別のことにして利⽤出来ないかどうか、その一点に尽きた。

ジャグリングを続けていたクリップを次々にアイテムボックスへと入れながら、この仕様を有効に使う方法について考える。

アイテムを持ち運べる、というだけでも便利ではあるものの、それだけに終始していては話がそこで終わつてしまふ。別にそれで害が

あるわけでもないのだが、暇潰しということを考えると何か思い付きたるものだった。

例えば——銃を入れ替えながら戦う、というのはどうだろう。装備の持ち替えは昔からある、オンラインゲームでは当たり前な技術の一つだ。

属性だの相性だの、そういうつたものがあるゲームなら敵毎に装備を換えて戦うことも多い。だがこのゲームでは……どうだろう。ライフルを持つて、サイドアームを持つて、正直それで事足りるような気もする。

精々、重装甲の敵用に破壊力のある武器を用意しておくぐらいだろうか。パンツアーファウストでも持つておけば、確かにいざという時には役立つかもしれない。……軍曹にそこまで良い武器が支給されるか、という問題はあるけれど。

そんな風に色々と考えを巡らせながら、暫しの間むむむ、と頭を悩ませて。

「——君。少しいいかね」

突然背中に掛けられた声によつて、強制的に中断させられた。

振り返ると、いつの間にやつて来ていたのか、中将の制服を着た男が俺の背後に佇んでいた。彼の顔は何処かで見たような気もするが、すぐには思い出せそうもない。ただ少なくとも原作に出てくるマロニーのような無能軍人ではないらしい、彼からは非常に落ち着いた印象を受ける。

慌てて向き直ると同時に敬礼をし、何の用かと丁寧な言葉で尋ねてみる。彼は返礼を行いながら、じい、と俺の顔を一瞬見詰めて。やがて口を開いた彼は、その印象に合つた理知的な声で俺への用件を口にした。

「少し尋ねたいんだが……。どうも君が先程、物を忽然と消失させたようと思えてな。あれはいつたいどうやつたんだね」

「……えつ？」

「ほら、君が曲芸をしていた何かを、空中でいきなり消しただろう。少し遠くからだつたが、何かが消えた瞬間ははつきりと見えたよ。少

君は、見たところウイツチのようだが……。ふむ、君の固有魔法かね？ 物を消失させる魔法なぞ聞いたことがないが

「え、いや、あの。ただのアイテムボックス——」

「……？」

「——固有魔法です。私の魔法は、異空間に物を出し入れ出来るんですよ」

アイテムボックス、という単語に彼が首を傾げたのを見て。これは説明するのは面倒だと、とりあえず誤魔化すことにした。

ゲームの仕様はゲームの中では当たり前のこと、というのはゲームにとつての暗黙の了解のようなものだ。モンスターを倒したらお金落とすのも、倒した敵の死体が残らずに消えてゆくのも、大抵のゲームでは——どんなに現実的じやないとしても——突っ込まれることはない。

だが、いつの時代もひねくれ者というのはいるもので。一部のゲーム、特にリアルな体験でプレイ出来るVRゲームの一部のゲームでは、そういった『都合主義』に対して、ゲームの中のキャラが反応する、というものもあつた。

例えば、勇者が他人の家に入つて筆筒を漁るとする。普通のゲームなら咎められることはないが、それらのゲームなら勇者には不法侵入と窃盗の罪状が付く。そういうたらしくリアルな、悪く言つて面倒臭い仕様を好む人間は、ユーザーも制作者も、決して少なくない。

このゲームも、どうやらそれらのお仲間らしい。アイテムを収容する行為を見咎められたということは、この世界のキャラクター達は現実のような価値観で動いているということだ。

ゲーム的な仕様は存在していても、それが常識ではない。きっと彼らはステータスやレベルなんて分からぬだろうし、この世界がゲームだなんて露ほども思つていなかろう。

故に、先程のようにゲーム的なシステムを使つた行為は、キャラクターにとつてはおかしなことでしかない。もしどこぞのTASさんよろしく乱数調整を狙つて奇行を繰り返すような真似をすれば、ゲームの中といえども窓に格子の付いた病院に連れていかれるはずだ。

面倒臭い、と思うと同時に、早めに知つておけて助かつたとも思う。もし気づくのが遅れて、システムを利用したバグ技等を試しでもしていたらどうなつたことやら。……とりあえず、基地内での交遊関係が悲惨なことになるのを回避出来ただけでも、良しとするべきか。

「ふむ……少し試したいことがあるんだが、いいかね？」

俺が内心そんなことを考えていた頃、何やら顎に手を当てて思考を巡らせていた彼は、そうこちらに問いかけてきた。

中将閣下の言葉なぞ軍曹にとつては命令も同然であるし、俺は表情を笑顔にしながら快く了承して。その返事を聞いた彼は、ついてきなさいと、俺を伴い何処かへと歩き出す。

会話もないまま数分間、彼の背中を追つて進んでゆくと、到着したのは司令部が入つてゐる建物の中の一室。

ノックもなしに入室した彼は、入りなさいと俺を手招いて。おずおずと足を踏み入れる俺を横目に、彼は部屋の奥の執務机の椅子に腰掛けた。

「……ああ、心配しなくともいい、ここは私の部屋だ。楽にしたまえ」キヨロキヨロと、忙しなく周囲を見渡す俺の様子を見かねたのか、椅子に座つて一息吐いた彼はそんな言葉を掛けてくる。

あはは、とそれに愛想笑いを返しながらも、内心は無理に決まつているだろうと必死に首を振つて。下士官が将校の執務室に入るというのはこんなにも緊張するのかと、現実にこんな思いをしている軍人への尊敬の念を芽生えさせていたりした。

幸いにも彼は特に話を引つ張ることもなく、さつさと流して話を進めて行く。机の引き出しを開けた彼は、そこから一丁の拳銃を取り出したかと思うと、中の弾を抜き——なんと、こちらに差し出してきたのだ。

思わず呆気に取られた俺に、彼は落ち着いた口調のまま、これを異空間とやらに入れてみろ、と言つた。

最初は少し躊躇つてしまつたものの、やがて彼の視線の圧力に負けて、俺はその銃を受け取つて。先程と同じようにアイテムに意識を傾けて、ウインドウを表示させて——

『ワルサーP38（マンシュタイン）』

カテゴリ：装備／銃器

装弾数：0／8

残弾数：0

整備状態：良好

説明：カールスラント軍が制式採用した軍用自動拳銃。マンシュタインが個人的に所有している独自モデル。

思わず目を見開いた。

「……？ どうかしたかね」

驚いた表情で視線を銃から彼の顔に向けた俺に、彼は訝しげな表情をする。

何でもないです、とその場を誤魔化しながら、俺は彼の顔をじっと見詰めて。彼の顔が、以前見た写真——WW2当時における最も優れた指揮官の一人、ドイツ陸軍元帥エーリッヒ・フォン・マンシュタインの写真のものと非常に似かよっていることに、ようやく気がついた。

——マンシュタイン！ 今俺の目の前にいるのは、あのマンシュタインか！

これがゲームの中だと知っていても、俺の知っている歴史とは違う世界だとしても、こうして未来にも名が残る有名人を目にして見ると、なんとも不思議な感慨深さがある。

恋愛とか、そういういた感情とはまた別の興奮と感情が、波のように俺の心に押し寄せてくる。頬が熱を持ち、胸の奥底から湧き出てくる喜びの感情で、口が弛みそうになるのをなんとか抑えた。

握手を申し出よう、という逆らいがたい誘惑を振り切って、まずは彼の命令に従うことにする。もう一度視線を彼の銃へと戻し、ポップしたウインドウの選択肢を選んでアイテムボックスへと収納した。

すると銃の姿が一瞬で消え、俺の手にかかるていた重みと同時にその存在が消え去る。その瞬間を見たマンシュタインは感心したように少し口端を上げて、しかし冷静な表情のまま、今度は取り出してみろと命令した。

出しつぱなしにしていたメニュー画面のアイテムを選び、先程と同じアイテムボックス画面を表示させる。五つのクリップの横に新しい出現したアイテム、ワルサーP38を選択して取り出すと、これまた一瞬で拳銃が姿を現した。

俺の手の上に現れたそれを握りながら、チラリ、とマンシュタインに視線を向けてみる。彼は顎を手で擦り、暫しの間何やらを考える仕草を見せていた。俺の手、正確には手に握られた拳銃を見つめながら、彼は何かを考えている。

「……軍曹。君の姓名と、所属を教えてくれ」

数分後。思考が纏まつたのか、冷静な表情は崩さぬまま、彼はそう口にした。

その質問に俺が答えると、彼は次に「ゲーリング少将を知っているか」と問い合わせた。……ゲーリング？　はて、あの太っちょ元帥と何か関係があるのだろうか。

「ゲーリング、少将ですか？　元帥ではなく？」

「ヘンリエッタ・ゲーリング少将、ゲーリング空軍元帥の娘だ。……その様子は、本当に知らないようだな」

はてなマークを浮かべる俺を見て、マンシュタインは呆れ半分、そして何故か安堵半分の溜め息を吐いた。

どういう人間なのかと尋ねると、彼は少し悩んだ後、知らない方がいいと首を横に振る。そして逆に出来る限り関わり合わないよう注意され、俺のこの魔法に関しても、決して彼女に口外しないようにと念を押された。

「……君のこの魔法は、おそらく君が考えている以上に有用性が高い。この魔法の詳細を、誰かに伝えたことはあるかね？」

「いえ、ありませんが……」

「それは良い。では私が許可するまで、君のこの魔法についての他者への情報開示を禁ずる。使用も可能な限り、命に関わる場合を除いて控えてくれ」

え、と。あんまりと言えばあんまりなその命令に、俺は反論しようと口を開きかけて。

「——君はカールスラントを救うかも知れない」

遮るようにして放たれた彼の言葉に、出しかけた声を飲み込んだ。

「……どうのことですか？」

「……何。君が英雄になるかもしれない、ということだ。期待しているよ、ヴエラ軍曹」

そう言つて、彼は意味有り気な笑みを浮かべた。

ずっと変わらぬ表情をしていた彼が初めて見せた笑みは、どこか暗い雰囲気を感じさせるものだった。それに何が隠されているのかは分からぬが、少なくとも先程の言葉は何か含みがあることは間違いない。

いつたいどういうつもりなのか。それをこの場で聞いても、おそらく彼が答えることはないだろう。

聞きたいことは山ほどあるし、言いたいこともたくさんある、が。「ありがとうございます、中将。……粉骨碎身の思いで頑張らせていただきます」

今俺が出来るのは、こうして表面的な受け答えを続けることだけだつた。

敬礼しながらのその俺の言葉に、彼は二言三言の短い言葉で返答をした。そしてそれから何度か言葉を交わして、退出の挨拶をした後に、俺は彼の部屋を後にする。

扉を閉め、司令部の外へと出てからふと、空を見上げた。先程まで晴れていたはずなのに、上空の風の流れが速いのか、遠くの雲が流されてきていて。

「……」

つい、思わず。晴天が雲に覆い隠されつつあつた空模様を、縁起が悪いと睨み付けてしまった。

イントロダクション3

第二次世界大戦当時、馬は軍でも普通に使われていた。

さすがに騎兵という兵種はポーランド等の一部の国を除いて絶滅していたものの、輸送手段としては馬はどこの国でも、それこそドイツやフランスといった列強国でさえも未だに用いられていたのだ。

当時、完全に軍の自動車化を出来ていたのは、国力があり余つていたアメリカ合衆国だけだった。自動車を揃える費用、燃料代や整備費用といつたランニングコスト諸々の問題で、各国は自動車の有用性に気がつきつつも——フランスの某将軍なぞは、『これからは軍馬の有用性を見直さなければならない』と完全に時代錯誤なことを言つていたが——完全な自動車化を見送らざるを得なかつたのである。

そして、ストライクウイツチーズは第二次世界大戦頃をモデルとした世界だ。史実との違いは様々な部分であるももの、大まかな部分では非常に似通つてゐると言つていい。

俺が所属するカールスラントは、現実におけるドイツを元ネタとした国家である。神聖ローマ帝国の色が強いドイツ帝国、と言い表せば良いだろうか。共和制ではない、つまりナチスが政権をとるようなこともなかつたこの国では、それでも史実と同じように軍備の増強が行われていた。

史実のヴエルサイユ条約も口カルノ条約もない、ネウロイという敵に対しても人類が一応団結している状況下であるがゆえに、史実よりはよほど簡単に軍拡を行えた。にも関わらず、装備の更新や自動車化等を、カールスラント軍は完全には行えていない。この世界であつても、馬車は現役の輸送手段としてその命脈を保つてゐるのだ。

「おら、さつさと乗せてやれ！ ネウロイは待つちやくれんぞ——！」

あれから三日後、突然与えられた休みを終えた後。ざわざわと騒がしい格納庫内に、整備班長の大聲が響き渡る。その言葉に返事をしながら、整備兵の男達はひいこらと、ストライカーユニットを装着したウイツチ達が馬車に乗る作業を手伝つていた。

今回の作戦予定地は、少し遠い。基地からでも飛んでいけないことはないものの、そこで行われる戦闘がこれまで一番の大規模戦闘であることを考えると、出来る限り継戦能力を高めるために、ウイット達はある程度の距離までを馬車で進むことになっていた。

当然ではあるが、馬車を降りたらすぐに空に上がる以上、ユニットを穿いた状態で馬車に乗らなければならない。脚の関節が使えない状態で一人で乗車する、というのはほぼ不可能なため、ユニットの装着を手伝つた整備員達がそのまま乗車も手伝つてくれる。

元がアニメ作品であるためか、美少女ばかりのウイットに合法的に触れるということが嬉しいのか、整備員達の表情に多少の喜色が浮かんでいる。が、馬車に乗せるためにウイットの体を持ち上げる段階までもすると、皆ユニットの重さに歯を食い縛つっていて。言わば重量挙げを何度も繰り返している彼らはさぞかし疲れているだろうに、多少の下心はあるにせよ、文句の一つも言わず仕事を行つてるのは立派に思えた。

「次の方、お願ひしまーす！」

そんな彼らの姿を観察しているうちに、俺の番がやつってきた。ストライカーユニットを装着するための列の先頭にいた俺は、整備員の言葉に従いユニットの装着場所へと歩いて行く。

ユニットの装着作業は、本来なら少し大がかりな機械が自動的にやつてくれるものらしい。しかし急いで設営されたこの基地にその機械を用意出来る余裕など、今のカールスラント軍にはない。故に現状でのユニットの装着は、整備員による人力と小型の機械を使つた手作業により行われている。

こういう時にはいつも、そういうアニメは戦線が安定してからの話だった、と思い出す。501の基地は後背地のブリタニアで、最前线の、しかも急拵えのこの基地に比べればかなり恵まれているのだ。別に男に触られるのが嫌というわけではないが、どうせなら楽な方がいい——。いつかはあの機械で装着するような身分になりたいものだと、装着するために整備員達が触れてくる手の感触を感じながら、内心で溜め息を吐いた。

「……あ、あの……」

ふと。ユニットに足を通した後の細かいチェックが行われていた時、若い男の声が耳に届いた。

その声の方に視線を向けてみると、何やら見覚えのある顔が一人、銃と弾薬を抱えてこちらを見つめている。はて、誰だったかと記憶を掘り起こせば、俺が初めて帰還した時に敬礼して出迎えてくれたあの少年だと思い出した。

実際彼にそのことを尋ねてみると、「覚えてくれていたんですか」と感激した様子で彼は話して。アイドルに会ったファンのように舞い上がった様子を見せたかと思えば、ごほん、という整備班長の咳払いによつて慌てて我に帰つていた。

「え、ええと……。申し遅れました、メックリンガー整備兵であります。軍曹殿の装備をお持ちいたしました」

名乗ると同時に、彼は抱えていた銃——俺が使っているKar98kとサイドアーム、そしてその弾薬をこちらに差し出してきた。

ありがとう、と笑顔を浮かべて礼を言いながら、俺はそれを受け取ろうとして。運悪くその瞬間に、装着作業を終えた証の小さい振動が俺の体を襲う。

あ、と呟く間もなく、受け取りかけていた弾薬の幾つかが俺の手から溢れてしまつた。それで壊れてしまうわけではないし、別に落下させても問題ないと言えば問題ないのだが、不味いと思つたのだろう、彼はそれを受け止めようと手を伸ばしてきた。

ここで問題になるのは、彼と俺との距離である。銃の受け渡しを手で行おうとした距離にいた俺達は、非常に近い位置にいた。間隔はおそらく1メートルもない、手を伸ばせば触れられる距離だつた。

そんな距離にいた彼が、慌てた様子で、こちらに倒れ込むようにして手を伸ばしてきたら、どうなるか。……その想像は、難くない。

「——へつ？」

ふによん、と。唐突に感じたその感触を、最初は何がなんだか理解出来なかつた。

視線を下に向け、その感触の原因を確かめてみる。胸元に感じる何

か生暖かい違和感の正体は、パツと見た限りでは、金色のわさわさした何かだと思つた。

まずはそれが彼の頭だと気づくのに、数秒。彼が俺の胸元に顔を埋めているというこの状況に気がつくまでに、更に一呼吸。ふがふが、と胸に埋まつたまま呼吸する彼の息の熱を感じて、ようやく俺の脳は思考を再開した。

「は、あ、え——うわっ!? ゾ、ゾめんなさい軍曹、申し訳ありま——」俺と同じように思考停止していたのか、彼は数秒経つてから慌てて体を離した。

彼は少ししどろもどろになりながら、必死に謝ろうとして——一部始終を見ていた整備班長に、勢いよく肩を掴まれていた。

「——え?」

「おう。……ちょっと面貸せや」

彼が弁明しようと口を開きかけたものの、整備班長は知つたことではないとばかりに体を強引に引きずつて行く。

BGMにドナドナがかかつていそうなその光景を見ながら、俺はそつと、自分の頬に手を当てた。熱を感じたその肌は、頬が赤くなっているであろうことを雄弁に語つていた。

……しまつた。女の体を誰かに触られることなどなかつたから、つい慌てすぎてしまつた。

ドキドキした、ということはない。体は女でも心は男なのだ、男に恋愛的な感情を抱くことなど考えられなかつた。

ただ、何て言おうか。他人に胸に顔を埋められて平常心でいられるほど、俺はピュアすぎも汚れすぎもしていない。

恥ずかしさで赤くなつた顔をパタパタと手で扇ぎながら、俺は気を取り直して結局床に転がつた弾薬を拾い直す。銃を肩に掛け、サイドアームを腰に差し、弾薬を腰の鞄に詰め込んでいった。

用意を終えた俺は、何か言いたげな視線を送る他の整備員達を睨み付けて黙らせながら、何事もなかつたかのように馬車に乗り込んだ。

「……」

「……何ですか」

「いやいや、何と言うか、まあ……。本当に面白い奴だよな、お前」
乗り込むと同時に、先に乗つて他の隊員を待っていた隊長が、ニヤニヤとした笑みを向けてくる。

確かに他人から見ればあれはコメディかもしけないが、当事者の身としては堪つたものじやない。ラブコメディは端から見るから面白いのであつて、当事者に——しかもの方になりたいとは決して思わなかつた。

そんな感情を込めて睨んでみても、彼女はそれを涼しい顔で受け流して。俺をからかうような雰囲気を収めるどころか、腰を動かして俺の隣に座つてきた彼女は、肩を組んで顔を近づけてきた。

ニヤリ、と頬を上げる彼女に何か嫌な予感がして、反射的に顔を明後日の方向に背ける。

だが、それが不味かつたのか。——ガシリ、と勢いよく胸を掴んできた隊長の手に、俺は全く対応出来なかつた。

「え、ひやつ……。うにゃあああああーーーっ!?

「ははは、胸に顔を埋められたぐらいで恥ずかしがるとは、案外うぶな奴め。別に胸くらいなんだ、気にするな。こんなにでかいんだから気前よく揉ませてやれ」

もにゅもにゅと俺の右胸を勢いよく揉みしだきながら、隊長はそんな滅茶苦茶なことを言つていた。無論本気で言つてはいるわけではないだろうが、胸を揉む手の動きはからかいというには少し激しすぎる。

止めてください、と両手で彼女を引き剥がそうとすれば、今度は左胸の方も揉まれ始めてしまつて。体のバランスも崩れてしまい、すわ押し倒されるかというその瞬間。エスカレートし過ぎるその前に、彼女は俺へのおふざけを止めた。

はあ、はあと様々な意味で息を吐く俺を見て、彼女は愉快そうにクスクスと笑つていた。が、睨み付ける俺の目に気がつくと、彼女はすまんすまんと軽く謝罪をする。

その様子がとても悪いと思つているようには見えなくて、嫌みの一つでも言つてやろうかと俺が口を開きかけた、その瞬間。新たな人影

が馬車の中に入ってきたことにより、ついそのタイミングを逃してしまった。

「すまない、邪魔をする——と。どうした、ヴエラ軍曹、大丈夫か？」

馬車の中に入ってきた少女は、顔を真っ赤にして胸を腕で隠すようになっている俺の姿を見て、思わずといったようにそんな言葉を漏らしていた。

視線を向けてみると、何やら見覚えのある茶髪の少女がこちらに心配そうな目を向けている。中尉の階級にある彼女は、数日前に出会ったばかりの人物で。何でもない、と少し乱れた服装を直しながら答えた俺に、彼女——ゲルトルート・バルクホルンはチラリと視線を隊長に移して、理解したと言わんばかりに溜め息を吐いていた。

「……全く。任務の前に何をやっているんだ、お前は」

「ははは、いいじゃないか。部下の緊張を解してやるのも上司の務めだろう、そういうのにはこれが一番いいんだよ」

手をワキワキと、何かを掴むようなジエスチャーをしながらそう言つた隊長に、バルクホルンは引いたような視線を向ける。

頬をピクピクとひきつらせ、隊長から離れた場所に腰かけた彼女を見て、隊長は悪戯っぽい笑みを浮かべながら近づこうとした、が。それを察した彼女はさらに遠ざかって行き、しつしと手で追い払う仕草を隊長に見せたのだった。

「……やめろ。おい、それ以上近づくな。私にそっちの気はない」

「おいおい、なーに言つてるんだシスコン。第一、ちょっと出撃前の緊張を解してやろうかとマッサージするだけだ。別に変なことはしない」

「じゃあその手の動きは何だ……！　ええい、騙されん、騙されんぞ！」

士官学校で貴様に何度煮え湯を飲ませたと思ってる！」

胸を腕で隠すように守りながら、威嚇するように隊長を睨み付けるバルクホルン。ウイツチの証もある、使い魔の耳——彼女の場合はジャーマンポインターの耳が獸耳少女のごとく頭に現れていることも合わせて、その姿はまるで怯えた犬が必死に威嚇しているようにも思えた。

……と、いうか。隊長とバルクホルンが妙に親しげな様子だと思つたら、彼女の言葉から察するに、一人は士官学校の同期だつたらしい。確かに二人は階級も近いし、見た目の年齢も離れているようには見えないからおかしくはないが、原作キャラとの縁は身近なところにも転がっていたのかと、少し驚きを覚えた。

ゲーム的に考えるなら、あの朝食で偶然同席したのはラツキーベントで、発生確率はそう高くはない、というような感じか。本来は隊長に紹介されてバルクホルンやエーリカと会う、というのが正規のルート……ということかもしない。

ということは、他の原作キャラに会うためには、周りの人間と何かしらのイベントを起こしたりする必要があつたりするのだろうか。501ことストライクウイッチャーズ、あるいはアフリカのストームウイッチャーズ等に配属されれば原作キャラとは間違ひなく出会えるとはいえ、確実にそうなる確証などない。そもそも統合戦闘航空団はエース中のエースが集まる精銳であり、部隊も幾つも存在することを考えれば、例え大エース級の戦果を挙げたとしても、希望通りの所に配置される可能性はそう高くないのだ。

統合戦闘航空団。各国のエースを集めて結成された、人類が手を取り合つた——少なくとも表面的には——正にドリームチームと言える。

そもそもの発端は、1939年にスオムスで結成された『スオムス義勇独立飛行中隊』が多大な戦果を叩き出したことにある。通称『いらん子中隊』とも呼ばれる通り、実際は各国の問題児や扱いに困つていた人間を押し付けた部隊ではあつたものの、様々な国家や人種が集まつた混成部隊は各国上層部の予想を遥かに越える活躍を見せた。

各国のエースを集め、つまりエースの集中運用による戦局の打開はそれ以前にも声が上がつていて、エースの流出を嫌う各国によつて実現されることはなかつた。しかしいらん子中隊の活躍、ダインモ作戦によるブリタニアへの戦力集中、そしてブリタニア空軍大将ヒューゴ・ダウイングの働き掛けが一助となつて、とうとう最初のエース集団である第501戦闘航空団——通称『ストライクウイッ

チーズ』が発足したのだ。

作品のタイトルにもなっているその部隊は、主人公である宮藤芳佳が所属するということもあり、後に伝説の部隊として歴史に名を残すほどの戦果を挙げることになる。当初は様々な問題を抱え、隊員も十一名中二名が新兵という当初の目的すら掠れつた集団ではあつたが、最終的にはその新兵も押しも押されもせぬエースとなり、エース集団としての面目も十分に果たしていた。

そんな彼女達に自分も入れると考えるのは、現実的に考えれば楽観的に過ぎる。ゲーム的に考えても、501ルートに入るための条件なんて初見プレイでは正直分かりようがないのだから、現時点ではルート分岐も運に任せた他ないので。

もしかしたら501に行けるかも知れないし、アフリカに行つてマルセイユ達と仲良く地獄の砂漠戦と洒落込むかも知れないし、スマムスのいらん子達への増員として派遣されたりするかも知れない。可能性だけなら幾らでもあるが、それが叶うかどうかは別問題だし、希望と違うルートに入ったとしても軍人という身分ではそれに逆らうことも不可能だ。俺がエーリカやバルクホルン達とブリタニア撤退後も肩を並べて戦う可能性は、決して大きくはない。

「――うあああああ―――っ!?

と。そんなことを考えていたら、急に耳に届いた叫び声によつて、思考の海から引き戻されてしまつた。

見ると、俺が視線を外していた間に大分状況は動いていたらしい、バルクホルンの背後に回つた隊長が彼女の胸を鷲掴みにしている光景が視界に映つた。先程の叫び声はバルクホルンのものなのだろう、彼女の表情は驚きと羞恥で赤く染まつている。

もみ、もみもみ。もみもみむにゅむにゅ丸書いてチヨン。悪戯つ子のような表情で彼女の胸を弄ぶ隊長の姿は、端から見る限りでは最高に輝いているような気がした。どこぞの淫獣のように性欲にまみれてはいないから、隊長はおそらく女性同士のスキンシップの枠を出ない範囲の行為として行つてゐるのだろうが、その実に楽しげな表情を見るとその推測も少し自信がなくなつてくる。

ふと、バルクホルンと視線が合つた。恥ずかしいのだろう、少し涙目になりつつある彼女の目は、『助けてくれ』という彼女の言葉を口にせずとも雄弁に語つていて。……俺がそつと顔を背ければ、「裏切り者」という彼女の叫び声が馬車の中に響き渡った。

「トゥルーデ、お待た———うわ何この状況」

若干カオスな様相を呈してきた馬車に、今度はエーリカが姿を現した。

朗らかな笑みを浮かべて入ってきた彼女は、上司が別の隊の上官に胸を揉まれているという謎の光景に思わず思考を停止させて。啞然とした表情を浮かべた後、頬をひきつらせながらこちらに視線をやつた。

説明しろということなのだろうが、生憎と俺もこの状況を上手く説明するには少しばかり語彙が足りない。黙つて首を振つた俺を見た彼女は、もう一度バルクホルンと隊長に目をやると、気を取り直すよう頭を振つて。再び表情を笑みに変えると、俺の隣に腰かけてきた。

「やほ。えつと……。ヴエラ、だつたよね？」

「はい。あの時の朝食以来ですね、少尉」

階級的には上官である彼女に対し、俺は少し畏まつた態度で返答をした。が、彼女はそんな俺の態度に少々嫌そうな顔をすると、軽く手を左右に振りながら「フランクでいいよ」と口にする。

「別に公の席でも何でもないんだし、年だつて多分私の方が下なんだからさ。もつと仲良いくこうよ、ほら」

そう言うと同時に、彼女は俺の手を取つた。握手のような形で右手同士で握り合い、ニコリ、と天使のような笑みを俺に向ける。

するとその瞬間、ドキン、と俺の胸が高鳴るのを感じて。先程とは違う意味で顔を赤らめた俺は、つい顔を隠すように背けてしまつた。……ヤバい。この子、可愛すぎる。個人的にはエイラ派だつたのに、ゲームとはいえ実際に目にしたエーリカの笑顔に、思わずときめいてしまつた。

画面越しじゃない、ちゃんと自分に向けられた彼女の笑顔は、どう

にも破壊力が強すぎる。EMT、EMTとアニメを見ながら儀式の呪文のように連呼していた友人の気持ちが、少しだけ理解出来るよう気がした。

「……えっと。じゃあよろしくお願ひします、エーリカさん」

「はーいよろしく。隊長同士も仲良いみたいだからさ、こつちもよろしく——」

「やつ、やめつ、やめろ……！　ちよつと、これ以上は洒落に、ならな、んう……つ!?」

「ははは。……ううん、いかん、少しこいつない気持ちになつてきたな。私も真正なわけじやないんだが」

「——適度によろしく、度を超さない範囲で仲良くやつていこうか、うん」

「あ、はい」

段々とエスカレートしてきた隊長のセクハラを背景に、俺達は友人としての握手を交わしていた。……友人として、である。念のため。

「……」
「その、ですね、ミーナ少佐……」
「……」
「……申し訳ありませんでした……」

ちなみに。隊長の悪戯は、騒ぎを聞き付けたミーナが怒鳴り込んでくるまで続いていた。しおらしい隊長と、胃を押さえながら静かに怒るミーナの姿を、珍しいものを見たと、後から来た隊員達——俺が所

属する隊と、バルクホルンの隊の人達——と共に眺めていたのはいい思い出である。

……馬車の隅で、火照った頬を必死に冷やしながら乱れた衣服を整えていたバルクホルンには、誰もが見ない振りをして。俺とエーリカもまた、少し恨みのこもった視線を背後に感じたものの、彼女に視線を向けようとはしなかつた。

「……ハルトマン、ヴェラ軍曹、お前達覚えていろ……」

怖くて向けようにも向けられなかつた、と言う方が正しいかもしないが。

ミツシヨン 1 (E)

——それは、圧巻の光景だつた。

陸が三分に、ネウロイが七分。遠くに広がる、本来は地面を覆い尽くさんばかりに広がつてゐるであろう農耕地は、無数の黒い異形の怪物に埋め尽くされようとしていた。

わさわさとネウロイ達が各々の脚部を動かしてゐる様子は、遠目から見る限り、まるで巨大な昆虫が集団となつて蠢いてゐるようにも思える。さらにその上空に滯空してゐる飛行型ネウロイ達の姿も合わせれば、地獄からベルゼブブの軍團が抜け出してきたのかと錯覚すら覚えてしまう。

軽く見積もつても、敵の数は百を軽く越えているのが分かつた。中にはここからでもそれと分かる大きさの、所謂中型や大型のネウロイの姿も見受けられていて、今回の作戦を知らなければ敵の本格侵攻が始まつたのかとでも思つてしまふに違ひない。

ネウロイを誘引して敵勢力をある程度の大きさに纏め、予定地点に引き込んだ上での待ち伏せ作戦。一部の高官によつて大仰な作戦名まで名付けられたこの作戦のために、カールスラントはパ・ド・カレーのウイツチほぼ全てを投入してゐた。

「……何と言うか。ウイツチがこうも集まると、壯觀だね」

チラチラ、と。自身の周囲の上下前後左右、360度全ての方向に存在してゐる味方達を見て、エーリカは半ば呆れたように呟いた。

現在彼女達は、大規模な編隊を組んでネウロイ群へと向かつてゐる。さながらどこぞのピグミーのように、百数十のウイツチがまるで一つの生き物となつたような形で動いていた。

彼女がいるのは、その奇つ怪な生物の頭——つまり先駆けとも言える戦闘集団に、彼女の隊は加えられている。エーリカ、そしてバルクホルン。現時点のカールスラントで上位に入るエースを二人も抱えているのだから、その配置は至極当然といつたところだつた。

彼女もその配置に不満はないものの、普段では考えられないほどに潤沢な味方の勢力に再び目をやると、軽く肩を竦めて。これなら自分

の働きなど必要ないんじやないかと、内心で一人ごちていた。

「そろそろ接敵だ！ 慌てず、武装の最終チェックを済ませておけ！」

隊の先頭を飛んでいるバルクホルンが、後ろのエーリカ達を振り返りながらそう呼び掛けた。彼女が初めて部下を率いる立場になつた時から欠かさず行つているその呼び掛けは、彼女の生真面目な性分と優しい根の部分が故である。

エーリカも、他の隊員達と同様にその場で軽く装備のチェックを行つた。既に新兵とは呼べないほどには経験を積んでいる彼女は、昔のようにミスを見落とすようなことは殆どない。何かしらの問題を見つけることもなく、彼女はバルクホルンに状態良好との返事をした。

ふう、と一つ息を吐く。その憂鬱な雰囲気を隠さない様子は、とても任務前の軍人のものとは思えなかつた。

そもそも、彼女はこの作戦に乗り気なわけではない。これがカールスラントにとつての今後を左右する重大な一戦であり、ネウロイの戦力を減らす貴重な機会であることも理解しているものの、それでも彼女はどこか一步引いたような感情を覚えてしまつていて。

怖くはない。ネウロイとの戦闘自体を忌避しているのではなく、ただ何か、上手く言い表せない嫌な予感が彼女の背中を引っ張り続けていた。第六感とでも言えばいいのだろうか、彼女の無意識がこれから戦闘に対しての警鐘を鳴らしているようにも感じられる。

『——これは、我々カールスラントによる対ネウロイ戦争にとつての大好きな一步となり、我々の力を世に示すこととなるでしょう。今我々は、軍人として、ウイツチとして、かの邪智暴虐たる怪物共を討ち滅ぼす騎士となり——』

出発前。急ぐからと、特例として馬車に乗つてゐる状態のままで、激励のための演説を聞かされた。常識的に考えると明らかにおかしい措置ではあるのだが、演説の話者には然程気にした様子はないようだつた。

まるで舞台の役者のように、身振り手振りを加えて話していた女性——ゲーリングという女性将校が今回の作戦の発案者らしいと、エー

リカは噂で耳にしていた。エーリカが見る限り、彼女からは軍人、というよりはどうも政治家に近い印象を受けるように思える。美辞麗句を並べ立てる彼女はその場のウイツチからも少なくない好意を受けていたようだつたが、エーリカはさつきと興味をなくして隣のヴエラとのお喋りに興じていた。

ヴエラ。数時間前に新しく出来た、彼女の友人の一人である。童顔で、一見すると子供らしいように思えるその少女は、中身はそこらの人間よりも余程大人であるらしい。馬車の外に聞こえないようにな声でこつそりと行っていた二人の会話で、彼女が涼しい顔をして毒を吐いていたことをエーリカはよく覚えている。

また、彼女は優れた狙撃手であるという話だが、エーリカ自身はその腕を実際に目にしたことはない。彼女と肩を並べて戦うのはこれが初めてであり、そう意味においてはエーリカはこれから戦闘を楽しみにしている。静止目標とはい、1000メートルもの先を撃ち抜いたという彼女はどれだけの活躍を見せてくれるのか、エーリカは一種の期待感すら抱いていた。

チラリ、とエーリカは後ろを振り返る。背後に広がるウイツチの群れの向こう、最後尾に近い辺りに彼女の姿はあつた。

マルセイユのような、鳥類の使い魔を持つ証のシュンとした耳を頭に生やし、小ぶりの西瓜ほどはあるかという胸の下で銃を抱えている彼女は、エーリカの視線に気づいて小さく手を振つてくる。それに笑顔で振り返しながら、エーリカはふと、彼女があと一体撃墜すればエースになることを思い出した。

せつかくなら、私が花道を用意してあげるのも悪くないか——。そんなことを考えたエーリカは、上がらないテンションを無理矢理に引き上げて。友人の撃墜スコアを手助けしてやるべく、心のエンジンをかけ直すことにした。

「いいか、まずは地上部隊による一斉砲撃が行われる！ それを合図として、我々航空部隊が敵航空戦力に突入、これを殲滅する！ 先陣たる我々の仕事は敵陣を乱すことだ、まずは撃墜スコアなぞ後にして飛び回れ！」

J a w h o l !

バルクホルンの言葉に、エーリカ達は口を揃えて返答をした。明らかに士気の低かったエーリカがいつの間にかやる気を出して、いたことに一瞬驚きながらも、バルクホルンは隊員達の戦意が十分であると判断すると、ニヤリと獰猛な笑みを浮かべる。

バルクホルンという人間は、普段は眞面目で勤勉実直なカールスラント軍人である。プライベートではそれにシスコン氣味だの世話焼き好きだのという要素も付け加わるが、総括すれば彼女は實に優しい善人だと言つていい。

だが戦場での彼女は、時に違つた一面も見せる。敵であり、自らや仲間達を脅かす存在であるネウロイに対して、彼女がその優しさを向けることはない。——まるで獵犬のような獰猛さを剥き出しにして、その喉元へと食いかかるのだ。

ドン、と。下の陸上ウイツチと通常戦力の混成集団である陸上戦力が、その砲火をネウロイへと浴びせ始める音が響き渡つた。それとほぼ同時に無数の砲弾がネウロイの群れへと降り注ぎ、その戦力の一部を豪快に吹き飛ばして行く。

上空の彼女達もまた、行動を始めた。今にも吠えかからんばかりに口を横に引き締めていたバルクホルンは、音が聞こえたと同時に今回 の作戦で航空部隊の指揮を執るウイツチにアイコンタクトを送る。そしてコクリ、と彼女が頷いたのを見て、待つてましたとばかりに口

卷之三

『Hurraraaaaaaaa!!』

ウイツチが、戦場に飛び込んでいく。突撃の掛け声の大合唱をBGMに、エーリカは眼前のネウロイ達へと向かっていった。

近づく間に飛んでくる攻撃を避けながら、彼女は抱えていた銃を構える。引き金に指を掛けた状態で、この距離ではまだ当たらぬからと、指に力を入れそうになるのを何とか我慢して。数秒、いや数十秒ほどの体感時間の後、彼女の視界に映るネウロイの姿が大きくなつて初めて、彼女はその引き金を引いた。

彼女が持つ銃は、MG 42と呼ばれる代物である。所謂機関銃であり、7.92×57mm弾を一分間に1200発以上も放つことが出来るその銃は、対ネウロイ戦に於いてもかなりの火力を誇る。

バババ、と人間には正確な認識すら出来ない速さで発射音を鳴らしながら、銃弾が次々に小型のネウロイの胴体を抉っていく。狙いをつけた一体が堪らずに体を粒子に変えたのを横目に、エーリカはバルクホルン達と共に敵中へと突入した。

「突っ込みすぎるなよ、ただ乱すだけでいい！　乱れた敵は後ろの味方が仕留めてくれる！」

MG 42の掃射をネウロイに浴びせかけながら、バルクホルンは掛け声代わりにそう叫んだ。

一瞬だけエーリカが後ろを振り返ると、確かに彼女達が切り込んだ後のネウロイを後続のウィツチ達が倒している光景が見えた。エースのように鮮やかではないが、数を活かした連携でネウロイの数を確実に減らしていつている。

エーリカ達の最初の役割は、言つてしまえば囮である。ネウロイの注意を一瞬だけでも引き付け、他のウィツチ達がその隙に倒すという戦術をまずは採用していた。囮に多大な負担がかかる戦術ではあるが、バルクホルン隊はカールスラントでも上位に入るエースに率いられた精銳であり、皆早々と脱落することもなく作戦を進行していた。敵陣の三分の一ほどまで食い破った頃だろうか、周囲の状況を見たバルクホルンは前進を中止。これでは完全に包囲されつつあると、横に逸れる形で一度敵陣からの離脱を試みることにした。

「……中佐。こちらJG 52第2飛行隊、バルクホルン中尉です。後続の進みが遅く、このままでは我々が完全に孤立します。予定より早いですがここで一度離脱します、どうぞ」

「了解しました、離脱を許可します。離脱後は右翼のJG 3に合流し、作戦を進めてください」

「了解、敵左翼方面を突破し直接合流を図ります。ではこれで」

指揮官と無線での通信を終えた後、彼女は一度後ろを振り返る。彼女の後ろに続いているウィツチの数は未だに一つも欠けておらず、

精々が服の一部にかすり傷や焼け焦げた痕が付いているぐらいであつた。

エーリカもまた、傷一つ負わずに彼女の後ろを飛んでいた。両手で抱えたMG42をもののついでとばかりに振り回し、自らの撃墜スコアを順調に伸ばしているその姿はまるで鬼神のようでもある。彼女につけられた『黒い悪魔』という渾名は、けつして伊達ではない。「これより、敵左翼を突破して味方右翼に合流する！　いいか、私から絶対に遅れるなよ！」

「「J a w h o 1 ! 」」

「よし、いい返事だ……。全員右旋回！　四時方向に全速転進！」

スルリ、と。滑り落ちるように滑らかな機動を描いて、バルクホルンは鮮やかな旋回を行う。後ろの隊員もそれに続いて旋回させてゆくが、彼女ほどに洗練された動きではなかつた。

唯一の例外は、エーリカである。バルクホルンが滑らかな曲線のような動きなら、彼女は鋭いターンをいとも簡単にこなしていた。バルクホルンと方向性は違つたものの、その動きはエースに相応しい、無駄のないが故の美しさを感じさせる。

これが航空ショーンなら拍手喝采ではあつただろうが、残念なことに現在の観客であるネウロイが何か反応を示すわけもなく。その腕前を称賛されるでもなく、彼女達はネウロイが比較的薄い箇所へと再突撃していった。

バババ、と発射音が鳴る。撃ち尽くした弾を即座にリロードしながら、彼女達は前方を塞ぐ小型のネウロイ達を鎧袖一触とばかりに撃墜していくた。

彼女達の動きは、実に効率的だ。やたらめつたらに照準を迷わせることもなく、確実に狙えそうな一体を定め、即座に引き金を引く。百発百中とまでは流石にいかないが、自分の出来る範囲を最大限にこなしている彼女達の命中率は、中々に高い部類に入る。無論、あくまで比較的な話であり、どこぞの狙撃特化のウイツチとは比べようもないのだが。

「——ハルトマンツ！」

突如、バルクホルンが短くエーリカの名を呼ぶ。エーリカがそれを耳にした瞬間、彼女は即座にシールドを開いた。その後、彼女の体を幾筋もの赤い光線が襲う。ガガガ、と削るような音をたててシールドとぶつかつたそれは、小型のネウロイが放つそれよりも強力な攻撃であった。

視界を覆う赤い光が消え去った後、彼女は攻撃が放たれた方向へと視線を向ける。彼女が注意を向けていた飛行型ネウロイ達のその下、今まさに陸上戦力と張り合っている陸上型ネウロイ達の中の中型ネウロイ一体が、その砲身を彼女へと向けていた。

戦車を体の素材とした個体なのだろうか、それは戦車に蜘蛛のような足が付いた不気味な外見をしている。彼女はチイ、と一つ舌を打つて。次に放たれたそれからの攻撃を、今度は急移動によつて回避した。

陸上型ネウロイの注意は、陸上戦力が引いてくれる話じゃあなかったのか——。事前に聞かされていた作戦の内容を思い出しながら、エーリカは内心でそう愚痴る。陸からの対空砲火は、航空戦力にとつては自らを脅かす脅威である。ウイツチもまた例外ではなく、対空砲火は航空ウイツチへの牙足りえるのだ。

故に、陸上型ネウロイの攻撃を空に向けさせないべく、陸では人類側の猛攻撃が加えられているはずだつた。少なくとも作戦上ではそうだつたはずなのだが、やはり全ての敵を引き付けておくというのはどうだい無理な話であつたらしい。エーリカへの攻撃を始めとして無数の攻撃が陸から空へと上がり出したのを目にして、バルクホルンは回避のためにその場での散開を指示せざるを得なかつた。

「こちらバルクホルン、敵の激しい対空砲火を受けている！　話が違うぞ、陸は何をやつてているんですか！」

『こちらでもそちらの状況を確認しました。現在、陸上ウイツチ達が全力で敵陸上戦力を攻撃中で——』

「ええい、話が長いッ！　いいからさつさと花火を黙らせるか援軍を寄越してください、このままでは合流まで持ちません！」

まるでシューティングゲームのような弾幕を必死に避けながら、バ

バルクホルンは指揮官へと無線で半ば怒鳴るように要請をした。彼女にしては珍しい必死な形相を浮かべて、火線の隙間隙間に見える隊員達の姿を探して無事を確認しながらのことである。

思考回路を出来る限りの速度で動かしていたのだろう、十秒近くの沈黙の後、指揮官のウイツチはようやく口を開いた。

『……分かりました、援軍を回します。到着まで耐えていてください』

「バルクホルン了解！ 出来る限り持たせます！」

ブツリ、と。通信が切れると同時に、バルクホルンは即座にMG42の弾を放つた。

バババ、と流れるように連續で発射されたその弾は、彼女に攻撃を加えようとしていた陸上型ネウロイの一体へと命中した。が、距離がありすぎるために集弾性が悪くなっているのだろう、装甲の一部を剥がしただけでコアを撃ち抜くことはない。攻撃を中断させることには成功したものの、陸上の敵を排除するのはこの距離では難しいようだつた。

ならば高度を下げればいいということになるのだが、この対空砲火にさらに近づいていくのは最早自殺行為である。エースであるバルクホルンやエーリカさえ、この対空網を掻い潜つていこうとは思えなかつた。

爆発物でもあれば爆撃が可能とはいえ、残念ながらバルクホルン達の中にそれらを今携行している人間はいない。役割故に機動性を重視した結果、余計な装備を大部分減らした結果である。

結果として、彼女達は自力で現状を打破する能力を持ち合わせていなかつた。対空砲火に進路すら塞がれ、逃げ回りながら散発的な反撃を繰り返すのが精々という状況である。不幸中の幸いとも言えるのは、同士討ちを嫌つたのか、飛行型ネウロイが近づいて攻撃をしてこないことくらいのものであろう。

囮の役割としては、ある意味これ以上ないくらいの大戦果と言えるだろうか——。本来の予定に加えて陸の注意すら引き付けていることに、バルクホルンは半ば現実逃避にそんなことを考えた。

「……うげえっ!?」

一方、エーリカは危機に陥っていた。数分もの間、敵の砲撃を回避し、時折嫌がらせ混じりに銃撃を陸に浴びせていた彼女ではあつたが、攻撃が掠りでもしていたのだろうか、片足のストライカーユニットの調子が明らかに悪くなりつつあつた。

いきなりエンジンが止まつたりということはまだないものの、バス

ンという彼の抜けた音が時々コンシン音は搽まつてしていることは、彼女はさつと顔色を青くさせる。明らかな不調であり、それはこの状況においては彼女の命すら脅かしかねない緊急事態を意味するのだ。

うな人間はない。……明確を死の予感」というものを初めて潔しく感じて、彼女はパニツクになりかけた自分の心を理性で必死に抑え込んだ。

「ヤバイ、トウルーデ助けて！ ユニットが片づ方調子悪い！」
「何だとッ？ 待つてろハルトマン、今行くぞ！」

彼女が大声で助けを求めるが、バルクホルンの声が即座に返つてきた。が、それが隙になつたのか、飛んできた砲撃の一つを避けられずに、彼女はシールドでの防御を行う。

展開する時間は十分あつたために、彼女への直接のダメージはなかつた。だが衝撃はシールドでは防げず、ドン、と強く揺さぶられるような衝撃が彼女を一瞬だけ襲う。それは不可避のものであり、本来なら取るに足らない短い隙を産み出すだけだったのだ、が。

【二二六】
ブスン。そんな一際大きな音を吐き出した直後、彼女の右足のストライカーユニットは動きを止めた。

——ハルトマア———
——ンツ!!!

バルクホルンの叫び声を、エーリカはどこか遠くの音のように感じていた。彼女は呆然と、出力が半分になり、徐々に高度を下げて行く自分の体を見つめ続けた。

彼女が無意識に張つていたシールドに、対空砲火が次々と命中していく。回避行動を行おうとはするものの、片足ではまともな機動すら難しい。被弾箇所を致命的な場所からずらすのが精々で、彼女はなき

れるがままに攻撃を耐え続けるしかなかつた。

……ふと。彼女の脳裏に、彼女と瓜二つの双子の妹の姿が過つた。幼い頃の思い出を想起しながら、彼女は小さく、妹の名前を口にして

「……あれ？」

ぎゅう、と。砲撃の雨に必死に耐えていたはずの彼女の体が、今度は抱き締められるような感触を覚えた。

どうしたのかと彼女が瞼を開くと、いつの間にやら周囲には何人のウイツチ達がいて。見覚えのあるその少女達は、バルクホルン達を脱出させるべく敵の注意を分散させようとしていた。

チラリ、と。彼女は自らを抱き抱える存在へと視線を向ける。彼女を後ろから抱き締める形で支えているその少女を、彼女は誰だか知つていた。

まるで恋人のように、少女は彼女を力強く抱いている。それは彼女を支えるためであるというのは理解しているが、彼女はこの状況への喜びの感情を覚えた。

先程までの不安の反転が、その少女への感情に変化した。それは別に大きなものではないし、少女との関係を直ぐ様変えてしまいもしないが、ただ少なくとも、の話として。

「……ヴエラ？」

「——はい。無事ですか、エーリカさん」

ニコリ、と可愛らしい笑みを向けてくるその少女を見た瞬間、彼女の心に何かの種が蒔かれたのは確かだつた。

ミッショントーク（B）

——運が、良かつた。エーリカが一命を取り止めた理由は、極論すればそれに尽きる。

運良く、後方に半ば遊撃と化していた戦力があつた。運良く、それを救援に回せる余裕があつた。運良く、彼女達は敵の強い抵抗も受けずにエーリカ達の下まで辿り着くことが出来た。運良く、エーリカが落下しきる前に抱き止めることが出来た。

運も実力のうちという言葉があるが、エースという人種は天に愛されでもしているのだろうかと、後にこの話を聞いた将官が溢したほどである。エーリカの生存は、それほどまでに奇跡の積み重ねの上に立っていた。

その時彼女の側にいた、彼女が落下していく様子をつぶさに見ていたバルクホルンも、彼女が生き延びたことに驚きを隠せなかつた。援軍にやつて来たウイッチ達がエーリカを救助し、バルクホルン達を敵の包囲から助け出してゆくその姿を、彼女はどこか現実離れしているような心地で見つめていた。

「——トゥルーデ！　おい、ぼさつとするな、トゥルーデ！」

いつの間にか側に寄つてきていたウイッチの喝を聞いて、バルクホルンはようやく我に帰る。

見ると、彼女の隣にいるのは見知った友人の、ダールという名のウイッチであつた。ミーナの下で中隊長を務めている彼女がどうしてここに、と一瞬考えて。すぐに彼女の隊が援軍に来てくれたのだと結びつけて、バルクホルンは安堵の息を吐いた。

「お前か……。いや、すまん。助かつた」

「礼なら後にしろ、今はさつさとここから離れるぞ。無事な奴等は後方で再編成、怪我人は地上までエスコートしてやる。……行けるな？」

彼女の問いかけに、コクリ、とバルクホルンは力強く頷いた。

エーリカの一件で少し気が抜けてしまつたとはいえ、彼女もエースである。すぐに戦意を再びたぎらせて、抱えたMG42を構え直し

た。

「バルクホルン隊、点呼！ 無事知らせえーツ!!」

周囲をさつと見渡して、バルクホルンは点呼を呼び掛ける。怪我でもしたのか、エーリカのように他の人間に抱えられていた隊員もいたが、声は欠けることなく全員のものが返ってきた。

数分ほどの短い時間ではあつたが、死中にいたと言つていい彼女達である。憔悴していくてもおかしくないだろうに、その目から感じ取れる霸氣は非常に高い。

その反応を見て、バルクホルンは部隊が未だに生きているとの判断を下して。隣の少女と顔を見合わせると、示し合わせたかのように頷いた。

「いいか貴様らツ！ これより我々は、ダール隊と共に後方へ
る！ 全員遅れるな、私とダール中尉に続けえ——ツ!!」

バルクホルンの短い言葉の最後、掛けられた号令に従つてその場の
ウイツチ達は動き出した。

バルクホルン隊、そしてそれを護るダール中尉に率いられたウイツチ達は、お決まりの掛け声を叫びながら前に進んでゆく。それは撤退と呼ぶよりは、正しく後方への突撃と呼ぶに相応しい——扶桑に詳しいものがこの光景を見れば、丸に十字のとある家紋を思い浮かべるようだ、そんな鬼気迫る雰囲気を醸し出すものだつた。

彼女達が進む方向、つまりダール達がやつて来た方向にも、ネウロイ達は存在している。ダール達が行き掛けに少しは排除しているとはいえ、まだまだその数は少くない。

もし彼女達が通常戦力であるなら、それらは高い壁となつて立ちはだかつたであろう。……が、ウイツチの集団の本気の突撃を止めるには、些か戦力不足と言わざるを得なかつた。

「——緩いツ！」

バツサリと。航空型ネウロイに照準を合わせるバルクホルンは、そ

の敵の機動を切つて捨てた。

彼女が放つた弾丸は、敵から少し離れた所を目指して飛んでゆく。

そのままなら外れてしまうだろうそれは、しかしネウロイの移動した先と見事に重なつていて。偏差射撃と呼ばれる、敵の動く先を予測しての攻撃を受けて、そのネウロイは姿を塵に変えた。

敵からの攻撃を螺旋を描くように飛んで回避しながら、新たな敵を定めた彼女は、それに狙いをつける。パパパ、と幾つもの乾いた音がした直後に、その幾何学模様のようなネウロイは四散していた。

奮迅。彼女の働きは、そう言い表すにも言葉に余る。

集団の先頭に立つて道を切り開き、後に続く面々の撤退のための障害を取り除いていく彼女は、既にこの戦いだけで二桁を数える撃墜数を記録していた。ダール、ヴエラ、そういつたその他の面々の中にも活躍している者はいるものの、撃墜数だけで見ればとても彼女には及ばない。

彼女と肩を並べるエースであるエーリカが戦闘の継続はほぼ不可能であるために、ある意味ではその皺寄せが彼女に行つていると見える。が、親友が戦えないというその事実が、現在のバルクホルンの力をさらに引き出していた。

（……クソッ！ 守れなかつた、ハルトマンが、もう少しで死ぬところだつた！）

敵を倒しながら、バルクホルンは内心で自身を叱咤する。悔しさ、怒り、後悔、様々な感情が彼女の心中に渦巻いて、彼女自身の心を責め立てていた。

彼女は隊長である。部下を預かる責任、部下を護る義務があり、万が一の場合には自分を投げ出してでも部下の生還を優先する、それが軍人の上官というものだと彼女は教えられてきた。

無論、それがあくまで理想だということは彼女も知っている。部下を守れず一晩中泣き腫らしていた同僚や、部下を見捨てて一人だけ後方に下がってきた士官の姿など、彼女も腐るほど見てきている。

だが、良くも悪くも、彼女は真面目な人間だった。その理想を本気で守ろうとして、死力を尽くして——結果として親友を死なせかけてしまった。

（何がエースだ、スーパーイースだ！ 肝心な時に、所詮、人間一人で

は……！）

ギリ、と。歯を食い縛るバルクホルンは、エースだウイツチだとおだてられても、あくまでも一人の人間でしかないのだと、自分の無力感を思い知らされたように感じる。

油断は大敵であり、慢心は罪である。気を引き締めるようにはしても、自分はどこか驕つてしまっていたのではないか——。彼女は今にも自分を殴りつけたくなる衝動を、必死に我慢した。

ふと、彼女の脳裏に一人の少女の姿が過る。それは彼女の最愛の妹であり、避難民として今はダンケルクにいるはずの彼女を心の底から愛してるバルクホルンは、自分が妹を守りきれないのではと、そんな最悪の想像をした。

想像する。ネウロイに襲撃され、蹂躪される民衆達。人間だつたものがあちこちに散乱し、血肉にまみれたものが周囲を埋め尽くして。その中に、彼女の見知った少女の、苦悶に歪んだ顔が――

「——ッ！」

瞬間に沸き出た怒りを、バルクホルンは眼前のネウロイにぶつけることで発散する。MG42の弾のシャワーを敵に浴びせかけながら、今しがた浮かべた想像を必死に振り払つた。

（大丈夫だ……。クリスは大丈夫だ、ダンケルクはまだ安定している。落ち着けゲルトルート、今は目の前の敵に集中するんだ）

すう、はあと何度か深呼吸を繰り返して、彼女は冷靜さを取り戻す。落ち着いて彼女が周囲を見渡すと、そろそろ味方に近づいてきたのか、周囲の空に見える航空型ネウロイの数もすっかり少なくなつている。地上からの攻撃もなくなつて、ここ暫くは空の敵のみに集中出来る余裕があつた。

それからは特に何事もなく、途中ですれ違つたウイツチ達に囮の礼と戦果の賞賛をバルクホルン達は受けながら、彼女達は後方に下がつていった。

エーリカ達を地上に下ろすために何人かのウイツチが一時的に離れたが、それ以外の彼女達は皆一塊に集まつて、再編成のための指令を待つ。JG52、JG3と所属は違う彼女達だが、現場においては

臨時で編成が組まれることも少なくない。

隊に負傷者や脱落者が出てバルクホルンは、ダール隊との一時的な合併を無線で上に具申。無線の相手である指揮官は少々悩んだものの、結果としてそれを許可したのだつた。

「……よし。ではこれより、我々ダール隊の何人かをバルクホルン隊に回す。異存のある者は手を挙げろ」

無線を終えた直後、ダールは隊員達を見渡しながらそう言つた。当然のように手は一つも挙がらず、彼女も当然のように頷いた。

実際、これは形式のようなものである。上官への意見が絶対に悪いというわけではないが、この場合のこの決定において反論が出る可能性は彼女もバルクホルンも考えていない。反論したとして、何か意味があることでもないためだ。

視線をバルクホルンに向けた彼女は、誰がいい、と短い言葉で尋ねた。バルクホルンはふむ、と暫し思考を巡らせて、自分の要求を口にする。

「見たところ動きが良かつた、あそこの茶髪……あとヴエラ軍曹をくられ。ハルトマンを助けてくれた礼だ、撃墜数をアシストしてやりたい」

「ヴエラ軍曹か？　ああ、うん、あいつがいると色々楽なんだけれどな……まあいい、持つてけ」

「助かる。世話になりっぱなしになしだな、後でブルストでも奢つてやろうか？」

「……ビールは？」

「一杯ならな」

ついでに二人が軽口を交わしていると、下から先程別れたウイツチ達が上がつてくる。

補給物資も貰つてきたのか、弾薬を抱えて戻つてきた彼女達は、他の隊員達にそれを配つていつて。ダールもそれを受け取りつつ、彼女達に先の決定を伝えた。

「臨時編成として、ダール隊から一部人員をバルクホルン隊に回すことになつた。ヴエラ軍曹、お前はクリスタと一緒にバルクホルン隊

だ

「……え？ あ、はいっ、了解しました！」

エーリカを助けた、今その彼女を地上に届けてきたウイツチ——
ヴエラという少女は一瞬呆けた顔をして、すぐに敬礼で返す。

ちらり、と視線を向けてきた彼女に、バルクホルンは軽く手を挙げて。近くにいた茶髪の少女と一緒に近づいてきた彼女に、薄い笑みを浮かべた。

「さて……。知つているかもしないが、ゲルトルート・バルクホルン中尉だ。二人とも、短い間だがよろしく頼むぞ」

「は、はい！ フランツィスカ・ヴエラ軍曹です、よろしくお願ひします！」

「クリスタ・ブラウン准尉であります！ 同じく、よろしくお願ひ致します！」

合流してきた二人は敬礼をして、自分の名を名乗る。バルクホルン隊の面々も二人に対しても自己紹介をし、それぞれ軽い挨拶を交わした。

特に疎むような様子もなく、二人との共闘を彼女達が受け入れたのを見て、バルクホルンは満足そうに一つ頷く。それからこれから行動目標、先に決めた通りに右翼の援護に回ることを伝えると、声の揃つた了解の言葉が返ってきた。

そして再び前線へと向かおうとする、その前に。ふと、彼女の隊の一人が、何かに気づいたように呟いた。

「……何、あれ。どこの隊？」

「む？ どうした、何かあるのか？」

「いえ、その。あれを……」

バルクホルンの問いに、少女は彼女達の後方、基地がある方面を指差した。

そちらに視線を向けてみると、多数の黒い点がこちらへと飛来してきているのが見てとれて。スコープでその姿を確認したバルクホルンは、それらがネウロイではなく陸上攻撃ウイツチ達であることに気がつくと、その眉根を寄せる。

作戦では、陸上攻撃ウイッチの出番はもつと後のはずだつた。敵航空戦力を排除、もしくはほぼ無力化と言える状態まで追い込んでから彼女達を投入し、敵陸上戦力に大打撃を与えることになつていた。

現時点では、まだ敵航空兵力はそこそこの数が残つてゐる。味方の尽力により随分とその数は減つてゐるが、無力化したと言うにはまだまだ敵の数が多すぎる。

にも関わらず、この時点での投入が行われた。……その理由を考えて、バルクホルンは何だか嫌な予感を覚えた。

『——戦場にいる、全ての航空ウイッチに告げます。これより我々陸上攻撃ウイッチ達が敵に当たります、貴官らは速やかに後方に退避、我々の援護に回りなさい。繰り返す——』

彼女の予想通り、次の瞬間にはそんな言葉が無線で流れ出していった。どこか高慢ちきな雰囲気の女性の声で告げられるそれは、無線を持つているウイッチは全員聞こえているようで、彼女が周囲を見渡せば困惑した様子のウイッチが彼方此方にいる。

その通告はあまりにも一方的で、投入が早められたことの説明もなく、とても納得の出来る命令ではなかつた。いや、そもそも命令なんかも怪しい、酷く乱暴な言い様である。もしや現場の暴走ではないのかと、彼女は繰り返されるその言葉を遮つた。

「——ちらJ G 52、バルクホルン中尉だ！ 陸上攻撃ウイッチの投入はまだ後だつたはずだろう、どうなつている！」

『……——ちら、 J G 3のヴィルケ中佐です。バルクホルン中尉が言うように、作戦では貴女方の出番はまだ先だつたはずですが』

『——ちら指揮を執らせてもらつてゐるカーン中佐だ、我々は既定の作戦に則つて戦闘を行つてゐる。貴官の姓名と階級、及びにその命令を下した人間を答えよ』

彼女に続いて、疑問を浮かべたウイッチ達が次々に問い合わせを投げ掛けてゆく。その中には彼女達の指揮を執る人間も含まれていて、その彼女の言葉には若干の怒りが混ざつていた。

が、そんな感情の発露に気づいてかそうではないか、命令の発信者は馬鹿にしたような笑いを一つ溢して。誰とも知らぬ少女の嘲つた

顔を、バルクホルンは正確に幻視した。

『私はハインリーケ・フォン・シュタイン……。階級は大尉ですが、この命令は正式な司令部からの命令ですわ。貴女達航空ウイツチが予想よりも不甲斐ないものですから、我々が尻拭いを任せられましたの』

『——なんだと?』

指揮官の声に、さらなる怒気が混ざつてゆく。

現在の戦況は良いというわけでもないが、悪くはない。全体としては順調に遂行されていると言つてよく、不甲斐ないと言われるのは指揮官の少女も、そして今まで命を張つて戦ってきたウイツチ達にとても心外である。

何より、シュタインと名乗った少女は、明らかに彼女達航空ウイツチを見下していた。もし本当に不甲斐なかつたとしても、彼女の態度は目に余るものであり、とても戦場で戦う兵士に掛ける言葉ではなかつた。

なんと、破廉恥な——。バルクホルンはそう怒鳴り付けたくなる衝動を、必死に我慢した。

『命令書も携えてきておりますので、よければお見せ致しましようか?
? 実は出発前に、中将閣下から戴いて参りましたの』

『……よかろう。シュタイン大尉、後方中央の私の所に今すぐ来い』
最早苛立ちを隠そともせずに、指揮官のウイツチはそう言つて通信を終了する。これ以上声を聞きたくないとばかりのその行動に、バルクホルン以下他のウイツチ達も続いて無線を切つた。

バルクホルンが再び彼方を見やると、遠くの点だつた陸上攻撃ウイツチ達はかなり近づいてきているようで、既に細かな服装や装備が判別出来るほどの距離だつた。

彼女達の先頭にいる、如何にもな貴族面をした少女が、今のシュタインという大尉だろう。フォン、というミドルネームがあるので本物の貴族の出身なのだろうか、自然に他人を見下すような雰囲気が実に似合つてている。

ふと、バルクホルンは彼女と目が合つた。バルクホルンが敵意や警

戒心を露にして睨んだその視線を受けてなお、大物なのか余程の馬鹿なのが、彼女は鼻で笑つて受け流していた。

ミッション 3 (W)

すう、と一息。吸い込んだ状態で息を止め、視界に映る敵の一体に狙いを定めた。

戦闘開始当初からは随分と数が減つてはいるが、まだまだ敵の数は多い。空に映る黒い点、航空型ネウロイの数は目に見えて少なくなっているものの、地上を我が物顔で闊歩している陸上型ネウロイは未だ健在だった。

視界のあちこちで、先程前線に出た地上攻撃ウイツチ達が何度も敵に攻撃を加えている姿が見受けられる。言うだけのことはあるとうべきだろうか、装備や戦術を地上攻撃特化にしているお蔭というべきか、彼女達は確かに目覚ましい戦果を上げている。手榴弾や重機関砲等の高火力、急上昇急降下からのトップアタックは堅牢な装甲を持つ陸上型ネウロイに対して十分な効果を見せており、後方に下がつて支援を行つて いる俺達航空ウイツチと比べれば、陸上型ネウロイに対するキルレシオは優に三倍を超えていた。

その戦果に対しても、隣で険しい表情をしたままのバルクホルンも認めざるを得ないらしい。彼女達が強引に前線行きを早めたことについては未だ納得していないようだが、彼女達の腕と手際については賞賛すらしている。

「……凄いものだな。あの堅さの装甲を、ああも簡単に抜いてゆくとは」

ぼそり、と。表情は依然として不機嫌なまま、バルクホルンは呟くように言つた。

航空ウイツチにとつて何よりも重要なのは機動力であり、そのためには装備等の重量を削る方が望ましい。さらにウイツチが生身の人間であるが故の体力、筋力的な問題も加わり、航空ウイツチは一部を除いて然程の重装備はなされていなかつた。

そのため、一部の人間を除いて彼女達は火力不足に陥ることも少なくはなかつた。魔法による攻撃、魔眼によるコアの発見からの集中攻撃、数の暴力による集中砲火、そういった方法で重装甲の敵を撃破す

ることは決して不可能ではないとはいえ、大抵の場合は中型以上の陸上型ネウロイ等の重装甲を持つ敵との単独戦闘は避けるべし、というのが航空ウイツチの基本であるらしい。

所謂原作で示された情報ではなく、このゲームの中でN P Cである隊長が教えてくれたゲーム内情報ではあるものの、実際問題として航空ウイツチが陸上型ネウロイを倒すことは結構難しい。少なくともこのゲームの中では、という言葉が前に付くものの、例えば戦車の車体を利用したネウロイにアサルトライフルで勝利するのはエースですら簡単とはいかない。ウイツチがネウロイに対して持つ優位性は再生力を阻害するということであり、決して攻撃の威力を簡単に増幅させることではないのだ。

俺がしようとしていることも、別にネウロイの撃破を狙つてのことではない。今狙いをつけている、おそらく自走砲の車体を素としたネウロイの装甲をK a r 9 8 k の火力で抜くのは不可能だろうし、数百メートル先から露出もしていないコアの部分を連続してピンホールショットする、という神業も今の俺には不可能である。

だが、俺が出来ることはないのかといえば、そんなことはないわけだ。パン、という音を残して俺が抱える銃から放たれた銃弾は、目標のネウロイへと正確に着弾。足元近くを揺さぶられたそのネウロイは、地面が踏み荒らされて凸凹していたこともあり、バランスを崩して転倒。空中のウイツチに向かつて今にも放たれようとしていたその砲撃は、倒れた先の射線上にいたネウロイへと誤射された。

「——ヒューッ」

近くで俺と同じように狙撃をしていたウイツチの一人が、その光景を見て口笛を吹いていた。運悪く攻撃を食らったネウロイが露出させたコアにすぐさま銃弾を叩き込みつつ、視線を感じてその彼女の方に顔を向けると、親指を立てた握り拳をこちらに向けていた。グッジョブ、ということだろうか、俺と一緒にバルクホルン隊と一時的に合流したその少女は皮肉つ気一切なしの笑顔を浮かべている。

確かに、名前はブラウンとかいう航空ウイツチで、階級は准尉の少女

だつたろうか。原作キヤラではない彼女とはそこまで話したこともない関係だと、いうのに、随分と気のいい人間のようである。新人の撃墜スコアの増加と活躍を目にした彼女は素直に俺へのエールを送り、すぐに自分の狙撃へと再び集中した。

……何と言うか。ウイッチというのは美少女が集まるだけではなく、その上で性格美少女ばかりが集まるのかとついつい思う。原作に登場するウイッチ達は性格のいい人間ばかり——勿論、美少女系萌えアニメであるが故、という理由が大きいだろうが——だし、このゲームのNPC達も殆どは善人ばかりだ。この世界の人間の殆どがそうなのか、それとも今の俺の周りだけがそうなのかは分からないが、幸いなことに人間関係等で面倒な事態になつたことはまだない。

勿論、全員が全員只の善人であるわけもない。今回の任務の前に御大層な演説を垂れていた女性将校や、先日知り合つたマンシユタイン、そういつた上の人は善人であるだけではやつていられないという側面もあるだろう。その本性は別として、清濁は併せ呑む必要がある。それはストライクウイッチーズの世界でも同じはずだ。

ストライクウイッチーズは、パンツじゃないから恥ずかしくない系の美少女萌えアニメである。表面だけを見れば美少女がきやつきやうふふしていく、戦つて活躍して、結果的に世界が救われるという非常にライトな物語ではある。

が、舞台が戦争というものを描く以上、その背後はどうなつているのか。先程の地上攻撃ウイッチによる強引な横槍を見れば、その大体の雰囲気は察することが出来る。

「ふむ……。これで陸上型ネウロイも二体目か、中々やるじやないか」「あはは、ラツキーですよ、ラツキー。少なくとも今のはそうですし」「何を言う、ネウロイの重心を崩したのはわざとだろうに。ミーナが気にしていた理由も分かる気がするよ、軍曹」

そんなことは、とりあえず置いといて。隣で上空からの支援射撃を行っているバルクホルンから、そんなお褒めの言葉を頂いた。はは、と軽く笑つて、彼女からは、先程までの不機嫌さは感じられない。その切り替えの早さはエースの証だろうか、苛立ちで部下に八つ当た

りしないその態度は感心すら覚える。

原作におけるバルクホルンは、妹好きのシスコン気味、という側面が強調されてそれはそれで魅力的なキャラクターになつてているのだが、やはり彼女はカールスラントを代表するエースの一人である。その根本は実直で真面目な軍人で、部下に信頼感を与える立派な上司であるようだ。

今俺の隣にいる彼女は、カールスラントのエースだつた。精神的な存在感があると同時に、彼女が放つた弾幕は地上の陸上ウイツチ達を着実に支援してゆき、彼女達陸上戦力が敵を倒す確かな助けとなつてゐる。例え前線でなくとも仕事を十二分に果たしてゐる彼女は、とてもA-I操作のNPCとは思えない不思議な迫力を持つていた。

「凄いっていうなら、バルクホルン中尉の方が凄いじゃないですか。私は狙撃特化みたいなものですし、これだけしか取り柄ないですしど……」

「そう言うな。自分の武器があるのはいいことだ、私だつて自分の長所を活かしてゐに過ぎん。……ヴエラ軍曹、エースになりたいか?」「え? まあ、それは」

「なら、まずは自分の長所を伸ばせ。そしてそれを応用しろ。軍人はチームワークなんだ、お前の欠点は他の誰かが補うし、誰かの欠点はお前がカバーしてやれるようになればいい。それで誰かを守れるようになれば——そいつが正に、立派なエースというものだ」

そう言つて、バルクホルンは一瞬顔を伏せる。その表情はあまりよくは見えなかつたが、何かあつたのだろうか、どこか今の言葉を自分に言い聞かせてゐるようにも思えた。彼女の妹が負傷するのはガリア撤退戦でのことではあるが、もしや既に負傷してしまつてゐるのか、それとも別の要因か。いつたい何だろうと考えて、すぐに先程の出来事を思い出した。

エーリカ・ハルトマン。彼女の親友であり、部下であり、大事な僚機である。彼女が珍しく墜落したという事実は、推測の話でしかないが、バルクホルンに大きなショックを与えたのかもしれない。いや、よく考えればショックを受けるのが当たり前というような話なのだ

が、それでも表面上は普段通りの様子を保っているのは彼女の精神的な強さがなせる技であろうか。

イベントか何かだろう、と今の今まであまり気にしてもいなかつたけれど、眞面目な推測をすれば確かにエーリカが死にかけるという事件は青天の霹靂のようなものかもしれない。バルクホルンに限らずとも、彼女と共に過ごしていた人間なら動搖の一つでもしそうなものだが、見たところではバルクホルン隊の面々も特に狼狽した様子はなかつた。不測の事態でも任務に支障を及ぼさない彼女達は、正しく精銳部隊と言える、やも。

「……む。待て、通信が入った」

ふと、バルクホルンはそう言つて一度会話を切り上げた。肩から掛けた昔らしい通信機に耳を傾け、そこから聞こえているであろう何事かを聞いている。

従来の小規模な任務なら隊員全員に行き渡る通信機も、このような大規模作戦ではどうも数が足らないらしく、部隊の隊長といった指揮官クラスのみが携行している。だからだろうか、今回は俺は無線の内容は聞くことも出来ないし、その辺りはゲームであつても妥協されはいない。サーニャやハイデマリーのようなナイトウイツチなら違うのだろうが、俺は残念ながらそうしたスキルの習得は行つていなかつた。

はい、はいと、無線の向こう側の相手に彼女は何度か返事をして、最後に了解の返答をしてから無線を切る。そして顔を上げた彼女は周囲の隊員達をぐるりと見渡して、今し方告げられたものであろう、新たな任務を俺達に伝えた。

「諸君、救援だ！　陸上ウイツチと戦車・歩兵部隊の混成旅団が一つ、敵中に孤立しつつある。我々は前線を迂回し敵右翼を奇襲、敵の隙を生み出して地上部隊が脱出するための切っ掛けを作る！」

じやこん、と一斉にリロードの音が響く。俺を含めた隊員達が同時に弾薬の補充を行つたがためのそれは、ある種の奇妙なシンフォニーを奏でた。

バルクホルンの言葉には、人々を奮い立たせる力のようなものがあ

る。現実的に考えればエースの魅力で、ゲーム的に考えれば隊長と同じような鼓舞スキルか何かを持っているということなのだろう、隊長に鼓舞された時と同じように俺の心も沸き立っている。

「目標、敵右翼！ 進路十時方向！ ——進めえツ!!」

そう叫ぶと同時に、バルクホルンが右手を振り下ろす。その合図を見るが早いか、俺達は目的の方向へと飛び出していた。

ブルル、というマシンの雄叫びを聞きながら、バルクホルン隊の人々と共に飛んでゆく。先程の脱出の時の気迫と然程の違いも感じられない、未だに士気を高く保ち続いている彼女達は、まるで獰猛な狼の群れのような雰囲気を醸し出している。

途中、先頭を行くバルクホルンの後姿をじっと見つめる。引き締まりつつもぷつくりと膨らんだ、ハイレグのような下半身の衣服のせいで半分以上が露わになっている彼女の尻を眺めているわけではなく、ただ彼女の普段の姿——あくまでもアニメ等で見た知識であり、そもそも時間軸が異なるために知識としては役に立たない可能性もあるが——と今の姿をふと比較して、何故こんな絵に描いたような優秀な軍人があんなはつちやけキヤラになるのだろうかと、そんな疑問をつい抱いた。

展開の都合上と言つてしまえばそれまでだが、何とも言い難い気持ちを覚える。良く言えば彼女はストライクウェイツチーズの面々に気を許したということだろうし、別にそれが悪いことだとも言わないが、やはりこうした彼女のカッコいい面を実際目にすると何ともこう、残念な気分になつた。

「……ね、ね。ちょっと、ヴエラちゃん」

ふと、編隊で左隣にいる少女、先程のブラウン准尉が声をかけてきた。何ですか、と軽く応答しながら視線を向けると、何故か彼女は少し面白がるような表情を浮かべていて。銃を抱えていない方の手で口元を多いながら、彼女はクリスリと笑いを漏らしていた。

「さつきからさー、ずっとバルクホルン中尉のこと見てるけど……。何々、もしかしてそういうこと？ ん？」

「は……？」

「もー、ごまかしちやつて。……中尉のこと、憧れちやつたりしたんじゃないの？」

そう言つて、彼女はいやんいやんと体をくねらせる。

はて、憧れるとは、と一瞬思考を巡らせて。それが言葉通り以外の意味を持つてゐるのだと気が付いて、思わず一つ溜息を吐いた。

「……あのですね。言つておきますけど、そういうのじやありませんから。一人のウィツチとして、誰からも認められるエースというものが気になつただけです」

「えー？ またまた、恥ずかしがらなくたつていいじゃない」

「でーすーかーらー。あの、そもそも、准尉は戦闘中に——」

何を話してゐるんですか、と。そう続けようとした言葉は、バルクホルンの言葉によつて遮られた。どうやら、いつの間にか目的地への経由地、味方右翼の前線より少し離れた個所まで行き着いていたらしい。武器弾薬の再確認の命令と、今から行う突撃による奇襲についての短い話を耳にして、ブラウンはさつさと俺との話を切り上げた。

俺もまた、注意を彼女からバルクホルンへと向け直す。二人一組のロツテに分かれて散開、敵の対空防御を分散させつつ凹として敵戦力の注意を惹き、その隙に地上戦力が反撃を行いつつ後退する。そんな簡単な段取りを俺達に説明した後、バルクホルンは隊員達をそれぞれ二人組に分けていった。

分ける、とは言つてもそこまで大層なものではない。所詮は中隊規模、両手で足りるほどの数であるために、数十も数えないうちに全員を振り分け終わつていた。そして当然、俺は一緒に派遣されてきたブラウン准尉とロツテに——と、推測していたのだ、が。

「よし……。ではよろしく頼むぞ、軍曹」

何故だろうか、今の俺の隣にはバルクホルンがいて。ゲーム的ないベントか、それとも他に何か理由があるのか、ロツテの相手は彼女に決まつっていた。

……少し離れた場所から感じる、生暖かい視線はブラウン准尉のものだろうか。どうやら彼女との間には、根本的な誤解が一つ生じてしまつているようである。

「お前とロツテを組むのは初めてだが……。なに、心配するな。シリードを張つていればそうそう死にはしないし、私もカバーする。お前は私の背中を守ってくれ、信頼しているぞ」

「……Jawohl.」

確かに、バルクホルンは凜々しい。宝塚のような中性的なものではない、その在り方からくる騎士のような雰囲気と魅力には心惹かれるものがあるし、雑誌のモデルでも十分に務まるほどの美少女でもある。恋愛感情の有無は別として、特別な事情がない限りは基本的に好意を抱かれるべき人物だろう。

とは言つても、俺がそういう意味で彼女のことを探しているかといえば、そんなことはないわけで。そもそもここはゲームの中であり、住んでいる世界も次元も違う人間を本気で好きになれるはずもない。それはエーリカや隊長、それこそエイラに対してだつて同じことである。いくらこのゲームがリアルだとはいえ、現実とゲームの分別ぐらいはついている。それくらいの理性は俺だつて持つっていた。ブラウン准尉のそれは、正真正銘只の邪推でしかないのだ。

なのに、だというのに、どうしてこうなつた。バルクホルンルートのフラグでも踏んだのか、もしくは今まさに踏んでいる最中なのか、細かいことは分からぬがとにかくこの勘違いは早めに解いておきたい。……そのためにも、まあ、まずは。

「さて、諸君、武器を構えろ。——突撃イ!!」

この戦いを一刻も早く切り抜けねばならぬ、と。バルクホルンが号令をかけて敵に突っ込んだのを目にして、やる気を新たにしながら俺も続いていった。

???

状況は、依然として人類側の有利だった。圧倒的な差があるわけではない。が、このまま続ければネウロイ側はジリ貧になるだけだと分かつてしまふ程度には戦況が安定しつつある。

地上攻撃ウイツチによる急降下攻撃は着実に敵の地上戦力を削いでゆき、戦車と陸上ウイツチの混成である地上戦力は空戦ウイツチのフォローを受けながら戦線を維持、むしろ若干押しつつあるという大健闘を見せている。さらに空の戦いなどは既に趨勢が決してしまつていて、バルクホルンを始めとした航空ウイツチ達の奮闘の結果、カールスラント軍は制空権の確保にほぼ成功していた。

空にいるネウロイの数は、見た限りでも当初の四分の一を下回っている。これなら後は、徐々に相手を磨り潰していくだけで事が済む。地上から空の状況を眺めながら、エーリカ・ハルトマンは内心でそう予想を立てた。

「……よーし！ 行けそこだ、やつちやえトウルーデ！」

双眼鏡を片手に、彼女は友人達の活躍を地上から応援する。エンジンの不調により墜落されかけた彼女は、救助された後も戦線に復帰することはできなかつた。体に大きな異常があつたわけではない。現在進行形で戦闘が繰り広げられている戦場では代わりとなるストライカーユニットが用意できなかつた、という単純な理由である。

元々彼女が履いていたユニットは、地上部隊に随行していた整備員の話ではすぐには使い物にならないということだつた。基地に帰つて代わりの部品だのを用意して、ようやく直るかという具合であるらしい。

結果として、今の彼女は空には上がれなかつた。万一がないよう怪我人と一緒に部隊後方へと回された彼女は、戦友達に声援を送ることしかできなかつたのだ。

「ヴエラー！ 十時方向敵機！ ……いやつた、ナイスクルフ！」

彼女の視線の先で、一人の少女が新たに一体の小型ネウロイを撃墜していた。狙撃能力に優れているその少女は、味方のアシストもあつ

て先程から随分と撃墜スコアを稼いでいる。

地上部隊の援護。制空権の確保。今はバルクホルン隊に混ざつて行動しているらしい少女は、便利屋のごとく扱われているバルクホルン隊に従つて様々な仕事をこなしていた。

フランツィスカ・ヴエラ。エーリカの新しい友人である彼女は、新米としては破格の活躍を見せていて。初めての任務からこれまで、彼女が撃墜したネウロイの数は四体。今回の戦闘ではエーリカが見ていた限りでも五体以上の戦果を上げているから、彼女はこの戦いによつてエースの仲間入りを果たすことになることは間違いない。

先程はその彼女に命を救われたこともあり、エーリカは純粋な好意を向けて彼女の活躍を応援している。無邪気な様子で喜びを露わにしている彼女の姿は、傍から見れば普通の年頃の少女のように思えた。

そんなエーリカとは反対に、憎々しげな視線を空に向けている少女もいる。腕に包帯を巻き、積み上げられた土嚢に背を任せて胡坐をかいているその少女は、エーリカの後から後方に送られてきた怪我人のうちの一人だつた。

地上攻撃ウイツチとして前線に投入された彼女は、地上からの対空砲火を避けきれずに怪我を負つてしまつて。戦闘の継続が難しいと判断された彼女は離脱を余儀なくされ、後方での治療を受けた後はその場で待機することを命じられていた。

怪我が自分の不手際であることは彼女自身も理解しているが、だからといつてただ待つことしかできない今の状況に納得していたわけでもなかつた。彼女と同じ地上攻撃ウイツチ達は前線で戦果を挙げ続け、航空ウイツチ達もまた活躍を見せていているのにもかかわらず、自分は何もできない。そんな状況に口惜しさと不甲斐なさを感じた彼女は、半ば八つ当たりのようになづいた。

「ふん……。エースが上がりもせずに高みの見物してるんじや、航空ウイツチなんていうのもたかが知れるわね」

側にいたエーリカに、わざと聞こえるように。エースとして名も顔も知られつつあつた航空ウイツチの一人に対して、少女は喧嘩を売

る。二人の間に面識はない。名前も知らない人間からいきなり毒を吐かれて、エーリカがまず感じたのは怒りではなく戸惑いである。少女に視線を向けたエーリカは、彼女の好意的とは言えない表情を見て困ったように眉を下げた。

エーリカはトップエースの一人として、これまでにも他人から嫉妬や悪意の類を向けられたことはあつた。同僚のウイツチや男の一般兵士、上官である佐官。いくら愛想良く振る舞おうが、そういうふた存在からの妬み辛みは完全には避けられないことは彼女自身も理解している。

ただ、そういうふたものは基本的には相手も隠すものである。欧洲からの大規模な撤退戦の真っ最中という味方内で争っている余裕もない状況だということもあり、少なくともエーリカが知る限りでは、今 のパ・ド・カレー基地内で何らかの対立が明確になつてているというようなことはなかつた。

故にこういつた手合い、素直に悪意を剥き出しにしてくる人間の対処に関して、エーリカは慣れているわけではなかつた。目の前の明らかに自分を敵視している人物に対し、有効な対処法を持たなかつたのである。医者の娘として生まれた彼女は擦れた性格をしていることもなく、実に人の良い性格をしていた。

言つてしまえば、根っここのところでエーリカは誠実だった。無視をするという選択も憚つた彼女は、敵意を向けてくる彼女に何らかの反応を返さざるを得なかつたのである。

「……えー、つと。私に何か、用？」

こてん、と。軽く首を傾げて、エーリカは少女に問い合わせた。自分の容姿がそれなりのものであると自覚している彼女は、ニコリと笑つて少々の愛想を浮かべる。

が、少女はそれに笑顔を返すこともなく、ただ憎らしげな視線だけを向けて。少し強めに鼻を一つ鳴らすと、エーリカに対しての悪口を吐き捨てた。

「別に？　ただ、皆は上で奮戦しているのに貴方はお気楽でいいわねって、そう思つただけだから。気にしないで貴方は呑気にはらへら

してればいいじゃない」

そう言つて、少女は嘲るように笑う。その明らかに見下した顔を見たエーリカは口の端を引きつらせると、頭をもたげだした怒りを何か内心に抑え込んだ。

繰り返すが、二人の間に面識はない。少女に何かをした覚えもエーリカにはないし、逆にされた覚えもない。主觀では何の因縁もない相手に毒を吐かれて平静でいられるような聖人ではない以上、彼女がイラつきを覚えるのはどうしようもないことである。

ただ、それをいきなり表に出さない程度の分別はエーリカも持っていた。いくら相手が喧嘩腰ではあっても、まずはコミュニケーションを試みるべきである。当然のマナーとして両親に教えられたことを実践するべく、彼女は少女との会話を続けた。

「はは……。しようがないじやん、予備のユニットが用意できないんだからさ。何もできないんなら応援だけでもしたいっていうのは、何かおかしい？」

「貴方がそれでいいならそれでいいんじゃないの？　ま、仮にもエースだの何だのって持ち上げられてる人がすぐに落とされたなんて醜態晒して、その上で落ち込みもせずへらへらしてることを気にしないんならの話だけど」

「……いや、さ。勝手に私のことを知った気になられても困るんだけどなあ」

「だつたらそこで黙つてしまふかえつてなさいよ。煩いのよ貴方、陸相手じや凶にしかならない航空ウイッチのくせに」

航空ウイッチ。その単語に強いアクセントを置いた少女の言葉は、酷く刺々しいものだつた。

それを聞いて初めて、エーリカは少女が地上攻撃を主とするウイッチであることに気が付いた。彼女と同じ少尉の制服に身を包んでいる少女が着けている部隊章は、元は新機体の試験運用を行つていたある試験部隊のものである。第2教導航空団に所属するその部隊は地上攻撃に長けたものを集めていることでも知られていて、そういうた噂に無頓着な彼女の耳にも入つっていた程だつた。

そんな部隊の一員らしい少女が、今こうして敵意を露わにしている。それを知ったエーリカが個人的な確執以外に原因を求めるまで、そう時間はかからなかつた。

対地用の爆撃機と、対空用の戦闘機。ウイットという兵種の中でも空を飛ぶ者達の運用は飛行機のそれを使用しているため、存在を大別すればその二種に分かれる。

戦略や戦術の上で考えれば、どちらに差があるという話は出来ない。どちらにも長所短所、得手不得手があり、投入されるべき状況も違うものである。同じ定規で測るものではない以上、戦力上ではどちらが優れているという話にはなりえなかつた。エーリカも地上攻撃を役割とするウイット達に対して偏見などは持つてはいないし、彼女達への優位性などを感じたこともなかつた。

実際、両者の間で対立が起きているという話をエーリカは今まで聞いたことがなかつた。どちらもカールスラントにとつては欠かせぬ大事な戦力で、昇進や待遇においての差も少なくとも明確なものとはなつていいない。

そこに原因があるという確証があるわけではなかつた。ただ、ここまで敵意を向けられる心当たりがエーリカにはないことも事実である。航空ウイットだから、地上攻撃ウイットだから。自分が知らない間に火種が生まれていたことを知つて、彼女は嫌な予感を抱かざるを得なかつた。

(……何て言うか、なあ)

ふと、エーリカは出撃前の様子を思い出した。演説を行うためにわざわざ姿を現した、とある女性将校。第一次大戦におけるエースの人であり、地上攻撃を偏重していると専らの噂である彼女についての噂を考えれば、どうにも穏やかではない背景が容易に推測できる。

エーリカは然程コミュニケーションに熱心な人物ではない。権力や派閥といったものには無頓着であり、とある人物の影響によつて最近は軍規にも大分だらしなくなつてきてている。とは言つても根が眞面目である彼女は、立ち込めつつある暗雲を見ないふりができるほどに無責任ではなかつた。

エーリカは馬鹿ではない。以前学校で受けた歴史の授業で得た知識も、ちゃんと覚えている。権力争いが原因で滅びた国家が歴史上にはいくらでもあることを、彼女はよくよく理解していた。

ミーナに相談してみるべきか、と。友人の中で一番階級が高い人物のことをエーリカが思い浮かべた瞬間、戦場は動きを見せる。

銃声や爆音に混ざつて、歓声がエーリカの耳に届いた。それは初めは小さなもののだつたが、やがて戦場を覆い尽くすほどに大きなものとなっていく。何があつたのかと急いで双眼鏡を覗いた彼女の視界に映つたのは、上空のウイッヂ達が一斉に前進していく光景で。よくよく全体を確かめてみれば、どうやらネウロイが後退を始めているらしいということが分かつた。

それに合わせて、軍全体に追撃命令が出たらしい。空だけではなく陸の戦力もまた動き出していて、エーリカが覗いた双眼鏡の向こうでは戦車隊が意気揚々と進撃する姿があつた。

状況が、完全に人類側に傾いたのである。カールスラントが大半の戦力をチップにした賭けに見事勝利したことを知ると、エーリカは内心で安堵の溜息を吐いた。

そしてまた、少女も勝利を喜ぶ様子を露わにしていて。勢い良く立ち上がつた彼女は、追い打ちとばかりに急降下爆撃を仕掛け続ける地上攻撃隊のウイッヂに向けて声援を送つていた。

「やつた……！ やつた、やつたわ皆！ 勝利万歳ッ！ 地上攻撃
ウイッヂ万歳ッ！ 少将閣下万歳ッ！」

満面の笑みを浮かべた少女は、怪我をしていない方の手を高々に天へと掲げた。肘を張り、手首を少し下に曲げ、背筋を伸ばした直立姿勢で手を斜め前に突き出すジエスチャ。誰でもすぐに覚えられるほどには単純なその行為を目端で捉えたエーリカは、自身の勘が何かを訴えかけてくるのを感じる。

別に、そのジエスチャー 자체は怪しいものではない。エーリカが以前に読んだ雑誌では、ロマニヤ空軍のエースウイッヂが似たようなポーズで表紙を飾つていたこともある。彼女は知らないことだが、それはローマ帝国の頃よりイタリア諸国に伝わる伝統の敬礼方式だつ

た。

エーリカが気になつたのは、ロマーニヤとは全く関係ないはずのカールスラントの軍人が——それも兵種による対立意識を持つているらしき少女がそれを行つていたことである。兵種の対立。ローマ式敬礼。関連性もないばらばらの情報ではあるが、だからこそそれが結びついた現状は奇妙な不安感を抱かせた。

カールスラントは勝利した。歐州からの撤退を完了させるための一決戦に、間違ひなく勝利したのだ。

それでも、エーリカの気分は完全には晴れなかつた。彼女は双眼鏡から目を離して、チラリと横を見る。地上攻撃ウイツチである少女の顔は熱狂に染まつていて、その表情には誇らしさと喜びが見て取れた。“地上攻撃ウイツチの”活躍によつて勝利した事実を、少女は非常に喜んでいた。

(……呑氣なのは、どつちなんだかねえ)

ふと、エーリカは内心で一人ごちた。ネウロイとの生存を賭けた戦争の真つ最中で、全体を見れば人類側が有利とはお世辞にも言えないようなこの現状。そんな状況にもかかわらず、どうやら人類にはある程度の余裕が残つているようである。

それが幸運だつたのか、不幸だつたのか。一兵士に過ぎないエーリカは、その問い合わせる術を持たなかつた。

???

世界に覇を唱える海洋国家、ブリタニア連邦。その首都であるロンドンのダウニング街十番地の住人の機嫌は、朝っぱらから順調に降下の一途を辿っていた。

朝。使用人に淹れさせた紅茶を啜り、新聞各紙の朝刊に目を通すと、いう日課を行つてゐる男の表情は苦い。まるでブルドックのようだと評されるほどに迫力のある顔立ちは、外国人がブリタニア特有のとんでも料理を口にした時のように歪んでいた。

男は政治家である。かつて保守党で『デイズレーリの後継者』と呼ばれた男を父を持ち、一時期自由党に所属を移してはいたものの、自身も保守党の一員としてその敏腕を振るつていた。保守党が自由党との連立によつて政権与党の座を保持している今、彼の立場もまた重いものとなつてゐる。

男は有能な人物である。今までに九つの大臣職を経験し、今も国防担当閣外大臣の任に就いている彼の名は国民達にも受けがいい。今代の政治家の名を一つ挙げよと問われれば、多くは彼を挙げるだろう。彼の前任者が晩節を汚すような形で職務を退いたこともあり、男の評判は相対的に高くなつてゐる。

だが、男以外に政治家がないということはない。1688年の名誉革命以降、二百年以上もの間民主政治を続けてきたこの国である。以前は保守党と自由党、今では保守党と労働党が凌ぎを巡る政党政治の中に身を置いていたこの国は、他のどの国よりも政治家の層が厚かつた。

それでいてなお、今この時、ブリタニアが直面している最大の国難に立ち向かえるのはこの男しかいるまい——それは男自身の自負でもあつたし、彼を支持する国民の総意だつた。事実、ドーザーを挟んだ向かい側が敵の手に落ちてしまつた今、ブリタニアが未だ政治的な安定を保ててゐるのはこの男の強烈なカリスマとリーダーシップのお蔭である。

そして、だからこそ。そんな男に反発する勢力が存在していること

は、民主主義の国としてある種当然のことだった。

「クソッタレめ……」

ボソリ、と。とある新聞の一面を目にした男は、忌々しげに呟いた。それはブリタニアの中でも最も著名な新聞の一つであり、1896年に創刊された最古のタブロイド紙である。新聞王として名高いロザメア卿は、この大衆向け日刊紙を世に送り出したことによつてその栄光を掴んだと言つても過言ではない。

二分の一ペニー——他の新聞の半分程度しかないその価格設定は、多数の庶民を購買層に取り込んだ。1926年には発行部数が二百万部を越え、最早ただの新聞程度と見くびることはできないほどの影響力を有している。ブリタニアが民主主義を掲げている以上、新聞が民意を媒体として政府に牙を向ける可能性は十分にあり得ることなのだ。

そんな新聞が一面で大きな見出しをつけていたのは、先日の欧州大陸での出来事だつた。

欧洲からの撤退作戦を遂行中の神聖カールスラント帝国が行つた、ネウロイに対する反攻戦。決して大勢に影響を与えるものではないが、それでも彼らがその戦いにおいて勝利を掴んだという事実は、他の欧洲各国でも大きな反響を呼んでいる。

男の不機嫌の原因は、少なくとも今現在においてはそれではない。以前のカールスラントは第二次産業革命による産業と経済の発達もあり、産業国家としての自負も持つブリタニアとの関係が悪化しかけた時期もあつたが、二度の大戦により本国の産業基盤がほぼ破壊された今となつては最早ブリタニアの敵ではなくなつている。潜在的な感情はともかくとして、表面的には現在は両国関係は良好と言つてもいいだろう。

友邦の一つが戦果を挙げて妬むほど男は狭量ではなかつたし、今のブリタニアに余裕がないわけでもなかつた。口だけの賛辞なら幾らでも言つてやろう、と思つてゐる程度にはこの大戦果を認めてゐる。男が問題にしてゐるのはその事実 자체ではなく、報道の内容である。記事の見出しこそ特筆すべきものではないが、よくよく中身を見

てみれば、その中身は殆どがウイッチ賛美に費やされていた。

いかにこの戦闘でウイッチが活躍したか、いかにウイッチの集中運用が素晴らしい戦術であるか、いかにウイッチがネウロイの天敵足り得るか、エトセトラエトセトラ。さすが新聞王の新聞と言うべきだろうか、読んだ人間が思わず乗せられてしまうほどの文章で情報を伝えている。

これが民衆からの受けを狙つた三流新聞によるものならば、男も取るに足らないものとして切つて捨てていた。しかしこれがこの有名大衆向け日刊紙によるものである以上、その裏に潜む新聞王の意思を勘ぐらざるを得なかつた。

新聞王、ロザメア卿。彼はメディア業界に君臨する王として知られていると同時に、政治家にとつてはとある男性の有力なシンパの一人としても知られていた。

所属を保守党、労働党と移し、やがては自分を党首とした新党を立ち上げた男性。かつてマクドナルド内閣においてランカスター公領相を務めた彼は、第六代の準男爵というれつきとした貴族でもある。

貴族であるが故に豊富なコネクションを持ち、また人の上に立つカリスマ性と能力も持ち合わせていたその男性が立ち上げた新党は、今となつては政権与党でも無視するのは危ないほどの規模にまで成長している。ブリタニアウイッチ支持者連合——通称『BUF』の隆盛は、多くの既存の政治家達にはとても歓迎できるものではなかつた。

だがこの新聞は、いやかの新聞王は、どうやらその組織の現状に甘んじていらないらしい。ウイッチ優先主義——すなわちウイッチの適正がある女子に対する徴兵制度の厳格化、それと付随してのウイッチの社会的な地位、及びに軍内部における影響力の向上、現行の福利厚生制度からのウイッチ経験者やその家族を優先させるものへの改革、そういった国家を挙げてのウイッチ支援を主張として掲げるBUFの指示を広げるべく、こうした過度なウイッチ賛美を行つているのだろう。少なくとも男はそう考えたし、新聞を読んだ他の政治家達もう思つていた。

そして、この試みが失敗に終わる保証などない。むしろ新聞の民衆

への浸透具合を考えれば万一一の可能性も捨てきれない、数年後の選挙で政権与党が変わる、という事態も十分に起こりうる。そうなれば多くの政治家が危惧する最悪の未来——ウィツチ優先の影響を受けた女尊男卑の風潮、そしてその余波を受けた極端な差別意識が生まれる國家へと変貌していく可能性も、決してゼロではないのだ。

勿論それは最悪の想像であり、実際与党が変わつてもそこまでの事態にはならないだろう。しかし男は政治家であり、ブリタニアという国を愛する一人の男でもある。祖国に悪い影響を及ぼす可能性が少しもあるならば、それを懸念するのは当たり前のことだ。

男は新聞を読み終えた後、部屋を訪れた秘書官に命じて車の用意をさせた。元々入っていた用事をこなすためではあつたが、今の男の目的は本来のそれから多少変わっている。

空軍という今の大英帝国の国防を左右する組織を統括する男性との会談は、本来は彼が以前から持ち込んできた案件に関する協議のために設けられたものである。その提案自体は悪いものではなかつたし、大英帝国の国益が損なわれない範囲でなら前向きに検討してやろうと男も考えてはいた。が、現状を考えた場合、その提案をそのまま通してしまうことは不味い。軍事的には正解なのかもしれないが、政治的に見れば間違いだ。

朝一番で会議の予定を入れるという相手側の意気込みは理解しているし、この提案が通つた場合のメリットも理解しているのだが、それでも男はこの提案を蹴るつもりだつた。ただし完全にではなく、時期尚早として提案を暫く寝かせる形で。今の男に出来る最低限の讓歩は、その程度のラインに過ぎなかつた。

結果としては、その譲歩さえ蹴り飛ばさざるを得なくなつたわけだが。

「……閣下。急ぎ、お伝えしたいことが」

身支度を終え、今まさに外へ出ようとしていた時のこと。秘書官が真剣な表情でそう耳打ちをしてきたものだから、男は思わず足を止めた。何だ、と視線で促してみると、秘書官は無言で一枚の写真を男に手渡してくる。見ろ、ということなのだろう。訝しみながらも男はそ

の写真に視線を落とすと、その表情は一瞬で無感情なものへと変化した。

無理はない。これから会おうと思っていた男性が、その写真に写つていれば。その彼がBUFの党首と二人きりで談笑している姿を収めた写真は、男の思考を一瞬停止させるには十分過ぎた。

写真を秘書官に返すと、男は踵を返して自室へと向かつた。わざわざ着た上着を脱ぐのも煩わしいのか、身支度をしたままの格好で自室の電話を乱暴に引っ掴むと、電話口に出た交換手を八つ当たり気味に怒鳴りつけながらとある男性へと電話を回させた。

数十秒ほどの後、目的の男性の声が電話の受話器から聞こえてきた。男が中身のない挨拶もそこここに本題を切り出すと、相手の男性は嬉しさ半分、喜び半分といつた様子の声でそれに答える。男性の返事が前向きであることを確かめた男は、後は直接話すと言い残すと即座に電話を切った。

今、男は自分が薄汚い言葉を吐いていないことを自分で褒めてやりたかった。彼は自分が激情家であることを理解している。血筋は間違いなく貴族の生まれではあるが、性格は英國貴族のそれではないことは自身が理解していたし、周知の事実でもあった。

内心は怒り狂つていても、とある男性の向けての呪詛と罵倒が脳内に渦巻いていても、それを表に出すことは何とか抑えている。深呼吸を数回、使用人に持つてこさせた水を飲むこと数杯。ようやく冷静さを取り戻した彼は、部屋の外で待機していた秘書官へと視線を向ける。そして出来る限り平坦な声で、何事もないと自分にも言い聞かせるかの如く、彼は命令を口にした。

「すまんが、急用だ。朝の予定はキャンセルしてくれたまえ」

その命を聞くが早いか、秘書官は一礼して何処かへと去つていった。おそらく電話で会談のキャンセルを相手方に伝えるのだろう、その際の相手側からの文句の聞き流しと宥め賺しを秘書官に押し付けた男は軽く衣服を整え直して、再び外へと向かつた。

玄関先には既に車が用意されていて、男がそれに乗り込むとすぐに動き出した。行き先は既に運転手に伝えられていたし、彼も行き先是

変える必要がないため素直に車に揺られていた。

ロンドンは霧の都とも呼ばれる。石炭を燃やした後の煙や煤が霧に混じつて生じるスマッグがよく発生するということもあるし、もつと単純に冬の朝方に霧がよく出るということもある。ただ今季節は冬ではなかつたし、昨晩雨が降つたせいだろうか、スマッグはすっかり洗い流されてしまつたようだつた。車の窓から見るロンドンの風景は、今日は一際綺麗に見えていた。

普段なら感想の一つも抱くかもしれないが、今の男にはロンドンという街が男を皮肉つてゐる様にも感じられてしまう。ここ数年で一番機嫌が悪くなつてゐる彼に、風景を素直に楽しむほどの余裕はない。舌打ちを一つ打ち、目的地へと急ぐように運転手へと伝えた。

「——きやつ!」

が、それが良くなかつたのだろう。男の命令を素直に聞いた運転手はアクセルをさらに踏み込んだが、前を横切ろうとする一人の少女に気が付くのが少し遅れてしまつた。

慌てて運転手がブレーキを踏み抜き、車が急停車する。幸い轢いてしまう前に停車させることができたが、慣性の法則に従つて男の体は前へと軽く投げ出されることになる。突然の事態に驚いて怒鳴り声を上げかけた彼は、車の前で尻餅をついている少女の姿を見るとその言葉を飲み込んだ。

じろり。そんな擬音が聞こえるような視線を運転手に向けて、男は何が起きたのかを簡潔に問い合わせた。震える声で運転手がありのままを答えると、彼は深い溜息を一つ。未だに運転席で固まつてゐる運転手を横目に、さつさと車から降りて少女の元へと歩み寄る。

その少女は年若く、十代の半ばかそこらの容貌をしていた。両手に抱えていたらしい袋は地面に投げ出され、朝食にするつもりだつたのか、中からは幾つものパンが飛び出している。目につくのはそれくらいで、怪我らしい怪我はしていない。轢いてはいないと運転手から聞いてはいたが、それを確かめた男は内心で安堵の息を吐くと、地面に足を投げ出したままの少女に手を差し伸べた。

「立てるかね?」

「え？ ……あ、はい」

少女は未だに事態を受け止めきれていないのか、驚きの表情を浮かべたままで男の手を掴む。そして男の力を借りて立ち上ると、服に付いた汚れを数度払つた。その仕草に痛みを感じさせるものではなく、どうやら本当に無事らしい。怪我はないかと男が念のために尋ねても、少女ははつきりと首を横に振つていた。

「すまないね。運転手の不注意だ、あ奴に代わつて私が謝ろう」

「い、いえ、別に怪我もしてませんし……。その、周りをよく見てなかつたのは、私も同じなので、お気になさらずとも……！」

男が謝罪すると、少女の方も慌てて謝つてきた。男が見る限りそれは演技ではない、本心からのものである。つまり少女は自分が被害者であるにも関わらず男を責めることなく、逆に自分の方にも非があると本気で言つてのけたのだ。何ともお人好しな人間がいるものだと、彼は一瞬心の底からの驚きを覚えた。

ただ、いくら少女の側がそう言つても、はいそうですかと男側は納得するわけにはいかない。客観的には間違いなく非は男側の方にあり、この事態が表に出るだけならまだしも、被害者側に何の補償もしないないと知られてしまえば男の政治生命に関わる可能性もある。幸い周囲に人影はなく、見た限りでは誰かに見られたということもなさそうだが、念を入れ過ぎて困ることはない。

しかしそんな事情はおくびにも出さず、男はあくまでも紳士的な態度で以て少女に接した。今までの機嫌の悪さを全くの赤の他人、それも迷惑をかけた人間に對して見せるわけにはいかないと考えられるほどの分別は彼にある。彼は困ったような表情を浮かべて、少女に對して“お願ひ”をした。

「いやいや、それではこちらの気が取まらんのだ……。よければ詫びをさせてくれないか、お嬢さん」

「詫び、つて、いやいやいや。本当に大丈夫ですか……」

「いや、頼む。……君の朝食も台無しにしてしまつたようだし、な」

そう言つて、男は地べたに転がつたままの袋とパンに視線を向ける。あとどれほどの量が袋の中に残つているのかは分からぬが、外

に放り出されたパンの数を考えればあまり期待できない程度しか残つていなかつた。そのことによつやく氣付いたのか、足元の慘状を見た少女は慌ててパンを拾い集めた。

が、ジャムやバターの代わりに泥が塗られたパンなど誰も食べられないし、食べたくもない。朝食の殆どが駄目になつてしまつた少女ははつきりと肩を落として、落ち込んだ様子を見せてゐる。

「……君。もしよければ、朝食を奢らせてもらうが」

「だ、大丈夫です。私、ウイツチの卵ですから、これくらいでへこたれてちや……」

明らかにやせ我慢をしている類の笑みを浮かべて、少女はそう強がつた。それを聞いた男は彼女の頑固さを感じ取ると同時に、彼女の言葉の中に出できたとある単語に反応を見せる。

ウイツチの、卵。その言葉をそのままに捉えるなら正式にウイツチとして配属される前の学生、すなわちウイツチ養成校の学生ということになる。そういうえばロンドン近郊にも一校存在していただろうかと、自分と直接の縁はない情報を男は記憶から攫い出していた。

思わず先程の事態とその原因を思い出して怒りを再燃させかけたが、男は何とかそれを我慢した。目の前の少女がウイツチの卵ではあつても、先程のそれは彼女にはおそらく関係ない。ここで彼女に当たるのは完全な筋違いだつたし、彼もそのような醜態を好んで晒すつもりはなかつた。

「ウイツチの卵……。ということは、君、訓練生か」

「え……。あ、はい、その通りです。ロンドン近郊の養成校で教育を受けています」

ウイツチの卵は軍人の卵である。男の問いかけに対し、少女は綺麗な直立と敬礼で答えた。ロンドンのウイツチ養成校が、一部の声だけは大きい人々達が唱えてゐる空論——組織的・戦術的なウイツチの偏重主義、それによる旧来の軍人教育を軽視する意見に惑わされるようなこともなく、ちゃんと軍人としての基本も叩き込んでいることが見て取れる姿である。

男は、政治家になる前は軍人だつた。幾つかの戦争に従軍して活躍

も挙げた彼にとつて、少女のその姿は好ましいものであり、彼の機嫌を少しだけ直すことも繫がつた。彼の持論では、ウイツチはウイツチである前に軍人なのだ。

それから話を交わしていくと、どうやら少女は一日の休暇を貰つたようで、ロンドン生まれだつたこともあって朝から街にやつて来ていたらしい。子供の頃によく食べていたパンの味が懐かしくなつてパン屋で幾つかのパンを購入し、ほくほく顔で近くの公園へと向かつていた所で男の車に轢かれそうになつた、ということだつた。

それに関する話題は本当に気にしていらないらしく、頑なに詫びを受け取ろうとしない少女に対してもが何とか朝食の奢りと困つた時には相談を受け付けることを認めさせた、という傍から見れば何とも不可思議な結論に至つていた。本人達がそれで納得していることとはいえ、その話を誰かが聞けば何とも言い難い表情をするに違ひない。とは言つても少女にこの話を広める意思はなく、男に自分の醜聞にもなる話を広めるつもりなどないのでから、その仮定は然程意味のないものではあらうが。

男が先程先方と約束した時間までには、まだ幾らかの余裕が残されていた。流石に食事に付き合うだけの時間はないが、少女を店に送つていくだけの余裕はある。パンを買つたという店がこの近くだつたこともあり、彼はその店へと彼女を連れていつた。

送る間に交わした会話は、男にとつては久しぶりに純粹に楽しめるものだつた。政治の要素のない、発言の裏を読む必要のない会話は本当に気楽なもので、年が半世紀近く離れている少女の相手はある種の新鮮さもあつた。

そして何より、少女はウイツチである。あくまでも遠まわしにではあるが、現状の政治や戦況についてを尋ねた男はウイツチの視点での話を聞くことができた。現場の声をることは絶対不可欠ではないが、重要なことである。好々爺とした笑みを浮かべる裏で、彼は幾つの情報整理していた。

一方、少女も会話の裏であることを考えていた。別に大したことではない。ただし、男の顔に見覚えがあるような——そんなちよつと

した既視感が、先程から彼女の脳裏に浮かんだままのが原因である。

顔見知りではなかつた。少女が通うウイツチ養成校は全寮制であり、その中では男性との接触は殆どない。養成校に通う前に眼前の男と親交があつた記憶もなく、彼女は内心で首を捻るばかりだつた。数分後。無事に店へと少女を送り届けた男は、連絡先を書いたメモとパンの代金を渡すとすぐに何処かへと向かつていつた。その行き先は彼女は知らないし、あまり興味もない。

先程潜つたばかりの扉を再び開くと、少女は店へと入つていつて。「……あれ？」

ふと、店の主人が読んでいた新聞に目を奪われた。

それは何の変哲もない新聞であり、目についた記事の内容もそこまで驚くべきものではない。少女が驚いたのは新聞の一面、そのメイン記事によつて隅に追いやられたとある記事の写真に写る人物である。ブルドックを思い起こさせる風貌をした人間が、議会で演説をしている写真。普段なら軽くスルーしてしまうような政治の一幕を写したもの写真は、今の少女にとつては衝撃的な事実を告げていた。

記事の見出しへ『政府、追加予算案を提出』。写真の人間は政府の上班であり、今代のブリタニア連邦首相の座に座つている男だつた。

今まで自分と話していた人間が、いつたい誰であつたのかを知つて。リネット・ビショップは、その場で思わず腰を抜かした。

インターミッション1

すう、と息を少しだけ吸つて、呼吸を止める。利き目である右目だけを開け、Kar98kの銃口をしつかりと目標に向かた。

目標との距離は、目算で400メートル程。静止目標なら容易い距離だが、残念なことに今回は上下左右に動き回るものが相手である。相手が移動するであろう方向を常に予測しながら銃口を調整し続けるというのは、システムによるアシストがあつても結構な労力を要求されるものだ。

さらに言えば、今回の目標は普段相手にしている小型ネウロイよりも一回り小さいほどの大きさしかない。距離のことを考えれば最低限のミスも許されない、非常に難しいスナイピングを要求されている。——難しいだけであつて、今の自分には決して不可能な状況ではないのだが。

力チリ、と。引き金に掛けた指に力を入れた瞬間、炸裂音と共に銃弾が放たれた。秒間に760メートルという速度で突き進むその銃弾は、一秒以下の静寂の後、今回の目標である空を飛び回っていた鳥を物言わぬ躯に変えた。

動きを止めて重力に引かれていく目標の姿を見つめながら、狙撃の成功にふと胸を撫で下ろす。実践ではないとはいえ、今回の状況はどうしても緊張を覚えるものであった。

その理由——俺の後方で佇んでいる、狙撃を見学していた二人の男女に振り返つて視線を向けると、彼らは皆興味深そうな目つきでこちらを見つめていた。

「ほう……。話には聞いていたが、本当にこの距離で当てられるのか」これだけでも陸で使える、と何やら不気味なことを呟いている金髪の少女は、陸上ウイツチのある部隊の隊長を務めている大尉であるらしい。見覚えがない以上は原作のキャラではないのだろうが、その立ち居振る舞いは原作に出ていたウイツチ達に劣らない実力者であることを感じさせる。

ショートの髪をオールバックにして流している彼女の姿は、可愛ら

しい顔立ちとは裏腹に、まるでライオンのような獰猛さを感じさせた。いや、実際彼女がこちらを見る目は、獲物を見る時のようにぎらついている。おそらく悪い人間ではないのだろうが、彼女に見られていると何とも言えない不安が背中を走った。

「……ふむ」

そして、もう一人。何事かを考え込む仕草をしている初老の男性こそ、このような状況を作り出した原因であり、俺が緊張せざるを得なかつた理由でもあつた。

見覚えはある。より正確に言えばこちらと面識のあるその男性は、カールスラント陸軍で中将の地位に就いている男である。本来はただの軍曹である自分が知り合える存在ではないし、以前に面識を得たのも偶然の要素が高かつたために彼と再び会うことになると予想もしていなかつたが、こうして再度姿を目にしている。

『——ああ、軍曹。ここにいたのか』

以前のように一人ではなく、おそらく部下であろう陸上ウイツチの少女を供にしたこの男性は、基地の外れで休憩していた自分に声を掛けってきた。幸か不幸か、自分は今日の訓練が一段落した後であり、ちょうど暇を持て余していた所であつた。今時間に余裕があるかどうかを尋ねてきた男性は、こちらが首を縦に振った瞬間、薄い笑みを浮かべた。

頼みがある、と事実上の命令を持つてきたその男性に連れられて、やつてきたのは基地の隅に広がる人気のない平地。そこで普段使っている銃と弾薬を渡してきた彼は、空を飛行する鳥を指差して、「狙つて撃て」と言つてきたのだ。

以前にミーナに似たようなことをされた覚えがあるから驚きこそは少なかつたが、流石にいきなりのことであつたから、言われるがままに鳥を狙撃するのが精一杯であつた。いつたい何の為なのかとか、何故ウイツチの少女もいるのだろうとか、そんなことを考える余裕が出てきたのは狙撃を終えた今し方のことである。

気になる。気になるが、果たして聞いていいものなのかどうかが分からぬ。現時点では中将閣下であり、そして史実通りに行くのなら

ばいざれは元帥にまで上り詰めるであろう、この男性——マンシユタインに対して口を開けと言うのは、いくらゲームの中とは言つても気軽に出来る事ではなかつた。

「中将、こりや拾い物ですよ。あの女なんかにや勿体有りません、ウチで引き取りましょう」

その彼に對して声を掛けたのは、ウイツチの少女だつた。ルツク大尉、と先程名を呼ばれていたその少女は、にやついた笑みを隠そうともせずにマンシユタインに向き直る。

その言葉を額面通りに受け取れば、俺の引き抜きを相談している……ことになるのだろうか。何と言ふべきか、その本人の前でするような話ではないと思うのだが、彼女は全く氣にしていないらしい。「……言葉を慎みたまえ、大尉。上官の侮辱は許されんぞ」

「これは失礼。しかしですね、眞面目に申しますが、こういう有望そうな奴を“あれ”に任せておいたら内憂が増えるだけじゃないですか。あのシンパ共のような、有能な馬鹿が一番質の悪い——」

「大尉」

短い、しかし強い口調の言葉で、マンシユタインは彼女の言葉を押し止めた。それを受けた彼女は少しばつの悪い顔をして、彼への謝罪の言葉を口にしてから言葉の続きを飲み込んだ。

“あれ”。彼女の言葉の中に出でてきたその代名詞が何を指し示しているのかは、ここ数日の基地内部の様子を見れば誰でも判別がつくことだろう。ウイツチを集中運用するあの作戦が無事に終了してから、数日ほど経つた今。ここパ・ド・カレー近郊の基地において、とある勢力が急速に勢いを増していた。

あの作戦の最後を搔つ攫つていった、地上攻撃ウイツチ達。作戦の際に強引な横槍を入れた彼女達は航空ウイツチ達の多くから鬱鬱を買つていたが、彼女達がその事態への対処として行つたのは航空ウイツチ達への言い訳と宥めすかしではなく、開き直つて対立姿勢を明らかにすることだつた。強固な装甲を誇る陸上型ネウロイに対する優位性、重装備や急降下爆撃による高火力。様々な地上攻撃ウイツチの利点を理由にして、彼女達は我が物顔に振る舞い始めたのだ。

勿論全ての地上攻撃ウイツチがそのように振る舞い始めたわけではなかつたが、その運動の中心になつたグループが空軍少将の肝入りだつたのが悪かつた。権力と地位に支えられた彼女達は徐々に影響力を増していくようで、仲間を徐々に、しかし着実と増やしていくらしい。

その情報を知つたのは作戦終了の翌日、特に怪我もなく復帰したエーリカから食事の席で話を聞いてからだが、やはりこうなつたのかという思いを先ず覚えた。

ストライクウイツチーズはライトな雰囲気の作品だが、派閥による抗争は原作でも描かれている。ブリタニアのマロニーとダヴデイングによる権力争いは本編の主筋に関わる話だし、派閥争いとまでは言わないが、意見や立場の違いによる対立等のごたごたは原作や派生作品等で何度も描かれている。

今回の事態のような、ウイツチ内部での派閥対立などは原作ではなかつたが、描かれていたとしてもおかしくはなかつた。いや、あくまでも原作では描かれていなかつただけであり、裏ではこのようなこともあつた、と考えた方が自然かもしれない。

ストライクウイツチーズはある程度のリアルを求めている作品でもあるから、この事態にもあまり違和感はなかつた。……違和感はないだけで、おそらくこの事態の原因なのであろうあの少将殿を見た時などには驚きや呆れを覚えはしたのだが。

作戦前にあの少将が行つた演説の内容は、何と言うべきか、胡散臭い政治家の言葉そのものにしか聞こえなかつた。耳触りのいい言葉を並び立てるあの演説方法は確かに乗せられる人間もいるだろうが、エーリカやバルクホルンのような一步引いた人間も多くいる。

言つてしまえば、あの女性は小物の悪役、というイメージが非常によく似合つていた。それが敵であるのならまだいいのだが、彼女は味方であるカールスラント軍の軍人であり、それも少将という高位に就いている人間だ。無能な味方は非常に質が悪いということは、多くの史実やフィクションが示している教訓である。

事実として、彼女はこのような事態を引き起こしているわけであ

り、おそらく目の前の彼らは彼女に対して良い感情を抱いていない類の人間であろう。……もしや、これは派閥抗争に巻き込まれ始めるのだろうかと、背中に冷や汗が伝った。

「すまんな、軍曹。今の言葉は聞かなかつたことにしてくれ」

視線をこちらに移してのマンシュタインの言葉に、無言で首を縦に振る。自分とて彼女が好きなわけではないが、明らかに面倒くさそうな派閥争いに首を突っ込みたくはない。彼としてもこちらにこれ以上の話を聞かせる気はないのだろう、さつさと話題を切り替えて行つた。

「それで、だ。君の狙撃能力は勿論評価に値するものだが、今回の本題はそれではない。前の話を覚えているかね？」

「は……。前の話、ですか？」

「ああ。記憶にないかね、君の固有魔法についてなのだが……」

固有魔法。その単語を聞いて暫し記憶を探り、数秒ほどしてから「ああ」と反射的に呟いた。忘れていたわけではない。彼にアイテムボックスを使わないように言われたこと等はしつかりと覚えていたし、数日前のことだから言われればすぐに思い出すことができた。

確かに数日前、『アイテムボックス』というゲームの仕様を自分の固有魔法だと誤魔化したことがある。その際に目の前の彼が何か意味深なことを言つていたことも思い出したが、それはつまり、彼の興味がこのアイテムボックスに向いているということになるのだろう。

アイテムボックスについては、正直自分でもよく把握していない。出撃訓練再出撃の毎日でよく調べる暇がなかつたということ、そもそもあれから無闇に使用しないように釘を刺されていたこともあるし、現状ではこの機能に頼らなくても何とかなつてゐるからだ。

制服だの、銃器だの、弾薬だの。そういうつたものは実際に身に着けてしまえばシステム上でも装備していると見なされるようだし、日用品や娯楽品の類はこの急造の基地では簡単に手に入るわけでもない。いざという時のために武器を隠し持つておくにしても、よく考えれば当たり前のことではあるのだが、ただの一兵士程度に武器を自由に出来る権限があるわけがなかつた。

故に現状では、アイテムボックスは『よく分からないけど便利そななもの』という認識でしかない。だがどうやら目の前の男は何らかの悪用法を思いついているのだろう、その表情は非常に真剣なものだった。

「あれですか。その、記憶してはおりますが……」

「口外はしていないね？」

「ええ、まあ。言われた通り使わないようにしていましたから、聞かれることもありませんでしたし」

「よろしい。ではこれから、幾つかの質問に答えて欲しい」

それからひどく真面目な顔をして、彼は様々な問いをこちらに投げ掛けてきた。

アイテムボックス、もとい異空間にはどれだけの量が入るのか。入れることの出来る大きさはどれほどまでなのか。入れることができるものの種類に制限は存在するのか。その殆どには満足な答えを返すことは出来なかつたが、それでも彼は何かしらの納得を得たようで、数秒ほどの思考時間の後には満足気な笑みを浮かべていた。

「そうか……。いや、なるほど。それならそれで、我々としては好都合だ」

「はあ……？」

「ああ、すまん、こちらの話だ。君が気にする必要はない」

そう言われましても、と。そんなことを言わればむしろ気になつてしようがないのが人情というもので、彼が何を考えているのかを無性に問い合わせたくなつてきた。

ただ、こういう時に突っ込んでしまうと、そのままなし崩し的に何事かに巻き込まれてしまう気がする。いや、おそらくゲーム的に考えれば既にイベントが何かが進行しているのだろうが、それでも面倒そうなことは避けておきたい。個人的には原作キャラ達ときやつきやうふふ出来れば満足と言うか、派閥争い的なサムシングに飛び込むのはゲームと言えどもご遠慮したいところである。

故に、ここは黙る。素直に黙る。不思議そうな表情を浮かべて、自分は何も分かつませんよアピールをするのだ。下手に反応を示し

てイベントを進展させてしまえば、どんなことに巻き込まれるのか想像がつかない。

石だ。石になるのだ。大きな流れには逆らおうとせずに、身を任せ同化するのだと昔の誰かも言っていた。そうすればきっと、ほら、彼も素直にこの場は帰ってくれるはずで――

「では、軍曹。君の今後に關して少し、話がある」

なんて思ったのが間違いであった。

明らかに、彼はこちらを簡単に逃がす気はない。先程までよりも遥かに増した威儀を放ちながら、こちらをじっと見据えてきた。

「……ええと、その。意図を伺つてもよろしいでしょうか」

「ふむ。意図か、意図は……。そうだな、君、アフリカ戦線についてはどれほど知つているかね」

「へ……」

アフリカ。予想外の単語を耳にして、一瞬呆けてしまう。

知らないはずもない。メタ知識で考えれば、今のアフリカは人類の最前線の一つだ。エズ運河の防衛を中心として繰り広げられている一進一退の攻防は、カールスラント、扶桑、リベリオン、ロマーニヤ等の各国の軍隊が集まる一大戦線である。

確か加東圭子、ハンナ・ユステイナー・マルセイユ等によつて『ストームウイッチーズ』が組織されるのが1942年の頃であつたはずだから、今はその前の段階、すなわちマルセイユやライーシャが必死に頑張つて戦線を支えている頃だろう。確か数か月後にはエジプトが陥落して、エズ運河が使えなくなるはずだ。アフリカは現在が一番過酷な時期と言つてもいいかもしれない。

それはともかくとして。そんなことを尋ねるということは、つまり、自分をアフリカ戦線に投入することを考えているということなのだろうか。

……まあ、そうだとしても特に文句はないのだが。原作キャラに会えるだろうし、アフリカなら派閥云々からも離れていられるだろう。

正直な話、あの地上攻撃ウイツチ達からは少し距離を置きたいのが心情である。

「それは、その。私をアフリカ戦線に——」

「話を急くな、軍曹。私は引き抜きに来たわけではない」

直接的に尋ねようとする、彼は即座に言葉を被せてきた。分かるね、とでも言いたげなその表情は、有無を言わざぬ迫力を纏っている。引き抜きではない。引き抜きではない、ということらしい。とりあえずそういうことにしておけと、側で会話を見守つているルック大尉がアイコントラクトを送ってきた。

「現在、アフリカへの第二次派遣が検討されている。陸軍が主として派遣される予定だが、空軍からも少数のウイツチが参加する予定だ」成程。まあ、別段おかしい話ではない。最前線に戦力を振り分けるのは常識的な判断であるし、アフリカも満足な戦いを行えているとは言い難い状態であつたはずだから、援軍を送るのは十分に“あり”なことだろう。

「空軍側の意見としては、戦線は非常に過酷なものであるため、選定はウイツチの自己判断に任せたいということであるらしい」

「……はあ」

「下の者達は聞いていないのか」

「ええ、まあ。おそらくは……」

「そうか。こここのウイツチには話を通しておく、と少将閣下殿は仰つた筈なのだがな」

さらり、と爆弾を投下していつた彼に対しても、思わず口の端を引き攣らせる。

つまりこういうことだ。アフリカに援軍を派遣する。陸軍は派遣する。空軍も少しだけ派遣する。空軍側は志願した者を派遣したいと考えている、が、そもそもその話を下に送つていらない。そうなれば志願者など出るはずもないのだから計画はストップしてしまい、陸軍側は計画自体を取り止めるが、空軍側が妥協を図つてくれることを祈るしかないのだ。

どう見ても陸軍と空軍のいがみ合いである。と言つよりも、文脈的

に考えれば彼とあの中将の対立話そのものであつた。どことなく史実の極東の島国で同じような光景を見た覚えがあるが、まさか遠く離れた歐州で目になることは予想外にもほどがある。

冗談かと笑い飛ばしたくなるが、決して笑い話ではない。少将一派と他グループの対立が予想以上に根深く、またそれが予想以上に問題を及ぼしていることは、ゲームの中であつても泣きたくなるような事実だつた。仮想世界に軍部のドロドロを持ち込んだ徹底的な現実感の出し方は、最早脱帽と言う他はない。でもここまでやる必要はないんじやなかろうか。

これを自分に、そもそも空軍であるはずの自分に聞かせるということは、まあ、やはりそういうことなのだろうが。

……派閥争いか。エーリカとか付き合つてくれないかな……。無理かな……。

「しかし、困つたな……。志願者が現れなければ、援軍の派遣が出来ん。そうなつては皇帝陛下になんとお詫びすればいいのか……」

困つた、困つたと素知らぬ顔で嘯く彼。隣のルック大尉は、面白がつた笑みを隠そうともせずにこちらを見つめている。

まあ、確かに、引き抜きではない。これは引き抜きではないだろう。実情にいつたい何の差異が生まれるのかは別にしても。

……いいだろう。乗つてやろう、乗つてやろうじゃないか。

「あの」

口を開く。すると彼は視線をこちらへと戻し、その言葉の続きを待つていた。

「でしたら、その。提案よろしいでしようか——」

???

フランツィスカ・ヴエラという少女を評するには、幾つかの言葉が必要となる。

カールスラント空軍所属、JG 3の航空ウイツチである彼女は、ネウロイの侵攻の際に政府によつて急遽徴兵された、そしてその中でもネウロイの進行速度が予想外の速さであつたために訓練課程を短縮された新米ウイツチ——俗に『速成組』と呼ばれている者達の一人である。ウイツチとしては最低限の教育、訓練のみを施されている彼女の能力は、実際総じて高いとは言い難いものであつた。

彼女は全体的に考えれば能力が低い、それこそ軍人としては最低限レベルの人材だと言えるだろう。特に身体能力に関しては劣つた部分が多く、基礎体力、基本的な筋力等々の様々な部分が平均を下回っていた。例えばランニングを行わせれば、走り切ればするものの息は絶え絶えになる、といった具合に。それでも最低限のものはあるのでも戦闘はなんとかなつているものの、長時間の戦闘となるとスタミナ、魔力双方の不足が目立つてくるのが現状である。

普通に使う分には問題ないが、決してオールラウンダーなスーパーエースにはなりえない。十把一絡げのウイツチの内の一つ、それがヴエラ軍曹に対する虚飾のない評価であつた。

ただし、それはある一点、彼女が得意とするものを除いてしまえば、という話でしかない。

狙撃。その一点のみにおいて、彼女は他のウイツチの能力を遥かに凌駕している。

遠くが見えて、狙えて、当てられる。単純な言葉にすればそれだけの芸当だが、それがいかに難しいことであるかは銃に触つたことのある人間ならば分かるものだ。遠距離、そして中距離からの精密射撃において彼女はかなりの高水準にいた。彼女に課されていたはずの訓練が一般的な軍のものから外れていないことを考えれば、彼女は天性の才能を有していることになる。

射撃精度、弾道予測、偏差射撃——狙撃に必要なこと全てを、彼女

は無意識下で行つてゐるようだつた。才能、という単語一つで片付けていいものかは悩ましいが、この狙撃能力のみが彼女をエースの座まで引っ張り上げてゐるのは事実である。先日無事にネウロイの撃墜数が五機を超えた彼女は、名実ともにエースの仲間入りを果たしている。勿論ハルトマンやバルクホルンといったスーパーエース達とは比べるのも烏滸がましい程度ではあるが、彼女の上官、つまりJG 3の隊長であるミーナとしては彼女の力を認めないわけにはいかなかつた。

「極端な話。抱え大砲を持たせておけば、今までも戦力としては十分だと思うのよ」

昼食時。最近空気が悪くなつてきた大食堂を避けて個人の執務室で食事を取つていたミーナは、同席していたバルクホルンにそう溢した。

抱え大砲とはつまり、携行可能な大口径銃のことである。シモノフPTRS 1941——オラーシャで実用化されたらしい対戦車ライフルなどはそれに数えていいだろう。勿論、流石に実用化したばかりの新型を他国に供与できるほどの余裕はオラーシャにはないものの、しかし例えとして、14.5mmの弾頭が秒速1000m以上という初速で撃ち出されるような銃を彼女が抱えれば、その火力が無駄なく敵へと撃ち込まれていくのだ。それがどれだけの効力となるかを考えれば、決して悪い考え方ではなかつた。

「ワンショット・ワンキル、ね……。まあ、効率を考えれば確かにそれが最善かもしれないが」

一撃必殺。スナイパーの理想であり理念を口にして、バルクホルンはメインディッシュのジャガイモを頬張つた。

敵を一撃で倒せるような大火力を持たせ、一撃で以て敵を効率的に撃破していく。目指すべき理想形で、だからこそ完璧に行うのは不可能に近い。しかしその戦法がヴェラという少女に合つていてこと、そしてヴェラであればその理想論に限りなく近づけるであろうこともまた、彼女は理解している。

戦場を共にしたばかりか一時は口ツテまで組んだ彼女は、ヴェラと

いうウイツチの能力を隠げにではあるが理解していた。

ヴエラ軍曹は、並だ。機動力も低い。速度も低い。飛び方の練度も低い。速度を活かした機動戦、即ちドッグファイトや一撃離脱といった戦法への適性は決して高くはない。ドッグファイトでは追いすがれない。一撃離脱では逃げ切れない。じやあ何が出来るのかと言えば、残るのは遠距離からの一方的な狙撃くらいだ。

しかしそれに天性の適性があるのだから、バルクホルンとしては、彼女は狙撃手として特化させるべきだと考えていた。生きる道があるだけマシだ、というものである。機動戦を貴ぶ最近の風潮には真っ向から反しているとはいえ、それの方が向いているならそうすればいい。少なくとも彼女はそういうスタンスであった。

ただ、まあ。問題があるとすれば、

「しかしミーナ、あいつを狙撃手として育てるとしても、だ。——誰があいつに狙撃を教えるんだ？」

「……そこなのよねえ。どうしようかしら、ホント」

ヴエラ以上の狙撃能力を持つた人材が、バルクホルンとミーナの交友関係の中にはいない。その事実を指摘されたミーナは、思わず頭を抱えていた。

勿論、彼女達の部隊にも狙撃手はいる。いるのだが、狙撃そのものに関してはヴエラに劣つてしまつて、いるのが事実であつた。勿論狙撃手としての心構えだの、腕前では解決できないあれこれに関しては教えることができるだろうが、肝心の狙撃そのものの教導を行うには些か力不足が否めなかつた。

その狙撃手達の名譽のために言つておけば、彼女達の練度は低くはない。スーパーエース達の部下として相応しいウイツチ達である。しかし、何と言うべきか、世の中には普通の人間の常識を容易に飛び越える存在がいるわけで。スコープなしに1000メートル先の目標を狙撃する存在の師匠を務めるには、如何せん間違つた意味での役不足であると言わざるを得なかつた。

……ふと。バルクホルンの脳内に、一人の少女の姿が映つた。彼女が知る限りでは最高の才能を持つ、もしかしたら狙撃においてもヴエ

ラを超えるそのウイツチならば、ヴエラに教導を行えるかもしれない。

その少女が今はアフリカにて、かつ彼女とは犬猿の仲であり、さらに入格的に尊敬できるとは言い難い人物でさえなければ、彼女は教導を頼みに行つただろう。つまり現状では選択肢にも上がらないということであるが。

「何処かにいないかしらねえ、都合のいい人材が」

「さあな。生憎、私も見当がつかん」

素知らぬ顔で嘯きながら、バルクホルンは食事を食べ進めた。そもそも彼女はミーナに誘われて食事を共にしているだけであり、彼女自身はヴエラの面倒を見る義務はない。流れで相談を引き受けてしまふが、仕事はあくまでも上官であるミーナの管轄なのだ。

ただ、一度知己になり、友誼を結んだと言つてもいい以上は彼女もヴエラのことを気に掛ける意思はある。彼女が面倒見の良い性格をしていることもあり、義務でなくともちゃんと考えてやる程度にはヴエラを気に入つていた。

本土からの撤退が完了し、ブリタニアかノイエで一息吐けたならば、伝手とコネを使つて教官を探してやつてもいいか——。そんなことを思う程度には、彼女は友人の部下に入れ込んでしまつていて。「そうだわ。確かに噂に聞いたんだけど、スオムスに腕の良い狙撃手がいるっていう話よ。それが事実であれば……」

「スオムスは激戦区だぞ。そこから貴重な人材を引き抜けるはずもないし、逆にヴエラ軍曹を送り込むわけにもいくまい。新米を放り込むにはあそこは危険すぎる」

「……まあ、そうね。出来ればやつぱり、ノイエかブリタニアで教育を受けさせたいし。扶桑とかまで行かせるのもねえ」

「平時ならともかく、この状況ではな。海を越えるとなると数年単位での話となるし、今はそこまであいつを遊ばせる余裕もない」

現在、カールスラント軍は敗走とも言える撤退戦の真っ最中である。資産や国民の後背地への移送を行う時間を稼ぐためにカールスラント軍は各地で遅滞戦術を行つており、このパ・ド・カレー方面で

も戦いは未だ続いていた。

先日の大規模会戦での勝利によつてある程度の余裕を得ることは出来たものの、それはあくまでも一時的なものでしかない。戦力はいくらあつても十分とは言えないこの状況で、貴重なウイツチを手放せる余裕はカールスラントにはない。たとえこの作戦が一段落したとしても、それでネウロイの脅威がなくなるわけではないのだから、出来る限り戦力を手放したくないというのが上層部の本音であろう。

事実、バルクホルンが聞いた噂によれば、上層部はカールスラント軍を後方で再編成するのではなく、主力をブリタニアやアフリカなどの前線に留めておく意向であるらしい。現カールスラント皇帝であるフリードリヒ4世が本国の早期奪還を強く主張していることもあって、ウイツチは基本的に前線に留め置かれることになるだろう、という話である。

「ま、どのみち、この作戦が片付けばJG3も何処かの戦線に配置されるはずだ。その時に上に要求してみたらいいんじゃないか？」

「……」

「……ミーナ？」

上。その言葉を聞いた瞬間、ミーナは表情を暗くしていた。食事の手を止めて、何かを言いたげに口を動かしながら、言葉を必死に選ぼうとしている。

真剣に、深刻に。彼女が纏う雰囲気が軍人の佐官としてのものに移り変わったことに、バルクホルンは厄介事の臭いを感じ取っていた。

「——きな臭いのよ。最近、上の方が」

呟くように、決して部屋の外には聞こえない音量で、ミーナは話しが始める。

「この頃、派閥の分化が顕著になつてているのは知つていてるでしょう。ゲーリング少将の閥が元気にやつてているのは気づいているでしょう

し」

「……まあ、なあ。あれだけ派手に動けば誰でも気づくさ。地上攻撃 ウィツチを母体に随分と支持者を集めているらしい」

ゲーリング少将。カールスラント空軍の最高責任者であるゲーリ

ング元帥を父に持つ、上層部に強いコネクションを持つ女性軍人。A軍集団に集つた将校の一人として作戦に従事している彼女は、先日の反攻作戦に前後する頃から自らが心酔する思想、即ち『ウイツチ中心主義』の賛同者を集め始めていた。

大っぴらに動いているわけではない。勧誘活動はあくまでも秘密裏に、表には出ない形で行われている。しかしゲーリング少将の“どりまき”の数が目に見えて増大しつつあることから、彼女達が何事を行つてているのは誰にでも明らかであつた。

「派閥自体は前からあつたし、抗争も少なからず存在はしていた。でもそれは、ここまで明らかなものではなかつた」

組織である以上、派閥やその対立はどうしても生まれてしまう。しかしカールスラント軍はこの未曾有の国難に対して、その対立を棚上げして協力体制を取り続けている。永続的なものではない。だが、この国難を乗り越えるまでは、お互いに妥協を図るべきである。それがカールスラント軍の総意である、はずだつた。

「少将はただの馬鹿じやないわ。この時点で派手に動き出した理由が、何かあるはずなのよ。派閥抗争の構えを取り出した理由が、何か……」

「理由か。単純に考えれば、先の反攻作戦を切っ掛けに、自分の主張を広めようとしているというところだろうがなあ」

「極論すれば、目的はそれでしようね。……でも、それに踏み切つた理由は？」

黙する。バルクホルンはただ、ミーナの言葉の続きを待つた。

『中心主義』は少数派よ。ノイエにも、それこそ軍部にも賛同者はまだ少ない。こんなところで派手に動けば、いずれ潰されるわ。ゲーリング元帥の影響力にも限度があるもの

「だろうな。このまま行けば、少将は何らかの責を取らされるはずだ。それが分からぬ奴でもない」

作戦の変更。強引な横槍。派閥の形成による、組織内の不和。ゲーリング少将がこれまでに行つてきた問題行動は、この作戦に参加した人々にとつては周知の事実である。

少将が地上攻撃ウイツチからの強い支持を得ていること、その支持者たちの戦力が戦線の維持には必要不可欠であることもあって現時点では不間に処されている——無論、他の上層部の人間からの糾弾はあつたらしいが、具体的な処罰には至らなかつた——が、作戦が終わつてしまえばそうはいかない。

A軍集団がブリタニアに渡り切つてしまえば、彼女はほぼ確実に責任を追及される。そして彼女が主張している『ウイツチ中心主義』もまた、何らかの抑圧がなされることであろう。

その未来は誰でも予想できる。勿論、その少将自身にも。そのはずであるが故に。

「でも、それなら、彼女はどうして行つたの？……簡単よ。そうならないための理由が、何かあるはずなの」

何が、ある。何かが起きている。少将が処罰されないための何かが確実に進行しているはずなのだ。

ミーナにはそれが分からぬ。ノイエやブリタニアとの通信は軍用以外に使用できない現状では、彼女にはその何かを探る方法もなかつた。少将閥の人間でもなく、そして彼女と対立している他の閥にも属さない中立的な人間である彼女は、こうした場面では個人以上の力を持たなかつた。

「ねえ、トゥルーデ。笑うかもしれないけど、私、凄い嫌な予感がするのよ」

「……ミーナ」

「証拠なんてないの。ただの勘と推測だけだけど、でも、凄い悪いことが起きそうな気がする。いいえ、もしかしたらもう何かが起きてるのかもしれないわ。そんな気がするだけだけど……」

バルクホルンは、笑わなかつた。笑えるはずもなかつた。

彼女は『エース』という人種がどんなものであるかを知つてゐる。自身もそうであるが故に、その言葉の持つ意味をよくよく感じ取つていた。

エースという生き物は、ある種の超人だ。死はない。運が良い。力が強い。とにかく牛乳を飲んでネウロイを殺す。その種類は様々だ

が、その共通項とも言えるべきものが一つある。

直感。第六感。啓示。そういった常識の外の感覚が、とにかく優れている。無意識の危険察知能力という面において、彼女達は間違なく人類最高峰の存在なのだ。

そして、彼女——バルクホルンの目の前にいる彼女こそ、そのエースの一角。『スペードのエース』『女侯爵』との異名を持つ、カールスラント空軍が誇る大エース、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ少佐の直感を無視できるほど、バルクホルンは危機感に劣るわけではない。

ふと。バルクホルンは、部屋の壁に張られた地図を見た。なんてことはない普通の地図。だが、彼女は無意識に、とある一点に目をやつていた。

　　歐州の要衝。偉大な帝国の末裔にして、地中海の霸者。

　　——ロマーニヤ公国を、無意識に見た。

ミッション1

史実の話である。1903年の12月17日、アメリカ合衆国ノースカロライナ州にて飛行実験を行つたライトフライヤー号。ライト兄弟によつて作られた世界初の飛行機であるとされているこの飛行機は、その日計4回の飛行実験を行うことになつた。

4回目の飛行での記録は飛行時間59秒、飛行距離260メートル。現代の飛行機と比べてしまえば玩具のような数字ではあるが、それでも飛行機という概念自体に疑念が抱かれていた当時からすれば、世界を揺るがすに十分な記録である。ライト兄弟やライトフライヤー号のその後は決して順風満帆なものではなかつたとはいえ、しかしこの記録を以て、『飛行機』という概念は人類史に名を輝かせることになるのだ。

ただし、1903年の4回目の飛行において、ライトフライヤー号は損傷を負つてしまつたことも忘れてはいけない。着陸に失敗してしまつたライトフライヤー号は昇降舵を損傷。さらに当日のノースカロライナでは強風が吹き荒れており、停止していたライトフライヤー号は運悪く強風によつて転倒してしまい、酷く損傷を受けてしまつたのだ。

風。ライトフライヤー号から現代のものに至るまで、飛行機を考える上では欠かせない問題である。さすがに強風であおられてしまうような飛行機は現代ではあまり存在しないが、空中を飛行するものなのだから、何の対策もしなければパイロットは飛行中常に強い風を感じることになるのだ。

ここで少し考えてみよう。一般的に言われていることでは、高度が100メートル上がるごとに気温は0.6°C下がるとされている。地上の気温が20°C程度だとすると、単純な計算をするとして、地上から高度500メートルでは17°C、1500メートルではなんと11°Cにまで下がってしまうのだ。

もし1500メートルの高さで飛行すれば、地上の温度から9°Cも下がつた空気が風となつて襲い掛かるのである。それは物理的に

もパイロットを阻害すると同時に、寒さによつてパイロットから体力を奪うことになるのだ。

その風を出来る限り防ぐために出来たのが風防である。所謂キャノピーと呼ばれるもので、これがあるお蔭でパイロットは風の脅威から身を守られている。飛行機の姿を想像して、そして機体前方のコクピットを覆う透明なものを想像してみてほしい。それが風防だ。

で、だ。話をストライクウイッチーズに移すとして、である。史実における飛行機に相当するウイッチには、風防が存在するのであろうか。

結論から言えば、ウイッチのシールドや保護魔法が似たような役割を果たしている。明確に誰かに教えられたわけではないが、体感的にそうなのでは、と何となく理解しているのが現状だ。完全に風を防いでいるわけではないものの、シールドや保護魔法を張つていれば明らかに感じる風が弱くなつていて。生身で飛行しているウイッチ達が誰も顔芸を晒していない理由が、何となく分かつたような気がした。

ただし、何度も繰り返すが、完全にシャットアウトしてくれるわけではない。風を和らげてはくれるが、寒い時はどう頑張つても寒いのだ。寒さは防げない。そもそも下半身が寒さ対策というものを何処かに置き忘れてきたかのような格好なのだから、寒さという敵に対しては真っ向から立ち向かうしかないので現状なのだ。

まあ、つまり、何を言いたいのかといえば。

「——へくちつ」

寒い。とにもかくにも、寒かつた。

あれから数日後。特に変な出来事に巻き込まれることはなく、派閥抗争が激化し過ぎることもなく、妙に平穏な日々を過ごしていた時のこと。ウイッチたる自分はいつものように訓練を終えて、そしていつものように出撃を命じられていた。

特に大規模な作戦が発令されているわけではない。なんてことはない哨戒任務で、基地の周辺空域を適当に飛んで帰つてくるだけの出撃任務である。毎日幾つかの隊が交代で請け負うことになつている

任務で、今日は自分の隊も当番に入っていたということであった。

時間は昼下がり。天気は曇りで、肌に感じる気温は地上でもかなり低めであった。こんな日に空を飛んだ日には風邪でも引いてしまうのではないか、と直感で感じてしまうような曇天の日である。

そんな状況でも妥協が許されないのが軍人であり、ウイツチである。そして悲しいことに今の自分はカールスラント軍のウイツチであつて、出撃命令に逆らうことが許されない身に出来るのは、温かなコーヒーを飲みながら見送つてくれた同僚たちに対して悪態を吐くことくらいであつた。

「ずずつ」

寒い。鼻腔の奥に居座り続ける鼻水を啜りながら、肌に感じる寒さに憮然としてしまう。気温の寒暖すら完全再現したゲームはこのゲームが初めてだろう。凄いとは思うが、開発者は実際にプレイする時のことを考えなかつたのだろうか。

ガリアは寒い。というよりも、ヨーロッパは意外と寒い場所である。暖流のお蔭で日本、もとい扶桑よりは暖かい場所も多いとはいえ、寒い時は非常に寒いのだ。

コートでも羽織つてくれればよかつたか、と一瞬頭を過るもの、結局下半身をどうにかしなければ解決する問題ではない。無性に痒みとかじかみを感じる二の腕だのを時折マッサージしながら、ガリアの上空を飛び続けていた。

変わり映えのしない田園風景、遠くに見える森林。視界の半球の大部分を埋め尽くす灰色の曇り空。自分以外には誰の姿もない、一人きりの空。

哨戒任務は少数のウイツチによつて行われるものだ。当番は隊ごとに回つてくるとしても、その隊の中から数人、あるいは一人を選んで任務に就かせることが一般的となつている。自分の隊ではなくじ引きによつてその時の担当ウイツチを決めることになつていたが、よりもよつて今日この時、自分が外れくじを引き当ててしまつたというわけである。

寒い空。愚痴を言い合う相手もいない、一人きりの飛行。任務の中でも最も人気のないものこそが、天気が悪い時の哨戒任務である。

「……あと、半分」

懐から地図とコンパスを取り出して、現在の位置を確認する。基地からそれなりに飛行を続けてきた今は、予定された哨戒飛行コースの中ほどにそろそろ差し掛かろうか、という段階に来ていた。

このペースで行けば、後半刻ほどで任務を終えることができるだろう。任務中に何も異常がなければ——例えばネウロイを発見したり、襲撃を受けたり、不審なものを見つけるようなことがなければ、哨戒任務はただ飛んでいるだけの簡単なお仕事だ。予定コースを単純に飛んでいくだけなら、そこまで時間がかかるものではない。

早く帰りたい。基地に帰つて、温かいコーンスープを飲んでほっこりしたい。そんな思考ばかりが脳内を埋め尽くしている。

頼むから何も見つからないでほしい。ネウロイが現れなければ、さつさと基地に帰つて温まることができるのだ。最近友人と言うべき仲になってきたエーリカと駄弁りながら配給された菓子類を摘まむことも、あるいはできるかもしない。

「シユトーレン……。ココアと一緒に、ブティングも付けて、クッキーもお皿に盛つて……」

配給目録の中にあつた甘味類を思い浮かべれば、多少気持ちが盛り上がりてくる。自分は然程甘いものが好きといふ訳ではなかつたはずなのだが、今が女性の体であるからだろうか、甘味というだけで思わず涎が出てきてしまった。

甘いお菓子。仲の良い友達。二つの餌を目の前に釣り下げれば、この退屈で辛い任務も何とかこなしてやろうという気持ちになつてくる。幾度か頬を叩いて、一先ずは任務に集中することにした。

『——あー、こちらパ・ド・カレー基地。哨戒中の各機へ告ぐ、定時連絡を述べよ。どうぞ』

と、タイミングが良いのか、悪いのか。気持ちを新たにした直後、通信機に基地からの通信が入ってきた。

時計を見ると、確かに基地へと定時連絡を入れなければならな

い時刻であった。哨戒中には不審なものを見つけた場合等の他にも、こうして定期的に連絡を取らなければならぬようになつてゐる。これが意外と面倒臭いのも哨戒任務があまり人気のない理由であつた。

「パ・ド・カレー基地へ。こちらJ G 3、フランツィスカ・ヴェラ軍曹。現在地図βの座標F—3を飛行中。周囲に異常なし、どうぞ」

『了解。引き続き予定進路を維持せよ、オーバー』

形ばかりの応答を交わして、通信を終了する。基地を飛び立つてから今まで、ネウロイの姿が現れる気配もない。

暇だ。とにもかくにも、暇なのだ。ゲームを始めた当初は空を飛んでいるだけでも楽しかつたけれども、あれから暫く経つた今となつては、空を飛ぶ感覚にも慣れ始めている。

ウイッチとしての生活も普段の訓練も、女性としての生活も。最初は新鮮であつても、慣れてしまえば段々と退屈を覚えてきてしまう。いや、女性としての生活云々はまだまだ一部のあれこれに興味津々だつたりするのだけれども、周囲に人目が多くすぎる基地内では下手なことはできないわけで。考えれば考えるほど生殺しになるだけだから、あえて考えないようにしているのが現状である。

エーリカとか、ミーナとか。色々と仲良くしたいしスキンシップを取りたい人たちは多いけれども、兎にも角にもまずは後背地に下がつて状況が一段落してからの話である。少なくとも周囲はそういう雰囲気であつたし、精神的日本人としてはそれに逆らう勇気もなかつた。

——とは、いえ。

「撤退したら、エーリカさんともたぶん離れ離れですよねえ……」

ブリタニアへの撤退が完了し、A軍集団が解散して戦略的再配置が行われた後のこと。その際に自分が配置される予定の場所を思えば、エーリカやミーナ達とは暫く会えないようになるのは明白で。それを考えば、今のうちにスキンシップを取つておくべきではという気持ちがむくむくと首をもたげてくる。

先日の中将閣下との話し合いで、アフリカに行かないかと誘われ

た。最終的な結果はまだ定かではないが、おそらく閣下の意向通りにアフリカへ行くことになるだろう。別にそれについては異を唱える気はないし、アフリカの星を一度見てみたいという気持ちも事実だから、こちらとしてもアフリカ行きは望むべきことだつた。少なくとも下手なその他の戦線に回されるよりは断然いい。

ただ、アフリカに行けばエーリカとは暫く会えなくなる可能性が非常に高いのだ。原作でエーリカがアフリカに来たという話はない。アフリカにいる限りは原作組、もといアフリカ組以外の面々と知り合える可能性は少ないということになる。

エーリカは可愛い。その可愛いエーリカと暫く会えないということを思うと、非常に惜しくなつてくる。そんな本音が浮かんでしまう程度には、彼女は本当に可愛かった。

アフリカと一緒に来てくれないかな。無理かな。無理だよね。

天使のような笑顔を浮かべる彼女の姿を脳裏に描いて、一つ溜息を吐いた。

「……ん」

瞬間。ふと、目端に小さな影を捉えた。遠くの地平の、森林の上空。その上に小さな何かが姿を現した気がして、思わずそちらに注意を向ける。

そちらにきちんと視線を向けた時には最早何の影もない。ただただ変わらない、先程と同じような光景だけが広がっている。しかしここには確かに、何かがいたはずであつた。

「ヴェラ軍曹よりパ・ド・カレー基地へ。不審な影を視認しました、どうぞ」

即座に通信機のスイッチを入れ、基地へと報告を入れる。もし気のせいだつたとしても、こちらの一念で無視するわけにはいかない。とにかく判断を仰ぐべく、返答を待つた。

『こちらパ・ド・カレー基地。詳細を知らせよ、どうぞ』

「現在予定進路を飛行中。十数秒前、2時方向に小さな影を一つ捉えました。一瞬のことであつたため距離は不明。現在は姿を確認できません、どうぞ」

『了解。軍曹、細心の注意を払つてその場所に向かえ。万一の場合は撤退を許可する、どうぞ』

「了解しました。これより確認に向かいます、オーバー」

通信を打ち切る。視線を手元に向ければ、段々と愛着を感じ始めてきた銃がその存在感を漂わせていた。正直これに頼る状況にはなりたくないが、万が一の場合——先程の影の正体が敵影であつた場合、交戦を余儀なくされるだろう。

……どうやら、基地で温かなお菓子にありつけるのは少し先になりそうだ、と。小さく舌打ちを一つして、舵を視線の先へと切る。

瞬間、左脚が爆発した。

「え」

正確に言えば、そのように見えた。遠くの森林から一条の光が走り、その光が左足を撃ち抜いたのだと理解するまでの数瞬、そんな呑気なことを呆然と考えていた。

視界が揺らいだ。左脚が急速に推力を失い、体が回転を始めていたのが原因だった。体は前に進んだまま、ゆっくりと錐揉みに回つていく。間違いなく、今のは敵の攻撃で。あの森林には敵が潜んでいて。理解した事実が急速に脳裏をよぎつていった。

左手を振る。反射的な行動だったが、その慣性によつて姿勢が並行へと戻つていった。

高度が下がつていくのが分かつた。片方だけの推力では、自分は飛べなかつた。地面がゆっくりと、しかし着実に、自分を引き寄せていく。

分かる。予想が出来てしまう。これから、自分は、きつと。

「あ——」

墜落する。

???

ドンレミ＝ラ＝ピュセルという場所がある。フランス、もといガリア北東部に位置するロレーヌ地方にある小さな村で、現代人にとっては『ドンレミ村』という名前の方が通りがいいかもしない。

1424年、ドンレミ村に生まれた当時12歳の少女、ジャンヌ・ダルクは神の啓示を受けたらしい。その後の彼女の物語は周知の事実の通りだが、さて、彼女が受けた“啓示”とはそもそも、その正体は何だったのだろうか。

宗教家に尋ねれば、それは本当に主からの啓示であつたのだと答えるだろうし、ひねくれた人間に聞いてみれば、彼女の脳裏に浮かんだ思考のノイズに過ぎなかつたと答えるかもしれない。そして、現代のエースウェイツチであるエーリカ・ハルトマンとしては、それは所謂“第六感”であつたのではないか、という意見だつた。

エーリカを始めとしたエース達は、時折、超感覚的な何かを感じ取ることがあつた。それは敵襲の予感であつたり、攻撃の予測であつたり、攻撃を命中させるための弾丸の軌跡であつたり、そういういつたあれこれが時たまにふと、脳裏を過ぎるのだ。

勿論、これと同様のものがジャンヌに起きたというわけではないだろうが、それでもこういつた類のものが実際の“啓示”的正体ではないだろうか、というのがエーリカの認識である。信仰心に篤いわけでもない彼女として見れば、ジャンヌ・ダルクが神の力で唐突にガリアを救つたというよりは、ジャンヌ・ダルクがエースパイロットのような類であつたからガリアが戦争に勝つことができた、と言わされた方が余程信じられる話であつた。

「——ん？」

そして、今。エーリカの脳内に、ふと“啓示”が降りてきたのである。

「……フラウ？ どうした、いきなり」

彼女の側で読書に勤しんでいたバルクホルンが、突然神妙な顔つき

となつた彼女を見て、声を掛ける。

久しぶりに言い渡された休養日ということで、お互いが部屋の中で好きなことを過ぎてしていた時であつた。それまでは笑顔でじやがいもを頬張つていたのに、いきなり手を止めたかと思えば真剣な雰囲気を醸し出した彼女の姿は、ある種の氣味の悪さを感じさせた。

「いや……。なんというか、悪い予感がして。ヤバいことが起こつた感じの……」

「予感？」

「うん。ただ、ふと、頭の中に浮かんできただけなんだけど。でも確かに嫌な予感がする」

気にし過ぎだ、とは、バルクホルンには言えなかつた。エースが感じる第六感の意味を、彼女自身もエースであるが故に、彼女は熟知している。

嫌な予感。先日、ミーナも口にしていたその言葉を、ただの気の迷いであると断じることはできなかつた。

「そうか……。具体的に何がどう、というのは分からぬのか？」

「……分かんない。漠然と、『このままだとまずい』って感じがするだけ」

「ううむ。そうか、いや、しかし……」

分からぬ、というのは当然のことだ。エーリカの脳裏を過ぎつたのはただの予感であつて、未来予知ではない。それができるのは噂に聞く、スマッシュ空軍のエースウイッチぐらいのものであろう。

ただ、具体的なものが何も分からなければ、その“嫌な予感”とやらの対策を行うことも難しいのは事実である。少なくとも、他の軍の人間は話をまともに聞いてくれないことは間違いない。

なら、まずは色々な可能性を当たることから始めてみるべきか——と、バルクホルンが考えた矢先。既に部屋の扉に手を掛けていた、エーリカの姿を目にした。

「お、おい、何処に行く？」

「ミーナのところ。何か起きてないか、とりあえず聞いてみる」

「いや、待て、あいつも結構忙しいんだ。話を聞くにしても、他の奴か

ら——おい、待て、無視して行くんじゃない！　たまには私の話を聞けハルトマン！」

バルクホルンの話を聞いているのか、いなかの話。話を途中で切り上げ、さつさと部屋の外へと飛び出していったエーリカの後を、慌てて彼女も追うこととした。

軽く服の襟を正して、鏡で髪を確認して。最低限の身だしなみを整えた後、小走りで廊下を進むエーリカを追いかける。

……ふと。宿舎の廊下を歩くバルクホルンの視界に、宿舎で暮らす他のウイツチ達の姿が映った。

笑顔を浮かべ、友人達と談笑し、笑い声を上げる少女達の姿。それはある種の平穏を感じさせるような光景で、それだけを見れば、ここが最前線の軍事施設の中であることを忘れてしまうかもしれない。撤退戦の当初は皆が真剣な顔つきで、鍛錬に励み、今のような余裕は持てていなかつた。

そして、それは、つまり。——ウイツチ達の気が緩んできていることを示す、紛れもない証でもあつた。

「……」

小さく、バルクホルンは表情を歪める。ウイツチ達の士気が緩んできている原因は、あの少将であつた。彼女達の派閥が殊更に先日の勝利を喧伝し、ウイツチという存在をそこかしこで褒め称えたその行動は、確かに実を結んでいた。彼女達の影響を受けたウイツチ達は、ウイツチである自分に対して自信を持った。持ちすぎるようにはつた、とも言える。自信と優越心が、やがて楽観に繋がつてしまつた。

勿論、それだけが現状の理由ではない。今回の撤退戦は既に長い期間に亘つて行われているため、作戦が一段落しつつある今、これまで張り詰めてきた感情が途切れつつある、ということもあるだろう。

それにウイツチが笑顔を浮かべられるような余裕があること自体は、決して悪いことではない。戦うにしても、余裕は必要だ。変にストレスや状況に追い込まれていないという点では、現状にも好ましい部分はある。

しかし、それを踏まえても、バルクホルンはやはりあの少将のこと

を好きにはなれなかつた。あの少将がカールスラント軍にもたらす不和は、徐々にその度合いを増しつつある。先日ミーナが抱いた“嫌な予感”を、彼女も段々と抱きつつあつた。

宿舎を出て、ミーナが働いているであろう司令部へと歩みを進める。空を見上げれば、黒々とした曇り空が一面に広がつていた。雨が近いのか、少しの肌寒さすら感じる外の空気に、胸の中の不安感がむくむくと膨らんできた。

数分程歩いた後、目的の司令部の前へと辿り着く。早速、中に入る……とはいがず。

「なんだ？」

「……さあ」

中から聞こえてくる騒がしさに、二人はふと足を止めた。

普段であればもう少し静寂な、厳かとも言える雰囲気を纏う司令部が、今は何処か慌ただしい喧騒に包まれている。何かがあつたのかは確かだらうが、さて。もしや嫌な予感が早速当たつてしまつたのかと、二人は無言で顔を見合させて、

『——誰でもいい、ベテランのウイツチを連れてこい！　今すぐにだ！』

建物の中から聞こえてきた叫び声に、即座に反応した。声が聞こえてきた方向を確認し、場所を推測し、全速力でそこまで走り抜ける。自分が今何をするべきなのかを、二人は半ば本能的に理解していた。叫び声が聞こえてきた部屋は、司令部の片隅にある通信室だつた。慌ただしく人が往来する廊下を急いで駆け抜け、一際騒がしい雰囲気で包まれている通信室の前へと辿り着く。

ふと、唐突に。バルクホルンの脳裏に、とあることが浮かんだ。自分達は休養日となつてはいるが、他のウイツチ達は任務に組み込まれていること。哨戒任務も、通常通りに行われていること。そして——本日の哨戒任務の当番は、J G 3であつたこと。その全てを意識してしまつた時、彼女は最悪の想像を思い描いた。

見知った少女。彼女が血に塗れ、地面に倒れ伏している。体はあちらこちらが折り曲がり、よく見れば頭からはピンク色の何かがはみ出

ていた。それは、ほんの数分前まで生きていたとはとても思えない、
凄惨な“なれの果て”で――

「……失礼します！ JG52のバルクホルン中尉、及びにハルトマン少尉であります！」

その想像を振り払うかのように、バルクホルンは大きな声を張り上げて、数回扉を叩いた。彼女はそれなりに戦歴が長い。他人事ではあるが、ウイツチが任務中に至るかもしれない可能性について、その事例を実際に見聞きすることが何度もあった。

彼女の記憶に確かに刻み込まれた、誰かが二階級特進していくその一部始終が、何故かこの時にフラツシユバツクしていた。

『ウイツチか！ 誰でもいい、今すぐ中に入れ！』

「了解いたしました！ 両名、入ります！」

返事は、逼迫した声をしていた。緊急事態が発生していることは最早明らかだつた。

背中を伝う汗に気づかないふりをしつつ、彼女は通信室の中へと入っていく。部屋の中には数名の通信手と、何処かの責任者だろうか、大佐の階級章を着けた一人の男性が佇んでいる。その誰もが険しい表情をしていて、焦りを無理やりに押し殺した顔をした大佐の男が、二人に声を掛けた。

「緊急だ。細かなあれこれは問わん。不時着の心得はあるか、それだけを答えろ」

不時着。その言葉から、バルクホルンは嫌な単語を連想した。彼女の背に浮かぶ汗の量が、心なしか増えていく。
「……あります。私は正規の訓練カリキュラムを受けていますから、着水を含めた不時着の訓練の経験があります」

「そうか。では、今すぐ無線を代わり、それを通話先に伝えたまえ」
その大佐の言葉と共に、通信手が受話器とマイクを差し出してくる。促されるままにバルクホルンは通信手の椅子へと座つて、受話器を耳に当てた。

「もしもし。こちら、バルクホルン中尉だ。今通信を代わった――」

『——あ。バルクホルン、中尉』

彼女は、ひゅう、と息を呑んだ。

『すいません。森に、敵が潜んでたみたいで。攻撃されて、左脚のエンジンが止まつたんです』

受話器から聞こえてくる声は、彼女も知つてゐる少女のものだつた。彼女も親しみを感じる、そして友人を助けた恩人でもある、真面目な雰囲気をした少女だつた。

『だから、その。……私、たぶん、墜落します』

その少女が、今。彼女の手が届かないところで、命の危機に瀕していた。

マイクを握る手の力が、少し強くなる。ギチリ、と奥歯を噛み締めた。音が鳴り、前歯は唇を噛んでいたのか、彼女は少しの鉄の味を感じた。

「……落ち着け。いいか、慌てるな。適切に不時着を行い、救援を待て」

少女——ヴエラに、そして自分自身に言い聞かせるために彼女が口にした声は、彼女が想像した以上に冷静なものだつた。

それを意識すると、彼女から焦りが急速に引いていく。今この時、焦りは邪魔でしかない。冷静に事態に対処しなければならないことを、彼女は明確に意識するようになつた。

『不時着、ですか。とは言われても、どうすればいいのか……』

『まずは平地を探せ。周囲に、滑走路にできそうな場所はあるか?』
『えっと……。一応、道路がありますが、所々で曲がりくねつてしまし
て。直線の場所はなさそうです』

「道路の周囲は?」

『畑です。ここは、田園地帯なので。雨が降つたのか、ちょっと沼みた
いになつてますけど』

バルクホルンの頭脳が、高速で回転を始めていく。理論的に情報を組み立てて、何処かにあるであろう筋道を必死に探し出そうと試みていた。

どうすれば、ヴエラを助けることができるのか。彼女が無事に不時着するための方法は何なのか。彼女の頭脳と、エースパイロットとしての直感が結論を導き出すまでに、そう時間はかからなかつた。

「よし。軍曹、その道路を使うぞ。出来る限り真っ直ぐな場所を探して、そこに着陸できるようには高度を下げる」
『は、はい。でも、たぶん、オーバーランしますよ?』
「可能な限り道路上で慣性を殺したうえで、一番沼のようになつている畑に浅い角度で突つ込め。泥だらけにはなるかもしけんが、命は助かるはずだ』

泥は、体の動きを鈍らせる。半ば液体のようなものだから触感は柔らかいが、柔らかく形を変えるものだからこそ、こちらの体を柔軟に拘束してしまうのだ。

その泥の性質が、今はありがたい。道路で消費しきれない慣性を受け止められるだけのクッショニングが、ヴエラの周囲に運良く用意されていたのである。

彼女の体は泥だらけになるし、ユニットは長時間の再整備が必要になるだろう。彼女自身も、あるいは骨折などの怪我を負うかもしない。

しかしそれでも、一命は取り留められる。この筋道ならば、最悪の想像だけは避けることができた。

「安心しろ、軍曹。お前の命は助かる。私を信じて——』

受話器の向こうから、爆音が聞こえた。

『——敵の、第二射を、受けました！　ユニット破損！　右足の推力も急速に低下します！』

バルクホルンの顔から、一切の表情が抜け落ちた。
全ての意味が無くなつたことを、彼女は理解した。

『バルクホルン中尉！　あの、私は、どうすればいいんですか！』

必死に、ヴエラが叫び声を上げている。その問いかけに答えることは、バルクホルンには出来なかつた。

口の中が乾いていく。手が震えて、自分自身の精神が何処か遠くに離れていくような感覚を彼女は感じていた。

『時間が、地面が、迫つて！　もう十秒も！』

ヴエラの声だけが、通信室に響き渡る。あれほど騒がしかつた部屋の中は、いつの間にか不気味なほどに静まり返つていた。

『誰か応答して！　誰か、お願ひ、助け――』

声が、途切れる。

何かがぶつかる衝撃音と、硬い何かが壊れる破碎音が聞こえたと同時に、通信は切れてしまった。最早受話器からは何の音も聞こえず、ただただ、静寂のみが部屋の中を支配していた。

言いようもない感情が、バルクホルンの体内を駆け巡る。目の前の機械を、力任せに殴りつけようとして、理性がそれを押し止めた。

「さて」

ようやく静寂を終わらせたのは、大佐の男だつた。

「誰か、部屋で執務を取つてゐるであろうA軍集団の御歴々に、事態を知らせてくれ。ネウロイが周囲に潜んでいたことと、ウイツチのこと……」

チラリ、と一度バルクホルンの方を見て、言葉を続けた。

「欠員だ。補充と、再編成の書類を用意する必要がある。バルクホルン中尉はJG3の面々と、佐官以上のウイツチへの事態の伝達を頼む」

「……はい。了解、しました」

軍人としての矜持が、バルクホルンの心を無理やりに叩き起こす。命令を受けたならば、何があろうと、それを行わなければならない。彼女の体を再起動させるために、命令という免罪符は確実に役立つていた。

そして、と男は振り返つて、
「ハルトマン少尉もいたな。貴様は万が一に備えて、即応状態で待機を――」

そこまで言いかけて、言葉を止めた。それにつられたバルクホルンもまた、エーリカがいたはずの方向へと振り返る。

そこには、誰の姿もなかつた。確かに部屋に一緒に入ってきたはずの彼女は、いつの間にか何処かに姿を消していた。

何処に行つたのか、と考えを巡らせるよりも早く。遠くの方から、エンジンの音が聞こえ始めた。